312.22
To3473s

0005310000

0005310-000

３１２．２２－Ｔｏ３４７３ｓ

支那ソヴェート運動の研究

東亜経済調査局

１９３４

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

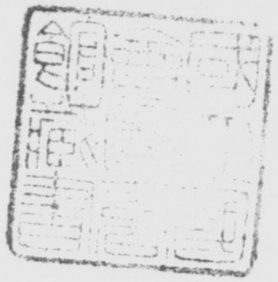
762

經濟資料別册

支那ソヴエート運動の研究

東亞經濟調査局

2.22
03473A



例言

一、本書は今や世界の脅威とさへなりつゝある支那ソヴエート運動の現狀並にその將來に關して、左右何れの立場にも偏せず、冷靜なる第三者の立場より之を研究し、以て我が識者の參考に供せんが爲めに編纂したものである。

二、此の方面の研究に關しては、既に我が外事協會並に大阪對支經濟聯盟より有益な研究書が刊行せられてゐる。仍て本書は能ふ限り右二書と重複せざる部分に主きを置いて編纂した。

三、本書の資料に關しては、能ふ限り各方面より蒐集して其の完璧を期した積りであるが、何分問題の性質上、その蒐集には最も困難を感じた爲め、不充分の點が尚ほ多い事と思ふ。若し此點に關して識者の御教示を得ば幸甚である。

四、本書は問題の性質上公刊にせず、特定の識者にのみ頒布した。

五、本書の執筆は局員雪竹榮之を擔當した。

昭和九年十二月

東亞經濟調査局

国立国会
25.3.31
図書館

116466

支那ソヴエート運動の研究　目次

緒　論……一
第一篇　支那ブルジョア民主主義革命の先驅としての太平天國革命……五
　第一章　緒　言……五
　第二章　太平天國革命發展の原因……七
　　第一節　外的原因……七
　　第二節　內的原因……一九
　第三章　太平天國革命沒落の原因……二七
　　第一節　革命內部の腐敗と崩壞……二七
　　第二節　討伐軍の成功……二九
　　第三節　プロレタリアートの力量の薄弱……三二
　第四章　結　語……三三

第二篇　中國共産黨の現狀……一五五
第一章　中國共産黨の成立……一五五
第二章　中國共産黨の發展經過概要……一五八
第一節　中國共産黨の萌芽時代……一五八
第二節　中國共産黨の全盛時代……一六一
第三節　中國共産黨の遁生時代……一六五
第三章　近代に於ける支那ブルジョア民主主義革命の本質……一八三
第四章　中國共産黨の實體……一八七
第一節　中國共産黨の組織……一八七
第二節　中國共産黨の外廓運動機關……一九四
第三節　中國共産黨の勢力——黨員數……二〇二
第四節　コミンテルンと中國共産黨との關係……二〇八
第五章　中國共産黨政綱政策の分析……二一三
第一節　中國共産黨の政綱……二一三
第二節　中國共産黨政策の變遷……二一三
第三節　現段階に於ける中國共産黨の政策並に活動方針……二一三
第六章　中國共産黨の內訌と分裂……二一三
第一節　內訌分裂の概觀……二一三
第二節　各派分裂の狀況……二一三
1　派別の概說……二一三
2　各派成立當時に於ける主要幹部及び其の勢力範圍……二一六
3　各派の相互鬪爭の結果と其後の情勢……二一七
第三節　中國共産黨分裂の原因……二一八
第三篇　共産軍の現狀……二三〇
第一章　共産軍の成立及び其の發展……二三五
第一節　共産軍成立の沿革……二三五
第二節　共産軍の發展經過概況……二三七
第三節　共産軍將來の發展目標……二三七
第一項　發展の趨向……二三七
第二項　四川赤化の客觀的情勢……二三七

第三項　四川の富源と自給自足……一八一
第四項　結　言……一八三
第二章　共産軍の本質……一八五
第三章　共産軍の組織と編成……一九一
第一節　共産軍の組織と内容……一九一
第二節　中國共産黨と共産軍との關係……一九六
第三節　共産軍の戰術……二〇八
第四節　共産軍の武器……二〇九
第四章　國民政府の共産軍討伐……二一三
第一節　討伐戰の經過……二一三
第二節　共産軍討伐に對する方策並に施設……二一五
第三節　共産軍討伐と南京政府の矛盾……二二九
第五章　共産軍に依る被害狀況……二三一
第四篇　ソヴエート區域の現狀……二三七
第一章　支那ソヴエート政權の發展過程……二三七
第一節　支那ソヴエート政權樹立問題と二つの見解……二三七
第二節　支那ソヴエート政權の史的發展……二三一
第一項　支那ソヴエートの起源……二三一
第二項　支那ソヴエート政權建設の戰略的發展……二三三
第三節　支那ソヴエート區發展の數量的考察
並にその地理的範圍……二三八
第四節　支那ソヴエートの領土と人口……二四八
第二章　支那ソヴエートの組織……二五一
第一節　支那ソヴエート政府の成立過程並に組織原則……二五一
第二節　中國共産黨と支那ソヴエート政府との關係……二五四
第三章　支那ソヴエートの經濟政策……二五八
第一節　はしがき……二五八
第二節　支那ソヴエートの經濟政策綱領……二五九
第三節　支那ソヴエートの暫行稅則……二六二
第四章　支那ソヴエート區域に於ける各種基本政策の實施概況……二六九

第一節　緒　言……一
第二節　支那ソヴエート政府の發表せる經濟政策の實施概況……一〇
第三節　國民政府の見たるソヴエート政府經濟政策の實施概況……一六
第四節　支那ソヴエート區の土地政策に對する國民政府の批判……二九
第五節　我國左翼支那研究家の見たる支那ソヴエート政府の
經濟政策の實施概況……二九五
第五章　支那ソヴエート政治の效果如何……三一三
第六章　支那ソヴエート政治は結局失敗せるか？
——江西省中央區放棄と關聯して——……三一五
第五篇　結　論……三二三
第一章　共產主義運動の支那の社會上並に經濟上に
及ぼせる影響……三二三
第二章　支那に於ける共產主義運動と日本……三三三
第三章　支那ソヴエート運動の見透しと其の客觀的諸條件……三三九

附　錄

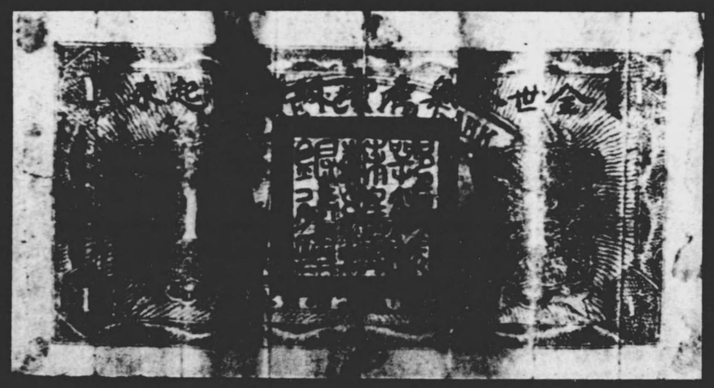
ソヴエート區に關する資料文獻……三五五
一、現段階に於ける中國ソヴエートの全貌……三五七
二、支那ソヴエート政府の經濟政策批判……四〇三
三、ソヴエート區に於ける經恐濟慌……四一五
四、ソヴエート區及び共產黨に關する基本法規
憲法、土地法、勞働法、共產黨黨章……四二九

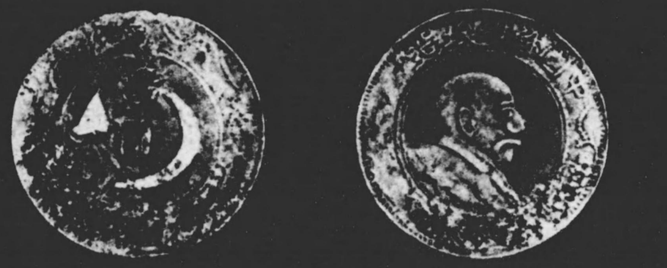
卷頭寫眞

1共產黨の傳單　2ソヴエート政府の傳單及び佈告　3共產軍の軍旗
4ソヴエート政府宣傳隊の標識　5共產軍のスローガン……一
1少年先鋒隊　2女子先鋒隊　3遊擊隊の隊伍……二
1江西工農銀行發行の一元紙幣　2同紙幣の裏面　3ソヴエート中央政府發行の一元銀貨……三
1中華ソヴエート共和國國家銀行湘鄂西特區支店發行の一元紙幣　2同上發行の二角紙幣
3同上發行の一角紙幣　4同上發行の一元紙幣の裏面……四
1硼樓　其一　2硼樓　其二……五

1國民黨軍の塹壕　2構築中の棲硐……六
1太平天國革命軍の發展圖……七
1共產軍發展概況圖……八

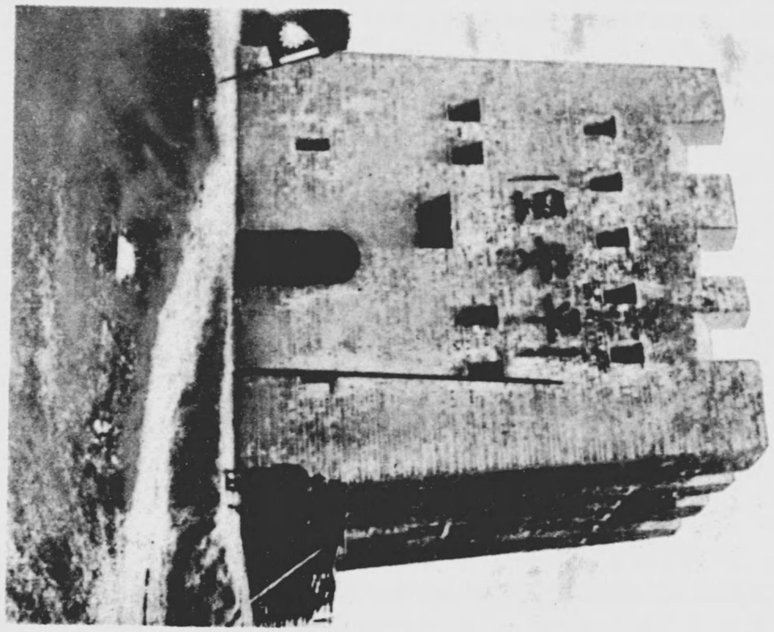
上圖　向つて右はソヴエート政府の傳單及佈告　左は共產黨の傳單
下圖　向つて右は上は共產軍の軍旗　下は共產軍のスローガン　左はソヴエート政府宣傳隊の標識





上圖 江西工農銀行發行の一元紙幣。人物像は向つて右はマルクス左はレーニン。(労農の生産を增加して社會經濟を發展せしむ)とあり 中圖 同上紙幣の裏面 下圖 ソヴエート中央政府發行の一元銀貨人物像はレーニン

上圖 少年先鋒隊 中圖 女子先鋒隊 下圖 遊擊隊の隊伍

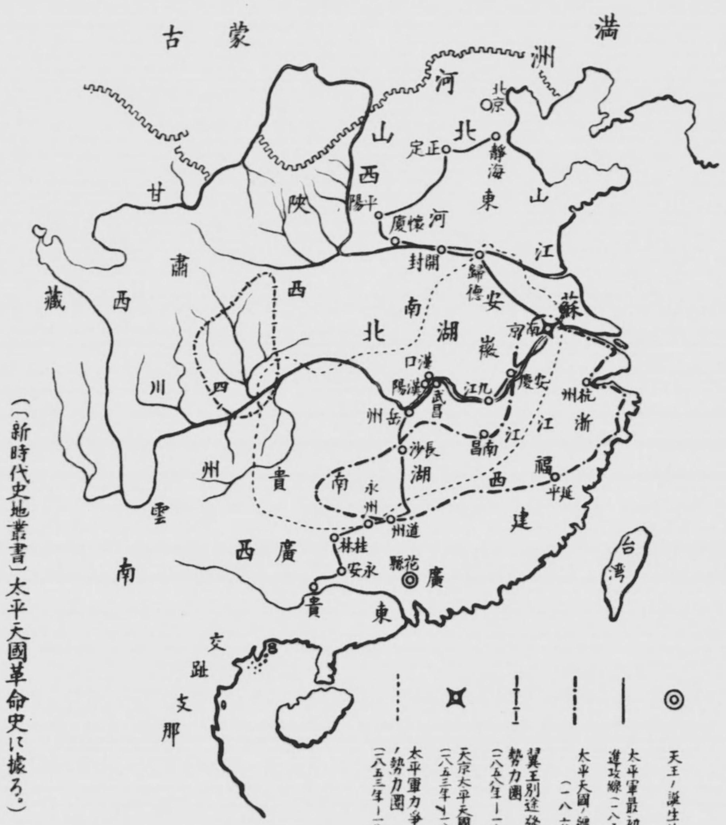


硐　樓　（立てるは步哨）
（本文第二一四頁參照）

硐　樓　（立てるは步哨）
（本文第二一四頁參照）

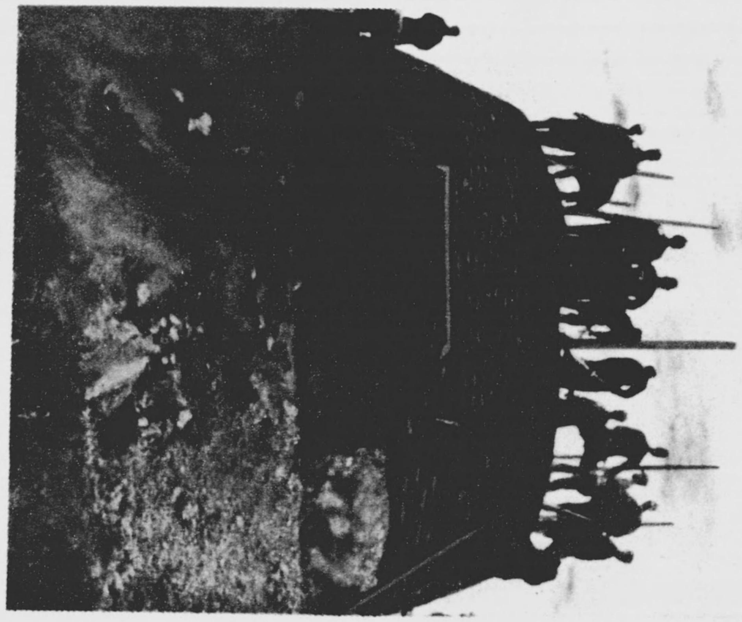
上圖　中華ソヴェート共和國國家銀行湘鄂西（湖南湖北西部）特區支店發行の一元紙幣　中圖右　仝上發行の二角紙幣　中圖左　仝上發行の一角紙幣　下圖　上圖紙幣の裏面（全世界無產階級聯合して立て）とあり

太平天國革命發展圖

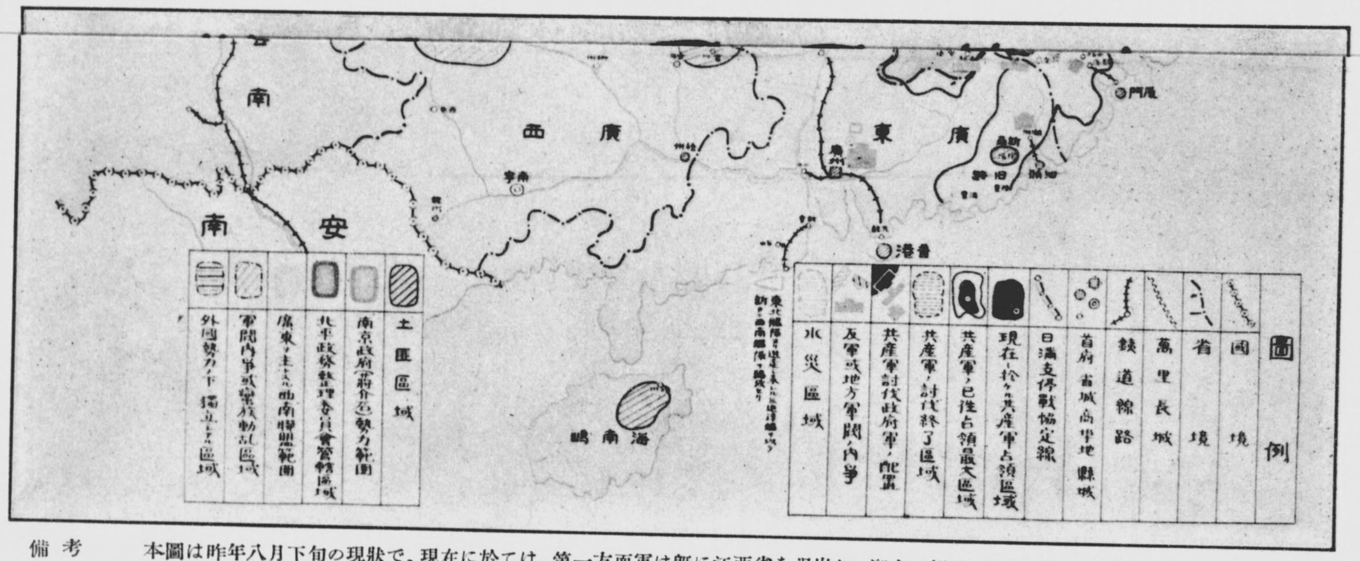


（新時代史地叢書）太平天國革命史に據る。

國民黨軍の暫壕



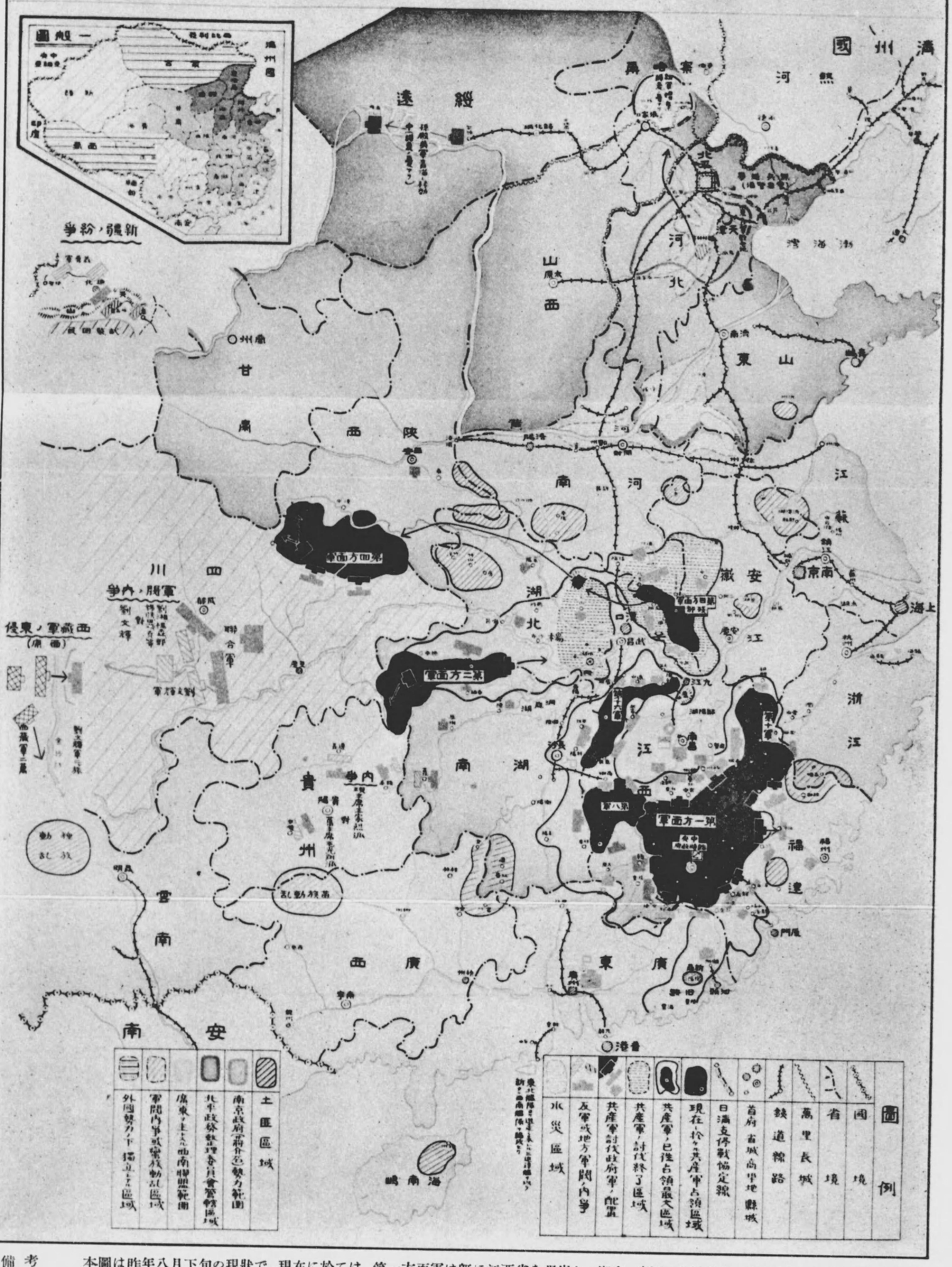
構築中の圍樓



備考　本圖は昨年八月下旬の現狀で、現在に於ては、第一方面軍は既に江西省を退出し、湖南、廣西、貴州省境一帶に在り、又第四方面軍もその大部分は既に四川省内に蟠踞してゐる。

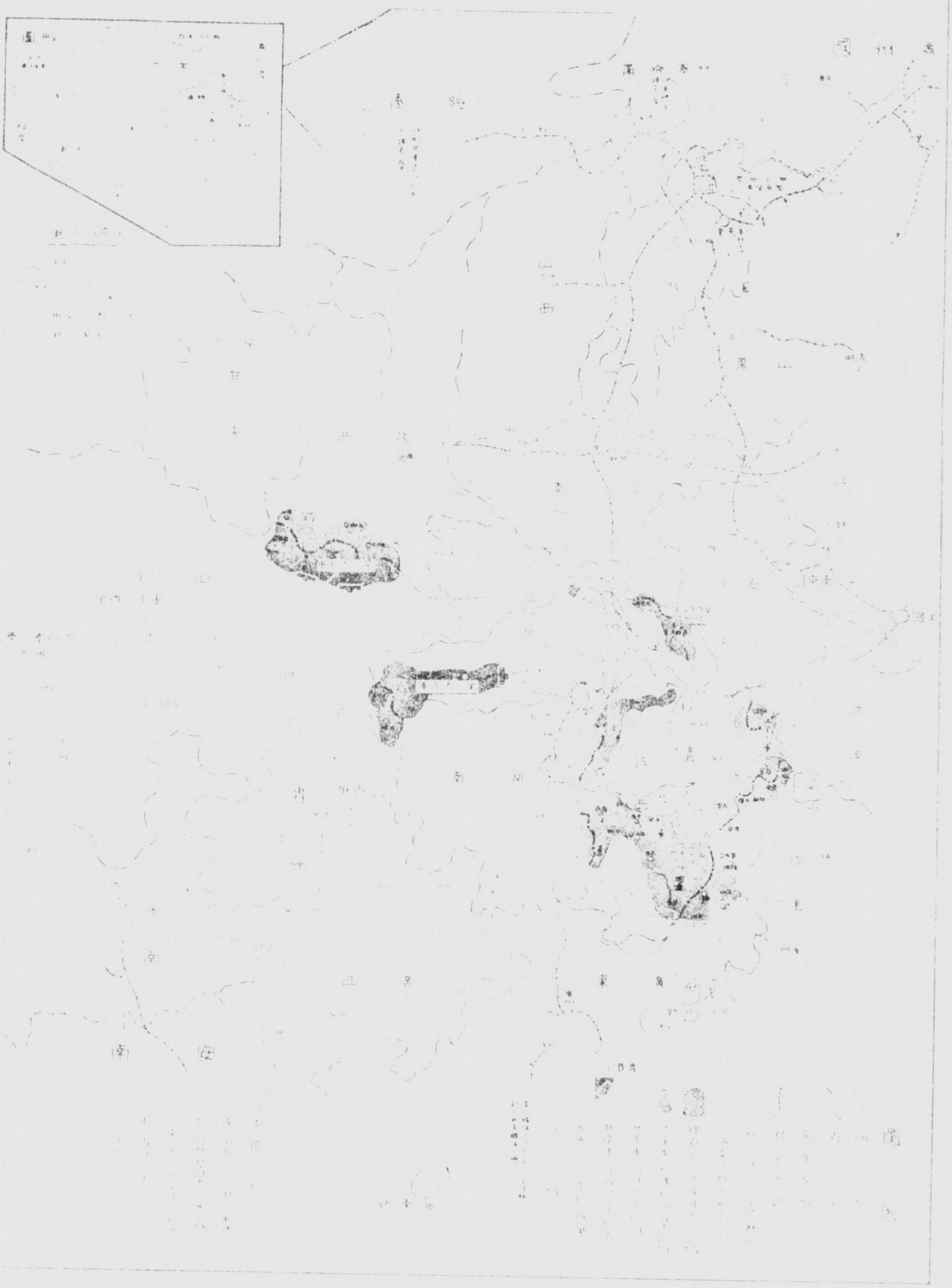
中華民國之現狀

昭和八年八月下旬調



備考　本圖は昨年八月下旬の現狀で、現在に於ては、第一方面軍は既に江西省を退出し、湖南、廣西、貴州省境一帶に在り、又第四方面軍もその大部分は既に四川省内に蟠踞してゐる。

中華民國之現狀



支那ソヴエート運動の研究

緒論

支那目前の形勢中、その最も主要なる特徴は、とりも直さず二つの政權の尖鋭な對立、國民黨政權の動搖と崩壞に對し、ソヴエート政權の根強き發展と强化とである。

蔣介石は、これまで前後五回に亘つて、而も近代的の優秀な武器と約六十萬の大軍を動員し、外人顧問をも聘用して大規模にソヴエート政權の潰滅を企圖したが、尙未だ完全に成功するに至らず、蔣介石をして

『他の軍閥の叛亂は癬疥(皮膚病)に過ぎないが、共產黨の軍隊に至つては心腹の患である。』

と叫ばしむる程、共產軍は今や南京政權にとつては、他の封建的諸軍閥とは比すべくなき强敵と化してゐる。

由來支那に於ては、王朝の沒落は常に百姓一揆——農民暴動を端緒とし、屢々一王朝の反逆者は農民を王位簒奪の武器として利用して來た。遠くは秦代末に起つた陳勝、吳廣、西漢末の赤眉、東漢末の黃巾、隋末の李密、竇建德、唐末の王仙芝、黃巢、元末の張士城、陳友諒、明末の李自成、張獻忠等の諸亂、それに近世に於ける太平天國革命等の如き何れも、封建的壓迫搾取を被れる農民が、搾取階級たる時の王朝に反抗した鬪爭の現れである。併し乍ら此等總ての農

民革命運動も一定の目標に向ふ近代的な組織と指導が無かつた爲め、遂には不成功に終らねばならなかつた。只太平天國革命のみは、從來と異り之を組織化し新しい進路を與へた點に於て注目に値ひするものである。

又一九二五——二七年の中國國民黨の國民革命は、かゝる組織と指導とを、勞働者、農民階級並に國民黨の組織分子たる支那ブルジョアジーの中に把持し得たが故に、これまでの農民革命運動とは異り、あれ程の成功を收め得たのである。而もその時に於ける組織と指導は、言ふ迄もなく國民黨內に於ける共產分子によつてなされたものである。

所が、革命の進展と共に、支那ブルジョアジーを代表する蔣介石は、國民革命を通じての大衆運動が、社會主義的反資本主義的運動に轉向し始めるや、その階級的矛盾の故に、遂に大衆の革命的行進に一大テロを下し、かくして、支那ブルジョアジーを代表する國民黨は共產黨と分離するに至つたのである。

爾來國民黨は支那民族資本の發展の政治的條件として、中央集權の確立を目指し、その前提として、地方割據の半封建的殘存勢力（軍閥）の攻擊鎭壓に任じて來た。

かゝる際、一方國民黨と分離した共產黨は、支那式の農民革命運動に全力を傾注し、その根强き遊擊戰爭を通じて成立せる共產軍を擴大强化し、遂にソヴエート政權の樹立に迄漕ぎつけ、今日に於ては、前に述べた如く、國民黨の軍權を以てしても、如何ともすべからざる程の强敵となるに至つた。

とは云へ、よし一步退いて、曾國藩が長髮賊（太平天國革命）を平定し得た如く、蔣介石の力を以て、共產軍を潰滅し得たとしても、共產黨が今日迄植ゑ付けて來た思想的魔力は之を根絕することは到底不可能である。況んや、三民主義が全然支那民衆の信賴を失つて仕舞つてゐる今日の支那に於ては、共產主義は、相手を仆す際に於ける旗しるし、政權奪取の手段としてまでも利用されんとさへなりつゝあるに於てをや。リットン報告書は此點に就き

『共產主義の個人的同情者は恐らく支那の各都市に發見せられ得べし』【註一】

と言つて、支那に於ける共產主義運動の思想的影響に驚嘆してゐる程である。

又ニューヨーク、タイムス記者ハーレット・アベンド氏は、その著、『惱める支那』"Tortured China"の中に於て、

『若し支那が遂に赤化するとしたならば、これは支那人民の大部分が、冷靜考慮の末共產主義の下に生活せんことを希望するからではない。支那人民の大多數は、卽ち九十パーセントまでは、共產主義は何を意味するかを全く知つてゐない。若し支那が赤化するとしたならば、これは文盲で塗炭に苦しみ、失望落膽した民衆が「土地を分配せよ」「壓制主義のブルジョアジーを一掃せよ」「農民勞働者を壓制した行政官を殺戮せよ」等の甘きスローガンに醉はされた結果に過ぎない。換言すれば、若し支那が共產主義に化したとしたならば、これは計畫的の政治運動ではなく、惡政と暴壓との下に呻吟せる民衆の一瘉攣的動作に過ぎない』【註二】

と述べてゐる。所でアベンド氏の言へる如く、支那共產黨の活動が、よし計畫的政治運動でないにしても、又惡政と暴壓の下に呻吟してゐる民衆の一瘉攣的動作に過ぎないにしても、惡政と暴壓の結果成熟せる革命的客觀情勢が、益々昂揚しつゝある今日の支那に於て、共產主義的思想がこれに作用する時、程度の問題は別として、革命運動がより發展し擴大して來て、支那今日の混亂に益々拍車を加へるに至るであらうことは明らかな所である。

かくの如く、支那に於ける共產主義運動の影響は、今日の支那、明日の支那を判斷する上に於て、到底之を度外視し得ない程のものとなり、共產黨の活動を無視しては、支那の眞相は決して攫めない程になつてゐる。

以下數章に亘つて、現段階に於ける支那ブルジョア民主主義革命の先驅としての太平天國革命より、一九二五——二七年の支那革命の失敗後に於いて、中國共産黨の指導下に立つ支那ソヴエート運動の發展過程並に現狀を諸般の資料に基いて具體的に研究するであらう。

註一　外務省假譯『リットン報告書』第四〇頁

註二　ハーレット・アベンド原著邦譯『惱める支那』第二〇——二一頁

第一篇　支那ブルジョア民主主義革命の先驅としての太平天國革命

第一章　緒　言

太平天國の叛亂（一八五〇——一八六四）は、從來「長髮賊の亂」と稱せられて居たが、近代支那に於けるブルジョア民主主義革命の前哨戰であるといふ意味から「太平天國革命」と呼ばれるに至り、大きな關心を持たれることになつた。且又その發展せる地域が、最近に於ける共産軍の發展地域と類似してゐることも亦興味深き點として注目せられてゐる所である。

所謂太平天國革命なるものが如何なる性質のものであるかを決定するといふ事は非常に困難であらうが、大體に於て、封建的壓迫搾取に反抗して立つた一つの農民革命であると見ることは誤りでないと思はれる。朱九疇の上帝會に淵源して洪秀全の思想の根幹となり、或は宣傳の具に用ひられたと思はれる基督教と、南支那に於て特に根强かつた反滿興漢の思想とはこの亂の性質にやゝ複雜性を與へるが、太平軍の大部分が貧農によつて占められてゐたといふ事が右の推定をなさしめる重要な鍵である。革命の指導者洪秀全も廣東省の農民の出であることは人の知るところである。

この革命亂は前後十五年の長きに亘り且つ又支那本部の大部分十七省（廣西、湖南、湖北、江西、安徽、江蘇、河南

陝西、浙江、山西、直隸(河北)、山東、廣東、福建、貴州、雲南、四川）を擾亂の中に卷き込んだのであるが、これは果して如何なる社會情勢から、如何なるスローガンの下に行はれたか、そして次に如何なる推移の後如何にして滅亡して行つたか、それは頗る興味ある問題である。

この小論に於ては主として左の兩項に重點を置いた。

（一）　太平天國革命は何故に發展したか？

（二）　太平天國革命は何故に衰亡したか？

右の內(一)は太平天國の革命運動を起さしめ且つそれを强勢ならしめた社會的背景と、太平天國內部の組織、宣傳政策等の問題を含み、(二)は太平天國自身の腐敗崩壞と、革命を鎭壓した討伐軍の問題とを含んで居る。

第二章　太平天國革命發展の原因

太平天國革命の發展、即ち太平軍が民心の歸向を得て大きな勢力となつて行つた原因は、前述せる如く二つの面に分けて考へるのを便とする。一を外的原因、他を內的原因と呼ぶことゝする。

第一節　外的原因

太平天國革命を勃發せしめ、多數の民衆を動かした原因を更に分けて考へる時は、左の三項が主要なものとなる。そしてこゝに外的原因と名づけたこれ等のものは革命の發展の上に於て後に述べる內的原因と名づけたものに比して第一義的のものでありより直接的である。從つてこれを直接原因と稱してもよからう。

（A）　農民の貧窮

（B）　反滿興漢の思想

（C）　淸威の薄弱

（A）農民の貧窮について

總人口の七割乃至八割を占めると云はれる支那の農民は彼等の哀れな歴史を持つて居る。歴史期に入つての最初から「貧窮」は彼等を離れない運命であつた。「食ふ事」それが農民によつて大部分を占められる支那人にとつて如何に重大な問題であつたかは現代支那人の日常挨拶に「吃了飯了麼?」といふ言葉が用ひられてゐることでも察せられるであらう。併し各時代の狀態には夫々各時代の事情がある。太平天國革命を生んだ十九世紀中葉の南支那に於ける農民の大部分は極めてみぢめな窮狀にあつたが、今少しくその由來する所をたづねて見よう。

〔賦稅の苛繁と官僚の腐敗〕

清朝の財政は、雍正(一七二三——一七三五)間國庫の貯藏七、八千萬兩と傳へられたのを極點として外征、叛亂討伐等頻發の爲め次第に破綻の道を辿り、道光(一八二一——一八五〇)の頃には全くの破産狀態に陷つた。從つて各種賦稅の收斂は年を追うて甚しく增加し、康熙(一六六二——一七二二)の頃清朝政府の歳入二千餘萬兩に過ぎなかつたものが乾隆(一七三六——一七九五)の時には三千餘萬兩、嘉慶(一七九六——一八二〇)道光間には三千八、九百餘萬兩に至るといふ有樣であつた。その內のある一例を取れば、鹽稅は明の順治(一六四四——一六六一)の時全年の收入が五、六十萬兩に過ぎなかつたものが、乾隆十八年(一七五三年)に七百一萬四千九百餘兩に激增した如き、又乾隆四十一年(一七七六年)に收入四十餘萬であつた粵海の海關稅が間もない同五十九年(一七九四年)に增して百十七萬に達したが如きである。

田賦も可成りに收斂を受けたが、極めて迷惑なのは名目上は正式に例へば百分の一を增加するとしても、其實地方では一兩毎に四、五錢の田賦を取られ、なほ小さい町や田舍へ行けば四、五分以上になることもあつた。

併し事實農民を苦しめたのはかゝる政府からの正式の增稅ではなくて、直接民衆に接觸する地方官吏の勝手の徵稅である。一つには清朝では官吏と民衆との接近を防がうとする政策的立場から、官吏の俸給をなるべく少くして暗に苛斂誅求を奬勵したといふ驚くべき事實もこれには關係がある。實際官僚そのものの腐敗は當時甚だしく、前に述べた政府からの增稅の外に地方官吏の貪慾な爪牙が人民の上に加へられた。蕭一山の清代通史の一節にも、

州縣舞弊。不レ過三數萬一。省司則至三數十萬一。部府則至三數十萬一。此不レ過三書吏一耳。而堂官大吏又從可知已。

と言つてゐるが、地方官吏の私に收むるところは驚くべき額に達したのであつて、「三年淸知府。十萬雪花。」といふ俗諺は雄辯に當時の狀況を語つてゐる。

救恤の事業に用ひらるべき費用がいつの間にか官吏の懷に納ることも珍らしくない。ほんの一例を示すならば當時、遭運總督の所監にあつた南河は修費として毎年五、六百萬兩を支出されてゐたが、實際工程に用ひられるのは十分の一に過ぎず、其餘は悉く官吏の掌裡に歸し、その奢侈の資となつたのである。

又官吏の俸給の少なかつた事は賄賂の收授によつて補ひをつけられることになつたし、三年の知府で十萬の銀にありつける樣な官吏の地位は何人にも大きな誘惑であつたから、一方財政難の救急策であるといふ意味を含めて官爵の賣買が極めて盛んに行はれた。そして彼等の利慾の犧牲となるものは主として哀れむべき農民であつた。

〔人口の過剩〕

支那の人口は淸代に於て著しい增加率を示した。試みに東華錄の所載により人口增加の大勢を窺ふに、正確は期し難

いがやゝ信頼をおくに足る乾隆以後の統計は左の如くである。

乾隆六年	一四三、四一〇、五五九人	
嘉慶元年	二七五、六六二、〇四四人	
道光元年	三五五、五四〇、二五八人	
同廿一年	四一三、四五七、三一一人	

人口の增加は常に生産の制限を直接受けるから限りない增加はあり得ないとしても、支那人は種々な自然的社會的條件と闘ひつゝ生存可能の極點まで增殖するといふ事實がある。右に揭げた數字を吾々は直ちに信ずる事は出來ないが、少くも人口の增加率に對しては耕地の增加と生產技術の進歩とが併行し得なかつた事は想像に難くない。當時に於て

海宇承久日久。戶口日增。田畝並未ㇾ加ㇾ廣。

（康熙五十一年諭）

數十年。戶口日繁。而土地只此數。

（雍正二年諭）

等と云はれたのはこの事實を示すもので、從つて農民は最低の生活へと落ちこまなければならない。人口の過剩とそれに伴ふ貧窮とは當時非常に增加した各地への移住民が一つの標識となつて示されると思ふ。滿洲への移住は特に甚しく、道光二十四年（一八四四年）には遂に朝廷は漢人の滿洲に遷住する事、及び滿洲に於て商人が土地を開墾する事とを禁じてゐる。移住民はこの外蒙古、四川其他の邊疆地方に赴き、又諸外國に移つたが、十九世紀前半期の末年米國には既に一萬五千人の支那移民があつたと傳へられる如く、人々は外へと流れ出なければならなかつた。

〔土地の集中〕

當時に於ける商業資本の增大と貨幣經濟の發展とは、既に唐代から宋代にかけて確立した土地の私有制に拍車を加へて土地の商品化を現出し、一方滿洲貴族の封建的土地所有と相呼應して極端な土地の集中を招來することになつた。そして饑饉、自然的災害、兵禍及び高利貸制度が更にこの過程を早めるのである。殆く土地を奪はれた流民、小作人は增加し半自作農及び自作農の大部分は全耕地の極めて少ない部分を割き合つた。土地所有形態の概念を得る爲めに一九二六年中國々民黨土地問題委員會第三次擴大會議の討論の基礎となつた土地調査の資料に依れば、

（1）　土地を有する者は農民總數の百分の四十五を占め、土地を有せざる佃農（小作人）雇農（傭農）游民等合計一八六、〇〇〇、〇〇〇人は農民總人數の百分の五十五を占めて居る。

（2）　土地を有する農民（農民總數の百分の四十五を占める）のうち、更其の詳細を表示せば次の如くである。

（所有畝數）	（土地所有者中に於ける割合）	（耕作地の中に於ける割合）
（一）貧　農	一——一〇	百分の四四　百分の六
（二）中　農	一〇—三〇	百分の二四　百分の一三
（三）富　農	三〇——五〇	百分の一六　百分の一七
（四）小中地主	五〇——一〇〇	百分の一一　百分の二一
（五）大地主	一〇〇以上	百分の五　百分の四三

富農と小中地主との人數は土地を有する農民數の百分の三十を占め、而して其の占有土地面積は全土地面積の百分の七十九を占めて居る。（アジアチクス著『廣東から上海へ』第四四〇頁による。）

當時滿洲貴族、漢民族の官吏商人等の手に歸した私有地は時に十萬畝に達するものもあつたと云はれる。そしてこゝに注意すべきは、地主達が最良の土地を握つてゐたといふ事である。南支那に於ては彼等は水田を所有し、小農の土地所有は多く最惡の畑田に追ひこまれてゐたのである。

土地の集中は即ち富の集中である。均富の精神に立脚した支那傳統の均田の理想は破れ、狹い土地に追ひこまれた農民の大部分は貧窮への一途あるのみであつた。

〔天災兵禍〕

所謂天災といふものはそのまゝ農民貧窮の原因と見るべきか否かは問題である。何故かならばその反對に農民の貧窮が所謂天災の一要因を爲し得ることも考へられるからである。豫防法の不完全とか備荒設備の缺除とかいふものが所謂天災の回數若くは程度を大ならしめることが考へられる。この意味からは嚴格な意義での天災といふものを定めることが困難となる。

併し正確な因果關係の方向はともかくとして、所謂天災が農民をして益々貧窮ならしめたことは事實である。かゝる意味では天災と兵禍とを同列に見ても差支へあるまいと思ふ。

支那を饑饉の國（Land of Famine）と言つた人もある位、（註）支那には饑饉が多い。清朝を通じてその年代記は四九四回の饑饉を記錄してゐる。饑饉の原因ともなり又それ自體猛威を振ふ水害、旱魃、蝗害等は連年農民の生活を脅かす。

太平天國革命に先立つ數年間も天災相次ぎ道光二十七、八年（一八四七——四八年）革命の搖籃地たる兩廣地方の大饑饉は殊に慘狀を呈した。然るに清朝の地方官吏は水災豫防の堤防工事とか或ひは救恤の事業等に名を籍りては飽くなき搾取にふけつた者が多かつた。

【註】W. H. Mallory の著者 "China : Land of Famine"

次に又、一度清朝の年代記を一瞥するならば太平天國革命に先立つ約一世紀の間はまさに戰亂の連續であつたことが知られる。その主なもののみを列擧して見れば左の如くである。

貴州、台拱、苗民撲滅の戰	（雍正十三年——乾隆元年）
準噶爾部撲滅の戰	（乾隆二十年——二十二年）
回部平定の戰	（乾隆十九年——二十五年）
第一次金川平定の戰	（乾隆十二年——十四年）
五倫臨清の變亂	（乾隆二十九年）
緬甸征討の戰	（乾隆三十一年——三十四年）
第二次金川平定の戰	（乾隆三十六年——四十一年）
蘭州回民の暴動	（乾隆四十六年）
湖南貴州苗民の征討	（乾隆六十年——嘉慶十一年）
白蓮教の暴動	（嘉慶元年——九年）
東南諸省海盜の平定	（乾隆中より嘉慶十五年）

天理教の亂　（嘉慶十八年――十九年）
回人張略爾の亂　（道光二年――八年）
趙金龍の亂　（道光十一年――十二年）
鴉片戰爭　（道光十九年――二十二年）

右の如き天災と兵禍とは一方には清朝の財政を破綻せしめて賦課の增大を餘儀なくせしめ、他方直接に農民の身邊を脅かし、相率ゐて貧窮の淵に陷れた。

人によつて支那の農民の生產技術の幼稚なる事を農民貧窮の一因と見ることがある。事實支那の生產技術卽ち例へば各種の農具とか又は灌漑の技術等は太古以來特に著しい進步の跡を見せてゐないが、これが農民を貧苦に陷れると見るよりは寧ろ漫性的な饑饉狀態が然らしめた一つの「結果」であると考へるべきであらう。餘裕のない所に思索はなく從つて進步も發展もない。生活苦が技術の改善を妨げたものと見るのが當然である。

貧窮は農民を或ひは移住せしめ、或ひは流民となし、人心を不安ならしめ又一面滿洲朝廷への反抗心を强め、新スローガンの下に立つ太平軍の宣傳に大きな效果を與へて革命の發展を導かしめたのである。

（B）反滿興漢の思想について

太平軍が民衆の支持を得たのは前述した貧困による民心の不安に乘じた爲であるが、又一方にその民衆を驅つたのは漢族として滿洲朝廷に反抗せんとする民族的反抗心である。この民族的反抗心が生活の困難と不安によつて更に煽られた事は認めなければならないところであらう。

支那の古代から、歷代王朝の內一統の王朝として外夷にして支那本部に君臨したるものは元と清とに過ぎない。儒教の經典に傳へられた堯舜禹湯文武周公の理想時代は措き、稍信をおくに足ると思はれる秦の統一以來は世々必ずその當局者に反抗せんとする思想とその運動とが現はれて居る。當局者は常にそれが爲に苦しめられ種々なる對策を講じて抑壓するが、或時は成功を收め、又或時はその爲に自らの命數を縮めて行つた。一統の朝廷が同じく漢民族である場合もさうであつたとすれば、況んや前述の元、清の如き北方民族に統治された場合は、それへの反抗は民族的反感を加へて更に烈しかつた事は疑ひない。しかも清朝は、元朝の一世紀に滿たない國には比すべくも非ず、實に三百年の久しきに亙つてその命數を保つたのであるが、これはその施政が巧妙であつた事にもよるであらうから當局者の苦心も思ひやられる。清朝歷代の英主賢相の思想調節の努力は所謂滿漢箝制の歷史となつて現はれたものであるが、裏面に於ては滿人の壓迫と漢人の反抗とが絕えず火花を散らして居たのである。

清朝が中原に主權を得てから漢族に對する壓迫は辛辣を極め、剃髮令の如きは漢族の深い恨を買つたのであるが、その狀況の一斑は例の

留レ頭不レ留レ髮。留レ髮不レ留レ頭。

といふ制札によつて察することが出來る。

漢族本位の思想は宋代に於て發達を遂げ、元代に入つて稍々衰へ、明代に至つて大いに勢を得たのであるが、清朝に入つても滿族の壓迫を受くるにつけ、反滿興明或ひは反滿興漢の思想は極めて盛んであつたから、清朝に於ける思想取

締の方法も從つて講ぜられた。

先づ秘密會合の禁が行はれた。早くも順治十七年（一六六〇年）には取締の意味から士子の會盟結社が嚴禁されたが、これによつて聚集論講を事とする學術團體は無くなり、學問は個人的な研究に止められる事になつて、清朝學風の一要素をなすに至つた。康熙帝は寬弛の政により、漢族の文化を尊重して一種の懷柔策を行つて言論と思想の統一を圖つたが、莊廷鑨の獄、戴名世の獄等、所謂文字の獄なるものは假するところなく行はれた。

康熙帝に次いだ雍正帝の政策は禁書令と文字の獄によつて言論思想の取締は峻烈を加へ、探偵政治と云はれた。禁書令は乾隆帝にも襲用され極めて廣範圍に亙つたもので、始皇帝のやり方を殆ど復活したかの感があつた。乾隆帝の事業の一つに數へられる四庫全書の編纂といふのも、一面には政府に不利益な書を民間から引上げ得るといふ收穫があつたわけである。朝廷の忌諱に觸れて焚かれた書籍は主として明朝を推賞し若くは懷想したものが多かつた。水滸傳も乾隆帝によつて絶版を命ぜられたが、これは三國志演義等と同じく政治的壓迫を受けつゝある漢族の心をそゝり、清朝への反抗心を起さしむる性質のものであつたからである。

刑法の如きものも取締の必要に應じて成るものであるから、大清律は順治三年（一六四六年）に先づ出來、康熙雍正兩朝の間に屢々增訂が加へられ、乾隆の時略々完成したものである。この大清律を見ると五刑、十惡、八議等種々規定があるが、十惡に於てはその罪科の順序に於て先づ、

一、謀　反……謂謀危社稷

二、謀大逆……謂謀毀宗廟、山陵宮殿

三、謀　叛……謂謀背本國、潛從他國

等を擧げ、治安維持の法が完備したことを示してゐる。

又清朝に於ては文官の職の陞進の權を帝自身に握り、朝廷の國語を以て官吏の通用語とし、出生地に職を執ることを許さなかつた。尙官吏と人民との離間策として、官吏の俸給を極めて薄くするか或は何も與へない事もあり、而して任地に於ける搾取を是認若くは奬勵して地方人民の力を殺ぎ、以て叛亂を防ぐ備としたのである。

而かも漢民族の根强い排滿思想は何等かの形に於て勃發せざるを得なかつた。これが一つのまとまつた形に於て先づ現はれたのが康熙朝に於ける吳三桂の反亂である。次いで嘉慶中に世を騷がした白蓮教徒の暴動とか、天理教徒の暴動も反滿の思想が重要な要因をなして居る。かゝる運動は總て失敗に歸し、その度に慘酷極まる殺戮を受けた漢人は益々反抗の焰を燃やした。殊に吳三桂の亂に際して廣東に於ける虐殺は、一ヶ月に亘り實に七十萬人に達したと言はれてゐる程で、廣東人としては忘れ得ざる痛恨であつたらう。排滿の思想が南支那に於て特に猛烈であつたのも亦故なしとしない。この排滿與漢の思想が太平軍を活躍せしめた重大な一要因であつた事は云ふ迄もない。

（C）清朝威權の薄弱——特に官兵の腐敗

太平天國革命が廣西桂平縣の金田村に發して、ともかくも十數年間清廷への反抗を續け得たことは、一つにはその根據地が北京を距ること遠く、清朝威權の及ばない地であつたことにもよるが、又清朝威權そのものが當時甚だ微弱であつたことによるところが多い。綠營旗營の兵の腐敗がそれであり綠營は殊に甚しかつた。その狀態は王闓運の湘軍志の營

制篇、及び王定定の湘軍記の水陸營制篇等其他に傳へられてゐる。湘軍志によれば、軍制は柔るゝに任せられ、綠旗兵の武器陣營具の如きは役に立つものは少く、行軍の際には武器陣營具を駄載して運びまはるのみで、指揮官も兵卒も恰も旅行氣分で、其の態實にだらしなく、只地方民の迷惑を重ねるのみであつた。指揮官等の間には統一も聯絡もなく、兵卒の中では滿洲兵蒙古兵は稍々規律を保つて居たが、剛情で命令を奉じなかつたので、已むを得ず懦弱な綠旗兵を用ひる場合が多かつた。地方民は太平軍よりも官軍の不規律なのに惱まされる場合の方が多かつたので、「避官迎賊」といふ語さへ流行した程で、官兵の腐敗は可成り激しかつたものと思はれる。湘軍記には『將と將と相習はず、兵と兵とは相知らず、勝てば則ち相妬み、敗れても相救はず』と記してあるが、この「敗不二相救一」といふことは、曾國藩も極めて傷恨すべき事であると歎いてゐる。

官兵がかゝる有樣であつたから、革命の當初は却つて革命の發展を助ける結果となつたわけである。ここに於て、太平軍の討伐は官兵に依らずして鄕勇殊に曾國藩の率ゐた湘勇（湘軍）の出現に俟たなければならなかつたのである。

（附）南支那に基督教徒が多かつたこと

太平天國革命運動の舞臺となつた南支那には、海外交通の關係上ヨーロッパ人の渡來が多かつた爲に、基督教徒が比較的多かつた。太平天國野史（卷四、宗教の條）にも

「兩粵八閩、素多天主教」

と記してある。天王洪秀全が宣傳の具に用ひた基督教については後に述べるのであるが、南支那に基督教徒が多かつたことは大衆の把握には好都合だつたと思はれる。

第二節　內的原因

こゝに述べようとするものは太平天國革命の發展に資した原因といふよりも寧ろ革命そのものゝ性質である。今之を左の加き三つの方面から眺めて見よう。

（A）太平天國の基督教と其宣傳
（B）太平天國の組織
（C）太平天國の政策

（A）基督教と其宣傳について

支那に於ける農民の反抗運動は古來宗教的な形式を帶びてゐるものが多い。陶希聖はその著「支那封建社會史」に於て左の如く述べてゐる。（野原四郎譯、第七章、過剩人口の生產と再生產の條）

『農民を基本部隊とする會黨は常に迷信的團體である。支那の士大夫階級が儒家の學說に依つて其の搾取者たる地位と農民の尊信を繫ぎ留めて居り、その學說が「分」を以て中心として深く人心に浸透して居るからには士大夫の統治に反對せんとする者は當然此と相反する何等かの教理に歸依することになる。かくて農民及び游民の會黨は常に異端視せられる。歐洲中世の農民一揆はその一適例であつて封建制度に反抗した者は必ず又教會に反對した。』

右の外に自然の支配力が非常に大きな役割を持つて居るといふ事も農民の團結に宗教的色彩を與へる一要素と考へ得る。太平天國革命がこの意味での形式を基督教に借りたのは、地域的に言つて基督教徒の多い南支那を中心としたのであるから賢明の策であつた。

洪秀全が基督教徒になつた次第は、彼が生地たる廣東省の花縣から省城へ試驗を受けに行く途中、基督教の書を得たことに始まると傳へられてゐる。而して後彼の身を投じた上帝會を中心として集つた同志、馮雲山、韋昌輝、石達開、楊秀清等がやがて太平天國革命運動の中堅人物となつたのである。上帝會は朱九疇の創立に係るが、その歿後は洪秀全がその首長となり、上帝會を革命の原動力となつた。

洪秀全は三位一體といふ說を創作し、天帝を天父となし自らは基督の弟であると稱したが、後太平天國の國號を建つるに當つては天王と自稱した。その教義は祈禱、洗禮を始め各方面全く基督教によつて作られ、十款天條と稱して十誡を取入れ、博愛說を高唱するなど仲々の手際であるが、實は決して純粹の基督教ではなく、可成りに支那化され歪められた似而非基督教である。この事に關しては多くの人が既に論じてゐる。三位一體の說といふものからして抑も基督教を距ること遠しと云はなければならない。

W. I. Hail　氏の說くところによれば

……But there is little evidence that Hung (Hung Siu-chüan 洪秀全〔筆者〕) and his followers comprehended the inner teaching of christianity. The spiritual virtues of humanity, charity, purity of heart, forgiveness, and yearning for fellowship with God and Christ, are wanting altogether or have been transformed into

Confucian（孔子の或は孔子の教〔筆者〕）interpretation of virtue in terms of right conduct.

(Hail : "Tsêng kuo-fan（曾國藩〔筆者〕）and the Taiping Rebellion" Chap. V)

とその相違を述べ、更に西洋のバイブルと支那の儒教の經典とが同一の性質のものに取扱はれたといふことをつけ加へてゐる。

S. Mossman　は又曰く

"Religious Tenets based on Christianity, but of blasphemous nature."

(Mossman : The Great "Taiping Rebellion.")

西洋の宣教師達が太平天國の教理を見て大いに失望したと傳へられてゐるのもこの距りがあつたればこそである。併しこの場合教義が純粹の基督教であるか否かといふ事は、布教の假面に蔽はれた列國の帝國主義に於ては問題でこそあれ、太平天國側にとつては問題ではない。要は宣傳とその效果如何にある。民心の歸向を得ることが多かつたのは宣傳術の巧妙であつた事と洪秀全獨特の教義が却つて民心に投じた事とによると考へなければならない。

先づ太平天國二年（一八五二年）に發せられた「奉天討虜」の檄を記して見る。（稻葉氏「近代支那史」の書き下し文による）

『嗟、爾有衆明かに予が言を聽け。予惟ふに天下は上帝の天下にして胡虜の天下に非ず。衣食は上帝の衣食にして胡虜の衣食に非ず。子女人民は上帝の子女人民にして胡虜の子女人民に非ず。慨す、滿洲の毒を肆にして中國を混亂せしより、六合の大、九州の衆を以て一に其胡行に任せ、恬として怪むを爲さず、中國尙ほ人ありと爲す乎。妖胡虐焰、蒼穹を燔き、淫毒宸極を穢す。醒風は四海に播し、妖氛は五胡よりも慘たり。而も中國の反つて低首下心、甘

じて婢僕となる、甚しいかな、中國の人なきや。それ中國は首なり、胡虜は足なり。中國は神州なり、胡虜は妖人なり。中國名けて神州となすは何ぞや、天父皇上帝は眞人なり、天地山海は是其造成するところ、故に從前神州を以て中國に名けたり。胡虜を目して妖人となすは何ぞや。閻羅族は邪鬼なり、韃靼の妖胡は惟だ敬拜す。故に當今妖人を以て胡虜を目せり。奈何ぞ、足は反りて首に加へ、妖人は反りて神州を盜み、我中國を驅りて悉く妖魔に變ぜしむるや。南山の竹簡を罄くすも、滿地の淫汚を寫し盡さず、東海の波濤を洗するも、彌天の孽罪を洗淨せず。予謹みて略ぼ其彰著なるをいはん。夫れ中國には中國の形像あり、今滿洲悉く削髮して禽獸となすなり。中國には中國の衣冠あり、今滿洲別に胡衣猴冠を頂戴し先代の服冕を壞る。是れ中國の人をして其の根本を忘れしむるなり。中國には中國の人倫あり、前に僞妖康熙、暗に韃子一人をして十家を管し、中國の女子を淫亂せしむ。是れ中國の人をして盡く胡種たらしむるなり。中國には中國の配偶あり、今滿洲妖魔、悉く中國の美姬を收めて奴となし妾となし三千の粉黛皆な羯狗に汚され、百萬の紅顏竟に騷狐と同寢す。之を言へば心を慟かしめ、之を談すれば舌を汚す。是れ中國の女子を盡くして是を玷辱するなり。中國には中國の制度あり、今滿洲妖魔の條律を造爲し、我中國人をして能く其網羅を脫するなく、其手足を措くところ無からしむ。是れ中國の男兒を盡くして之を脅制するなり。中國には中國の言語あり、今滿洲京腔を造爲して中國の音に更ふ。是れ胡言胡語を以て中國を惑はすなり。凡そ水旱憐恤せず、其餓莩の流離暴露するを坐視すること莽の如し。是れ我が中國人の稀少ならんことを欲するなり。滿洲あれどは又貪官汚吏を縱ちて天下に布滿せしめ、民の脂膏を剝りて士女皆な道路に哭泣す。是れ我が中國人の貧窮ならんことを欲するなり。官は賄を以て得、刑は錢を以て免れ、富兒權に當り豪傑望を絕つ。是れ我が中國の英俊を

して抑鬱して死せしむるなり。凡そ英雄の天に代りて仇を報ずるあれば、動もすれば誣ゆるに謀反大逆を以てし其九族を夷す。是れ我が中國英雄の志を絕たんと欲するなり。滿洲の中國を愚弄し、中國を欺侮する所以のもの、その極を用ひざるところ無し。巧みなる哉。昔姚戈仲は胡種なりしも猶ほ其子裹を戒めて中國に歸義せしめたり。符融亦た胡種なりしも毎に其兄堅を勸めて中國を攻めざらしむ。今滿洲は乃ち其根源の醜賤を忘れ、吳三桂の招引に乘じ中國を覇占し惡窮凶を極む。予、滿韃子の始末を細査するに、其祖宗は乃ち白狐と赤狗の交媾して精を成し、遂に妖人を產したるもの、種類日に滋く、自ら相配合し、竝びに人倫風化なし。中國の人無きに乘じ、中夏に盜據し、妖座の設、野狐升據し、蛇窩の丙、沐猴にして冠す。我中國其窟を挈き、而して其穴を鋤くこと能はず、反りて其詭謀に中てられ、其凌辱を受け、其の嚇詐に聽かず、甚しきは庸惡陋劣、蠅頸を貪圖して狐狗羣黨の中に拜跪す。今三尺の童子あり、至りて無知なり、犬豕を指して之を拜せしむれば則ち沸然として怒る。今胡虜は猶ほ犬豕のごとし。公等讀書古を知り、毫も羞を知らず。昔文天祥、謝仿得は死を誓ひ元に事へず。史可法、翟式耜は死を誓ひ胡に事へず。此れ皆諸弟の熟聞するところならん。予總料するに滿洲の衆は十數萬に過ぎず、而して我中國の衆五千餘萬を下らず。五千餘萬の衆を以て制を十萬に受く。亦孔だ醜し。今幸に天道還るを好み、中國には永興の兆あり。人心治を思ふ。胡虜必滅の徵あり、三七の妖運終りを告げ、而して九五の眞人已に出づ。胡罪貫盈、皇天震怒し我が天主に命じ肅みて天威をとつて義旗を創建し、妖孽を掃除し中國を介安し、恭しく天罰を行はしむ。遠きに言へ。邇きに言へ。孰れか左袒の心なからん。或は官となり民となる、當に揚徽の志を急にすべく、甲冑干戈、義聲を戴せて色を生じ、夫婦男女、公憤を舒べて以て前驅し、誓ひて八旗を屠りて九有を安じ、特に四方の英俊を召して速

かに上席を拜し、以て天衷を奬ましし、守緒を蔡州に執り、妥懽を應昌に擒にし、久淪の境土を興創し上帝の綱常を頂起すべし、それよく狗韃子の咸豐を擒にして來り獻ずるものあらん。或は又能く一切滿洲胡人の頭目を擒斬するものあらん。大官奏封するに決して食言せず。蓋し皇上帝當初六日に造成するの天下、今既に皇上帝の大恩を開くを蒙り、我が主天王に命じて之を始めしむ。豈に胡虜の得て久しく亂るところならんや。公等世世中國に居る、誰れか上帝の子女に非さる。倘し能く天を奉じて妖を誅し、蠢弧を執りて以て先登し防風の後れ到るを戮むれば、世にあれば英雄比なく、天にあらば榮耀羅りなし。若し或は執迷悟らず、僞に從ひ眞を拒まば、生れて胡人となり死して胡鬼とならん。順逆大體あり、夏夷定名あり。各宜しく天に順ひ思を脫して人となるべし。弟等滿洲の禍を苦しむや久し。今に到りて猶變計を知らず、同心戮力、胡塵を掃盪せずんば、それ何を以て上帝に對せんや。予の義兵を興すは、上、上帝の爲に瞞天の讎を報ひ、天國の爲めに下首の苦を解き、務めて胡氛を肅靖し、同じく太平の樂を享けんとすればなり。天に順ふものは厚福あり、天に逆ふものは顯戮あり。天下に布告して咸な聞知せしむ。』

右の檄文は宣傳のみに用ひられた虛構ではない。尤も滿洲族の祖宗に關する甚だしいデマの如きを別にしても全體として誇張の言辭の多いことは否定し得ないが、滿洲朝廷の暴政の如きは餘り距りのない事實を傳へてゐると思はれるし全面に漲つた反滿の思想は遺憾なく看取出來る。信念によつて綴られた丈け大きな底力がひそんで居り、民衆にアッピールした力も從つて多かつたに違ひない。

洪秀全が三位一體の說を唱へ初めた時の事情も既に一つの巧妙な宣傳の方法であつた。湘軍記を見ると、

秀全嘗詐死七日。復甦。謬ㇾ衆云。上帝召ㇾ我。有二大劫一。拜ㇾ天則免。遂託二泰西人所ㇾ稱耶蘇者一。造二眞言實誥一。謂ㇾ天曰二耶火華一。耶蘇爲二長子一。秀全次子。其兄辭贊二美上帝一。……以誑ㇾ衆斂ㇾ錢。男婦多信。爭事ㇾ之。

といひ、その成功を述べてゐる。

太平天國二年に出た太平詔書の原道救世詔には禁制として

第一不正淫爲ㇾ首。第二不正忤二父母一。第三不正行二殺害一。第四不正爲二盜賊一。第五不正爲二誕覩一。第六不正爲二賭博一。

の六ケ條が見えてゐるが、これは舊約聖書の十誡とは餘程異つて居り支那化されたもので、これが却つて當時の支那人には適切であつたと思はれる。A. E. Hake の著書 "Events in the Taiping Rebellion." 中に引用せられてゐる。J. Holmes の語にも、

"Tien Wang's (天王の〔筆者〕) revelation was more recent than tie Lible, it was more authoritative" と見えてゐる。

咸豐二年の長沙の戰鬪の時に、洪秀全は民心を收攬する爲に玉璽を僞造して天から授つたと稱し、衆、爲に萬歲を叫んだといふが如き、又太平天國三年に楊秀清は、キリストが身を殺して世を救つた如く、自分が衆人に代つて病氣に罹りその病を贖つたといふので、天父の命により秀師贖病主と稱することになつた事など、愈々純粹の基督教を離れた單なる宣傳術であるけれども、無智な民衆に對しては益々人氣を博する結果となつたに違ひない。

併し天の惠みを慕つて集つて來る民衆も結局望むところは生活そのものゝ安定でなければならぬ。革命の目標となつた滿洲朝廷への反抗も要するにそれが出發點である。從つて革命の發展の上に事實重要な意義をもつものは、この太平

天國革命が實際如何なる組織の下に行はれ、又如何なる施政を行つたかといふ點になければならぬ。基督教的教義は要するに單なる宣傳の具に過ぎない。洪秀全はかくして集めた複雜な分子を一つの共通の目標、滿洲朝廷への反抗といふことによつて纏め上げたのである。

（B）太平天國の組織について

太平天國革命軍の大部分を占めた分子が、貧農及び失業農民即ち流民であつたことは疑ひなく、尚ほその外に工人、窮乏紳士（現代に於ける失業インテリゲンチイア）等があつた。

太平天國は天王（洪秀全）、以下東王（楊秀清）、西王（蕭朝貴）、南王（馮雲山）、北王（韋昌輝）、翼王（石達開）等を始めとし逐次王侯、丞相、檢點、指揮、將軍、總制、監軍、軍師、師帥、旅帥、卒長、兩司馬等整然たる階級があり組織が具つてゐたが、玆には此等の詳細を省略し、革命の興亡に直接關係のあつた太平軍の兵制を主として考へることにする。

革命勃發以來太平軍がすばらしい勢ひで討伐軍を破りつゝ北上し、一時永安に圍を受けたにも不拘、玆を脫出し容易に南京に入つたのは、討伐軍が前述の如く腐敗して弱かつたことにもよるが、太平軍そのものが可成りに組織立つて居た上、ある程度の訓練と規律とを有してゐたことにもよるのである。廣西の知事が太平軍の初期の狀況を記したもの〻中に

『吾々の軍隊は戰へば戰ふ程怖れを抱くに、叛徒は概して力强く烈しく、尚ほ且つ其法規は嚴格明瞭で、如何にして烏合の衆とは見做されぬのである。』（稻葉君山「近世支那十講」長髮賊の條所載の文による）

といふ意味を述べてゐるのを見ても、支那の暴動にしては珍らしい規律があつたものと察せられる。尤も太平軍に眞の威力があつたのはその初期だけであつて、南京占領（一八五三年）後には內訌が起り軍規も崩れて官軍と選ぶところが少くなつて來たのである。洪秀全の考へでは彼の所謂「天父上主皇上帝」の神託を受けて支那の主となるといふのであつたなら、かゝる熱烈な信仰心と生活の窮乏から來た反抗心とが太平軍を勇敢ならしめたのであらう。因に洪秀全の考へた天帝の思想は基督教の所謂エホバの神を指したものであらうが、同時に多分に儒教の上帝の考へが取り入れられたものと見られる。

太平軍の軍規制令法規等は「太平天國野史」が詳かであるから主としてのこの書によつて組織の大要を窺つて見よう。同書卷三兵制の條を見ると、太平軍の組織は一軍といふのが兵一萬二千五百人で軍師がこれを統べ總制、監軍がこれを監する。一軍は五師帥に分れて一師帥は二千五百人を領する。更にそれが五旅帥に分れて一旅帥は五百人、それが五卒長に分れて一卒長が百人を領することになる。更に一卒長が四つの兩司馬に分れ各兩司馬は伍長五人と伍卒二十人都合廿五人を領するといふ事になつてゐる。伍長伍卒に軍官總てを加へると一軍は一萬三千百五十五人である。師帥を前、後、左、右中の五營とし、旅帥も同樣、卒長は一、二、三、四、五と區別して兩司馬に分ける。丞相以下は皆三角旗を用ひ、副軍帥並びに翼王は四角旗を用ひた。かゝる組織をもつた軍隊は陸營、水營の外に工兵隊とも云ふべき土營とか工人より成る金營、木營などがあつた事は注意すべきである。

太平軍の兵數に關する太平天國野史の傳へは餘りにも尨大で信じ難い。兵制の太平軍總數表によると

陸營每軍伍卒。一萬二千五百人。計九十五軍。合計伍卒一百十八萬七千五百人。

水營每軍伍卒同上。計九軍。合計伍卒十一萬二千五百人。

土營每軍伍卒同上。計二軍。合計伍卒二萬五千人。

金木六營每營每軍同上。計六軍。合計伍卒七萬五千人。

各軍典官。每館聽使百人。計一軍正副七十典官。一百十二軍。合計聽使七十八萬四千人。

王侯丞檢等所屬各典官。每館聽使百人。正副典官五千八百五十八人。合計聽使五十八萬五千八百人。以上伍卒聽使。

合計二百七十六萬九千八百人。

以上總計三百零八萬五千二十一人。

とあり元より、虛數である事疑ひないが、實際戰に參加した兵數は果してどの位であつたらうか。同じく野史の兵制の條に

太平元年。克三永安一時。衆已三萬七千人。而能戰之軍。僅老兄弟五千餘耳。

とあるから當初は更に少數だつたであらう、右の文に見える老兄弟とは一名老軍と云ひ、新軍に對して革命の初期から戰に從つた中堅の軍隊を指すのである。軍が湖南、湖北と進むに隨つて其兵數を增したので、野史の天王本紀太平二年の條

天王既克三武昌一有衆五十萬。船數萬艘。

にはとあるが、船數萬艘は少し大袈裟であるから兵數の五十萬も多少は怪しいと思はれる。矢野仁一氏の近代支那史には、太平軍の南京占領（一八五三年）當時の兵數を約八萬（內男子五萬、女子三萬）、船は約千餘艘と推定してあるし、稻葉君山氏の近代支那史には、一八五八年の終り頃の狀況として、太平軍に籍を置いたもの五十萬乃至六十萬の男子及び五十萬以上の女子があつたらしいと記してあり、各說區々で、ある時期まで次第に增加しつゝあつたといふ事を知り得るに止まり、實際の兵數は遽かに定め難い。而かも右にひいた矢野、稻葉兩氏の推定の餘りにも距りがあるのは何故か。それは、稻葉氏のは太平軍の南京入城後に於ける急激な增加數を含んでゐるからである。そしてその原因は徵兵制度の施行によるのであらうと推察される。

太平軍は地方民を强制して兵としたのであつて、野史の徵兵の條に、

太平軍之徵兵法。皆出之於强迫。

と記されてゐる。反抗する者に對しては假借するところなく迫害が加へられたのであつて、その狀況も野史に見えてゐる。かくして得た兵は各々その體格才幹に應じて適所に配備された。

併し乍ら太平軍の精銳はかゝる徵兵制度によつて得られた兵ではなかつた。兵數が少なかつた時に於て寧ろ太平軍はその威力を示し、南京占領後は腐敗の道を辿り初めたのである。太平軍の中堅は「宗教上の希望と政治上の目的即ち市民の自由、信仰の自由等人間の有する最高最貴の大望を懷いて團結集合した」のである。これは太平軍に多數の支那婦人が參加したといふ事實によつて裏書きされる。野史の職官の條には女軍師、女丞相以下數種の女官及び軍官の名稱を載せて支那の婦人がこの革命に於て一部の役割を果したといふ光輝ある歷史を物語つてゐる。

革命の初期、卽ち前述せる如く略南京の攻略當時までの太平軍の訓練と規律は實に嚴正であつた。『豐儀の地、人烟繁き處千五百哩も續いた其長い列を通じて劫掠、殺人、强奪、苟くも亞細亞諸國の戰爭中に有り勝ちな亂暴をする者は摘發されて死刑に處せられたので、かの淸敎徒の嚴格よりも更に甚だしく、彼等は同胞が好尙した肉慾の風習とも戰つた。かの十戒の道德上の規則は强行せられて、搗て加へて更に嚴しい解釋がこれに當て嵌められた。春情の萠發、淫濫な歌

誡、亂行を促す様な一切の刺戟物は禁ぜられ、飲酒、喫煙、賭博、惡口、殊に阿片を喫しての放縱は德行上少しも許さぬものとして斷然排除された。」【註】各十則より成る軍營規例、或は行營規例とか或は又五十九ケ條より成る禁律等が設けられ、可成りの程度迄嚴守されたやうであるが、殊に軍營規例の定むるところは注目すべき點が多い。

【註】稻葉君山「近世支那十講」による。

軍營規例

一、要レ恪二遵天令一。

二、要下熟二識天條讃美一。朝晩禮拜。感中謝規矩及所二頒行一詔諭上。

三、要下練二好心腸一。不レ得二吹烟飲酒一。公正和平。毋レ得二包レ弊狥レ情順レ下逆レ上。

四、要下同心合力。各遵二有司約束一。不レ得下隱二藏兵數一及匿中金銀器飾上。

五、要下別二男營女營一。不レ得二授受相親一。

六、要二謹熟日夜點兵。鳴鑼。吹角。擂鼓號令一。

七、要下無レ幹不レ得内過レ營越レ軍。荒レ悞公事中。

八、要二學習爲レ官稱呼問答禮制一。

九、要下各整二軍裝鎗礮一以備中急用上。

十、要レ不レ許下譏二言國法王章一訛中傳軍機將令上。

かゝる規律訓練をもつた太平軍が、既述官兵の腐敗墮落に比して民間の好意を得るのは當然で、太平軍は擧兵以來永安の包圍にしばしの恥を忍んだのみで、南京の奪取に至る迄は實に破竹の勢を以て進み且つ民衆を集め得たのである。

(C)　太平天國の政策について

既述せる處によつて農民の貧窮が太平天國革命への大きな動力であつた事を認むれば、革命政府の政策は當然それを排除する方向に向けられなければならない。そしてかゝる政策を行ふ事が更に民衆を獲得する原因となる。それ故に太平天國の政策にあつては、農民の貧窮を救ふこと——支那にあつては常に富を平均するといふ形で行はれる——が第一の眼目であつた。そこにこの革命の均產乃至は共產の思想が見られる。

この共產思想が最も著しく現はれたのは土地制度に於てゞある。支那に於て富の第一の標準は土地である。均田は均富を意味し、土地の集中は富の集中を意味する。土地を奪はれた貧農、流民を主戰隊としたこの革命が地主、商人、紳士官僚の手から土地を奪ひ、更に寺領及び族產としての土地をも全部沒收したのは當然で、この土地革命こそ太平天國革命の最大の意義でなければならぬ。

この革命にあらはれた共產思想も結局は支那に於て傳統的である均產の思想が元である。均產と共產とはその境するところ紙一重で、支那に於て共產主義が受け入れ易いと云はれるのも、この均產思想が古代から支那人の間に傳承されて居るからである。やゝ本論を離れるが少しくこの均產思想の沿革をたづねて見よう。

井田の傳へを殘した支那上代の氏族共產制が破れると、周の封建を經て戰國、秦漢から土地の私有兼併は既にその萌芽を現した。從つて富の平均も失はれることになつた。均產の思想は既に管子に見えてゐる。同書の國蓄篇には、民が

富めば祿を以て使ふべからず、又貧なれば罰をもつて威すべからずと言ひ、

法令之不レ行。萬民之不レ治。由二貧富之不一レ齊也。

と喝破した。老子もその道德經に於て財の均分が天然自然の法則である事を述べてゐる。

孔子の均產の思想は更に注目すべきものがある。論語季氏篇に曰く、

有レ國有レ家者。不レ患レ寡而患レ不レ均。不レ患レ貧而患レ不レ安。故均無レ貧。和無レ寡。安無レ傾。

かく孔子も均富を說いて後世まで大きな影響を與へたのであるが、右に見る如く人民の生活狀態は必ずしも富裕を期待するのでなく、財の兼併を妨いで富の平準されるのを望んだのであつて、これは支那民衆の大部分殊に農民大衆が遂に貧窮から脫出する事の出來なかつた運命を暗示して居るかに思はれる。

均產の手段としての均田の理想は、歷朝屢々その實現が試みられたのであるが、後魏孝文帝の英斷による均田法の實施が（四八五年）最も著名である。これによつて兼併の勢は一時阻まれたが、唐代の半ばから貨幣經濟の發達と共に土地の賣買質入れ等が起つて、土地私有が盛となつて以來豪家の兼併は恢復し、宋代に入るや全く私有制が確立して大地主が到る處に出現し、同時に小作制度が發達して重要な農業形態となるに至り、均產の理想は破壞されて仕舞つたのである。

こゝに於てか宋代には絕對無差別の富の均分を理想とする均產一揆といふものが起つた。北宋時代四川省に起つた王小波、李順等の一味と南宋初期湖南に於ける鐘相、楊太等の均產宗教匪とが此れである。此等は何れも官僚の苛斂誅求と土豪劣紳の兼併搾取による經濟的窮迫が直接の原因である。殊に南宋時代の均產匪は場所も現在共產黨の活舞臺たる湖南省であり又敎匪である點から太平天國革命との對照上興味が多いから極く概略を述べて見よう。

この一揆は高宗の建炎四年（一一三〇年）から紹興五年（一一三五年）に亘り、新宗敎を提唱して叛亂を起したのは鼎州武陵縣（湖南、常德）の農民鐘相であるが彼は間もなく斃に就き、餘黨の楊太（楊幺）等が其後に於て前後五ケ年餘兩湖各地に亂をなしたのである。

暴徒鐘相は前に述べた樣にもと武陵縣の農民であつたが、自ら神通に因て天と交通し、能く人の疾患を除くと稱して多くの信徒を得たので、其の徒は彼を呼んで「老爺」といひ、或は「天大聖」と稱した。彼のスローガンは、

『當下等二貴賤一均レ貧富上』

といふのであつて、階級の撤廢と貧富の均等とを實行せんとするのであつたから、貧窮に惱む農民は多く「入門」し、「拜爺」せんとする小民は路に絡繹たる狀態であつたといふ。

建炎四年二月擧兵後、僅か一ケ月餘にして鐘相は討伐軍の謀中に陷つて殺された。後繼者たる楊太等は、鐘相の幼子鐘子儀を奉じて大いに暴威を逞しくして宋朝の手を燒かせたが、遂に名將岳飛の爲に平定せしめられたのであつて、この亂に於ける岳飛の「岳軍」は恰も太平天國革命に於ける曾國藩の率ゐた「湘軍」に當るわけである。只惜しむらくはこの均產一揆に於ける內部の組織、敎義、信條等は所傳がなく明かにし難い。

【註】　宋代の均產一揆については主として重松俊章「宋代の均產一揆と其系統」（史學雜誌、第四十二卷、第八號）によつた。

太平天國革命に於ては奪還した土地を農民に分配したが、兼併を妨ぐ意味からその私有は許されなかつた。土地制度の概要は太平天國三年に頒行された「天朝田畝制度」に詳かである。右の書によれば天下の田を上上田より下下田に至

る九等に區分し、上田一畝を下下田三畝に當て、人口に照して男女を問はず其家族の多寡によつて分與したのでこれを分田といふのである。受田の率は十六歳以上になると男女一人毎に田を受け、十五歳以下はその半分であり、又若し一家六人で三人が好田を受くれば他の三人は醜田を受け、好醜を半分づゝ受けなければならぬといふ條件をつけてゐる。

こゝに注目すべきは女子が男子と同樣に分田に對する權利を持つてゐた事であるが、この革命の趣旨に於ては婦人の地位が一般に著しく向上して男女の平等權をある程度迄認めたのである。卽ち太平天國の女子は科擧に應ずる資格があり、結婚並びに貞操問題に關する地位を高めた外、蓄妾、娼妓、纏足が禁ぜられる等見るべきものがあつた。革命に際して女子が多數之に參加し、女營の組織があつた事は既に述べた。この努力は支那に於て有史以來全く虐げ續けられた女性の解放となつて酬ひられたわけではあるが、未だ不徹底の點多く、マルキシズムに於ける男女の同權と軌を一にするものとは言ひ難い。

支那の歷史を通觀した眼を以てすれば、右に述べた樣な詳細な規定が實際そのまゝに行はれたとは思はれないが、ともかく土地の私有制が可成りの程度に破壞されて了つた事は事實であり、革命亂の鎭定後もその恢復が不可能であつたと傳へられてゐる。又前揭「天朝田畝制度」に載せられた別の一節はよく共產思想を現はしてゐる。

凡天下田。天下人同耕。此處不レ足。則遷二彼處一。彼處不レ足。則遷二此處一。凡天下田。豐荒相通。此處荒。則移二彼豐處一以賑二此荒處一。彼處荒。則移二此豐處一以賑二彼荒處一。務使二天下共享二天父上主皇上帝大福一。有レ田同耕。有レ飯同食。有レ衣同穿。有レ錢同使。無二處不一レ均勻一。無二人不一レ飽煖一也。

かゝる共產思想は二十五戶を以て一公社といふ單位とした土地共產社會を形成せしむることになつたが、この社會は前述した土地の分配の外、財政及司法までも軍隊の長官たる師長旅長によつて管理され、每歳の收穫は一定の消費量を除いて皆國庫に歸することになつてゐたから、軍事共產制度とでも云ふべきものである。

太平軍が收入を得る道も共產乃至は均產の思想から出た方法であつて、極めて低率な租稅及び罰金を徵收する外には大體に於て富農豪家の財產を沒收するといふ原則によつたものである。

右の外養蠶、牧畜等の副業を奬勵するとか、饑饉に備へる爲の義倉を設置するとか、貨幣を鑄造して金融の調節をはかる等國民の經濟生活の安定を得しめんとする政策が行はれ、同時に奴婢の解放が實行された。

大體以上の如き諸政策の行はれる天地は、貧窮の底に喘いでゐる小農、流民等にとつては實に文字通りの太平天國と思はれたであらう。少くも革命の當初に於ては右の樣な理想の實現に邁進し、且つその實現もある程度迄伴つたと見られるから、大衆の支持を得た强大な勢力となつて行つたのである。

以上主として革命を發展の方向に推し進めた諸要因を縷述したが、言はんとする所は結局する處、農民の貧窮に盡きると言つてもいゝ。人類の革命史の恐らく總ての場合に、民衆の貧困が一要因をなしてゐることに氣がつくならば、今まで述べて來た事は決して特筆大書して珍らしがる程の事實ではなからう。併し乍ら他に見られない獨特の國民性を持ち、又教育程度の極端に低い支那の民衆にあつては自ら又その特異性を發見する事が出來る。

革命軍に參加した農民が革命の趣旨をどの程度に了解して居たか？甚しきに至つては滿洲朝廷の何たるかも知らない人々が無かつたと誰か斷言出來よう。どん底にある農民は要するに生きる事が問題である。食を與へて呉れるところ、そこに彼等の天國がある。太平天國革命は農民の解放を目ざして立つたから農民の來り投じたものが多かつた。併し同

時に、それと全く同じ狀態におかれた彼等の仲間は、やはり食を得る爲に封建勢力を代表して反革命軍にも加はつて同志討をしなければならなかつた。理論とか主義とかは彼等にあつては第二次的の問題で、生きる事それが常に第一次的の問題であつた。

この事は現在の支那に於ける共産主義運動其他民衆運動の各般に亙つてそのまゝ當て嵌まる眞理である。

第三章　太平天國革命沒落の原因

太平天國革命は、排滿興漢の旗幟と共産の理想とを揭げて事を起してより、盛衰を重ね拾五年の鬪爭を續けたが、彼等は遂に望みを遂げることが出來ず、天王洪秀全も空しく南京城に恨みを呑むに至つたのであるが、虐政を重ねた滿洲朝への反抗と、農民の貧窮を救はんとする熱意とが漢族農民の支持にも不拘達成され得なかつたのは何故であらうか。それは內的には革命そのものゝ腐敗と、外的には討伐軍の成功と、この二つが齎した結果に外ならない。そして討伐軍といふのは曾國藩の率ゐた湘軍とワード、ゴルドンの率ゐた聯合軍とを主なるものとする。

第一節　革命內部の敗腐と崩壞

太平天國革命の沒落の重要な原因は、革命そのものゝ腐敗崩壞にあつた事は明らかである。

破綻の第一段は先づ太平軍內部の內訌に始まる。これは早くも咸豐六年（一八五六年）に起つた東王楊秀清の誅戮を發端として、この事件に關係のあつた北王韋昌輝が翼王石達開の敵意に斃るゝことゝなり、爾後とかく幹部間に圓滑を缺くことになつた。これより先南王馮雲山は全州に戰死し、西王蕭朝貴は既に長沙に斃れてゐるから、今又東王北王の二將

を失つては太平天國の廟堂は可成りの空虛を來し、洪秀全としても少からざる寂寞を覺えざるを得なかつたであらう。

かゝる內訌の由來する處は遠かに定め難いけれども、積極消極の意見の相違、利害の背馳等の外に、支那人に特有の名譽心と猜疑心の錯綜があつた事は否むべからざる處であらう。

この內訌の結果から來る將帥の缺乏と士氣の阻喪とは、忠王李秀成の出現と淸朝側に於ける捻匪の反亂（一八五三——一八六八年）、英佛聯合軍の北京侵入事件（一八五六——一八六〇）等の受難とによつて償はれた結果となり、再び太平軍は初志貫徹の機會に惠まれたのであるが、革命內部の腐敗がそれを許さなかつた。

天王洪秀全が先づ墮落に於ての先鞭をつけた。李一塵氏が『太平天國革命運動史』中に、前述した楊秀淸の誅戮事件を次の如く解釋したのは興味がある。

『工人（楊秀淸）的意見欲推進革命向前發展。小資產階級（洪秀全）就勦搖了。而地主（韋昌輝）就手舞足蹈的屠殺工人。這齣革命的悲劇的發生。便加快促成了太平天國革命的沒落的命運。』（勞働者と地主ブルジョアジーとの衝突をいふ）

南京籠城後の洪秀全は、天王の榮華に醉つて北伐を志とせずして墮落の道を辿つたのであつて、稻葉君山氏の近代支那史に曰く、

西人が彼れ（洪秀全——筆者）を評して支那人民に對しマホメットたるの資格を自然に有し、又は低級の位地に於けるジョセフ、スミス Joseph Smith（1805—1844. an American farmer : founder and first Propet of the Mormon Church : assassinated.［New Standard Dictionary］筆者）たるものなりしが如し。されど其結果は忽ちにしてライデンのジョン John of Leyden（1510—1536. a Dutch fanatical leader of the Anabaptists in the capture of Munster［New Standard Dictionary］——筆者）に墮落し、又その八十八人の神聖なる婦人及び無數の嬖妾と共に粉黛の氣立ち迷ふ室內に耽溺するに至りぬとせるは當れり。

洪秀全初め諸王はやがて夫々廣大な宮室を造營して住み、服裝の如き頗る華美となつて男子にして女子の衣服を著けるといふ有樣、天王の宮殿の如きは日々萬人を督し力を併せて興築し、半歲を經て漸く竣工を見た極めて壯麗のものであつたといふ。

主腦部の墮落がこゝに至つては民衆の不信任を召き離脫せしむるは當然であり、共產の理想も根柢に於て動搖を見るから諸政策の實行も不可能となる。同時に軍規の嚴正も亂れ始めたから、太平軍は腐敗した官兵と何等擇ぶ處なく、避官迎賊の語も意味を失つて仕舞つたのである。

民衆の歸向を離れた時、太平軍は强制的な徵兵制度によつて戰鬪力を維持せんとしたが、既に內部からの崩壞途上にあつた革命軍は、以前の如き鬪志と秩序を恢復する事は困難であつた。しかもその時反革命の新たな精銳は起つた。殊に太平軍が上海を攻擊して外國の干涉を惹起したのは太平天國にとつては大きな不幸であつた。

第二節　討伐軍の成功

（A）曾國藩の湘軍について

太平天國革命に際して討伐の重任にあつた官兵が腐敗してゐた狀態の一斑は既に述べたが、その戰鬪力の缺乏は討伐

の度重なる失敗によつて事實上證明されることになつた。道光三十年（一八五〇年）早くも部下を督して平樂に向つた廣東巡撫鄭祖琛は何等の功をも收めることが出來なかつた。次いで廣東總督徐廣縉が派遣を命ぜられたが、これは政府からの信賴をも得ることが出來ず、重ねて林則徐が欽差大臣として廣西に遣はされたのであるが、惜むべし彼は赴任の途上に於て病死した。道光三十年十一月兩江總督より兩廣總督に轉じた李星沅も戰死し、次いで大學士賽尙阿が官軍を指揮して咸豐二年永安を包圍し一時太平軍を苦しめたが、これも見事敵を逸して駐蹕に會つてゐる。代つて軍務についた徐廣縉も功なくして革職次いで貶黜された。兩江總督陸建瀛、河南巡撫琦善、兩江總督楊文貞、同怡良等も次々に用ひられたが成功を收めずして斥けられたのである。

かゝる時むべからざる官兵に代つて、太平軍討伐の功名を贏得たのは實に地方出身の義勇軍即ち鄕勇であつた。鄕勇でこの革命討伐に際して名實共に最高の地位を占めるのは曾國藩の指揮した湘軍であるが、その外にも江忠源の楚勇、李鴻章の淮勇等がある。そして今や帝位の救濟者が滿人に非ざる漢人から出たことは注目に値ひする所である。

叛亂の鎭定と秩序の維持に對する官兵の無力が暴露されて、地方團練及び鄕勇の必要が認められたのは既に早く嘉慶中に起つた白蓮敎徒の亂の時にあつた。九年の久しきに亙つた（一七九六——一八〇四年）この內亂は、八旗によらず、綠營によらず、全く團練と鄕勇の力によつて平定されたと云つていゝ。團練は鄕民が自費をもつて聯合して鄕里を防衛し、內には匪徒をして容留せしめず、外には匪徒をして侵掠せしめざるを期する組織であり、これは當時の地方自治組織上重要な地位を占める一種の警察制度たる保甲の法に基礎をおく。鄕勇は要するに義勇兵である。

赫々たる武勳をたてた湘軍即ち湘軍は曾國藩の出身地たる湖南湘鄕の義勇兵で團練を基礎としたものである。湖南には既に江忠源の統率に成る楚勇があつて湘勇の先驅をなした。

併し曾國藩の苦心は一通りではなかつたと思はれる。それは湘軍の主要部分を占めた兵士はやはり太平軍の構成分子をなした農民であつたからである。如何にして太平軍の宣傳から農民をひき戻すか。如何にして兵を集め且つ革命軍に打勝つ戰鬪力を訓練するか、それが彼にあつては非常な問題であつた。

團練といふのは元來自衛團であつて、鄕里から外境に出て匪賊と交戰するのはその本旨でない。太平天國革命に刺戟されて各地に爭亂盜賊が簇發したので、革命軍討伐の爲に數多くの地方人が自分の村落を遠く離れて戰に從ふことは自衛上不安と思はれたに違ひないし、又太平軍の進むところ生活の安定を持たない下層民は之に雲集雷同する可能性も多かつたのである。

曾國藩が非常に自重して用兵を急がなかつたのも訓練の必要を痛感したのと、一つには右に述べた樣な不安から討伐に對する充分の自信がなく、やゝ躊躇してゐた傾きもあつたからである。前揭 Hail の "Tsêng kuo-fan and the Taiping Rebellion." に曰く

"Tsêng (曾國藩—筆者) Himself was impressed with the value of these village companies of volunteer militia (鄕勇を指す——筆者), which he believed ought to suffice for keeping order in the country places; though he was not sure that thy would do against those who had been infected with the poison of the Taiping principles and had thrown off the teaching of confucius."

又同書に

"He forsaw two parts of success with eight parts of trouble."

と彼の書信をひいて自信がなかつた狀態を記してゐる。

太平軍が咸豐二年に長沙の圍みを解いて北上した當時、母の喪に遭ひ湘鄉に歸籍してゐた曾國藩が、長沙に於て巡撫張亮基と共に團練事宜を辦ずる諭旨を奉じ、湘鄉の羅澤南、王鑫等の召募訓練したる湘鄉の湘勇即ち湘勇約千人を基礎として編制したのが湘軍である。湘軍は兵士たるべき者を募集し、明代の兵學大家として著名な戚繼光の兵法によつて隊伍を編制し、兵技を教練したのであるが、儒生(書生)をもつて將校に任じたといふ點に於てその特色が窺はれる。

湘軍の太平軍に打勝つ戰鬪力と兵數とを得たことに就ては、曾國藩個人としての人格力量を全然度外視することは出來ない。曾國藩が非凡の人物であつた事は各方面から窺ひ得るが、特に彼が鄉勇募集の爲に努力した態度は歎賞に値するものがある。彼は親しく手書して鄉黨の人士耆老に勸め、幼賤と雖も身自らこれに下つて必ず對等の禮を與へ、布告するところは皆書狀の式を採つて自署し以て地方賢俊を招致したので、爲めに山野材智の士は曾國藩の誠意に感じ、未だ彼を見ない人でも皆曾公は與に事を行ふべしとなしたと傳へられてゐる。人を用ふる道にも頗る妙を得て居たらしく、その才幹智能に應じて適所に配し、聰俊愿慤各々その用を盡さしめて材を棄てる事が無かつたといふ。

然るに湘軍は結局支那に於ける封建勢力を代表するものと考へなければならない。湘軍は元來地方の自衞團から成立した。革命から——卽ち下層農民の解放、封建的土地所有の破壞等々から——眞に自分を守る必要のある者は果して誰であつたか。殊に自衞と言つても、太平軍は原則として特に革命の當初に於て少くとも殺戮は固く禁ぜられてゐたのであるから、何者にも共通する生命の自衞よりもある階級の人達にのみ必要な經濟的の自衞だけが問題だつたと言はなければならない。果して然りとすれば富農、地主、商人等の利害を代表して反革命の旗をたてたのが湘軍であつたと見るべきである。曾國藩その人も固い忠誠の念には一語をも挾むことは出來ないが、結局する處富農出身の貴族紳士であつて、反革命軍の指導者としての資格は充分に具へて居たわけであつた。かく見て來た時、湘軍に於ても兵士の大部分が農民であつたといふ事實を如何に解釋すべきかゞ問題となる。

曾國藩が募兵の基礎を農民に置いた事は明らかである。彼の書狀に

爲二兵勇一者。年少力强。樸實有二農民之士氣一者爲レ上。油頭滑面。有二市井氣一者。有二衙門氣一者。概不二收用一。

とあるから、太平軍に加はつた貧農流民に比較すれば概して上層の農民であつたと見ることは出來るが、農民一般としては經濟的には破綻に瀕してゐた折であるから所謂貧農の部に入る者が相當多かつたと見なければならない。中農以上の者とか商人は自衞の必要もあるけれど而も此等の者共が言はゞ自分達の爲に立ち上つて吳れた仲間を討伐すべき湘軍に加はつて行つたのは何故か。

こゝには再び前章の終りに述べた解釋を繰返さなければならない。曰く「窮乏せる農民には主義より理論よりその日の生活の糧が第一次的の必需品である」ことである。革命軍も反革命軍もその大部分を占めた貧農は齊しく逼迫した生活苦の爲にいたましくも血みどろな同志討をしたのである。

太平軍の討伐に義勇兵團の價値と必要とを認めた曾國藩も右の事實を見逃す筈は無かつた。討伐の義勇兵を募集する唯一の武器が何であるか彼は賢くも知り抜いて居た。軍費の調達に彼が苦心したことはこの間の消息を物語るものである。屢々引いた Hail の "Tséng kuo-fan and the Taiping Rebellion." によると、湘軍の出動について軍費が最低の見

積りで毎月約一萬兩を要するとされたが、曾國藩はこれを得る爲に地方に於ける平時の賦稅の外、湖南、江西、浙江の三省に對する增稅と、以上の三省に於て所謂空名の告身（名を記さない官吏の辭令で實官襲爵の爲に用ひられる）四千通を賣り出して利を得ることゝを朝廷に奏請してゐる。曾國藩の如き人までが實官襲爵の擧に出でんとしたのを見ても彼が如何に軍費の必要を痛感してゐたかゞ判ると同時に、一面當時に於てかゝる行爲が盛んに而も平然と行はれてゐたといふ證左ともなる。

從つて又一八五四年に湘軍が始めて長江を下つて活動を開始した時、彈藥武器の準備と同樣に食糧品の準備が極めてよく爲されてゐたことは曾國藩の用意周到なことを思はせ、進むところ掠奪を事とする支那軍隊の常と趣を異にし、來り投ずる者には食物を與へるといふ彼獨特の誘惑政策であつたことが察せられる。この際は米一萬二千ピクル（picul—1 picul 約 133⅓ 斤）木炭一萬八千ピクル、四萬カッティ（Catty—1 catty は約 1⅓ 斤）の鹽と三萬カッティの油とが準備されてあつたと傳へられてゐる。（Hail : Tséng kuo-fan and the Taiping Rebellion.”）

又咸豐四年に曾國藩が發した「討粵匪檄」を見ると、太平軍の暴狀を擧げた後に「倘し血性の男子ありて義旅を號召し吾が征勦を助くるもののあらば、本部堂引いて心腹となし口糧を酌給すべし。倘し抱道の君子、天主教の中原に橫行するを痛み、赫然奮怒して吾が道を衞るもののあらば、本部堂之を幕府に禮し待つに賓師を以てせん。倘し義に仗るの仁人、を捐て餉を助くる者あらば千金以內は給するに實收の部照を以てし、千金以上は專摺して優叙を請はん。倘し久しく賊中に陷り自ら拔いて來歸し、其頭目を殺し、城を以て來降するものあらば、本部堂之を帳下に收め官爵を奏授せん。倘し被脅數年、髮長すること數寸、陣に臨み機を棄て、徒手歸誠するものあらば一概に死を免じ、資遣して籍に回へさん。」

と言つて種々の恩典を並べたてゝは勤王の士を促してゐるが、貧者に取つて「口糧」にありつけることは何よりの誘惑であつたのである。

湘軍記に依ると、勇となるもの初めは先づ小口糧と稱して日に百文を給せられ、後大營に至つて點檢の上軍と成れば大口糖を給せられることになつてゐる。なほ陣亡する者は郵銀として三十兩、傷兵は傷の重輕によつて十五兩、十兩、五兩を下されるし、廢人となつた者には別に手當が加へられるといふ規定も具つてゐる。

湘軍の編制は太平軍のそれに劣らず實に整然たるものがあり、陸軍の外水軍馬軍に及んで居る。尤もこの內水軍は咸豐二年頃から戰局が長江を中心とするに至り必要に迫られて咸豐三年に設けられた長江水師であつて成名標、褚汝航、楊載福、彭玉麟等をして統べしめたものである。陸軍の方は創設當時三百六十名を一營としてゐたが、後一營五百人とし、一營は四哨に分たれて居た。之を統ぶる者は羅澤南、王鑫、塔齊布等であつた。

太平天國革命軍がその宣傳と政策とによつて農民を革命にひき入れ、限りない發展を續けて行くといふ勢が太平天國內部の腐敗化によつて阻まれたことは曾國藩の側に於ては湘軍の發展上幸な事であつた。太平天國革命が或る程度迄自滅の道を辿つたものである事は前節に於て述べた通りである。曾國藩によつて爲された反革命の宣傳中最も注目すべきものは例の「討粵匪檄」であるが、彼の立場を明かにする爲こゝに引用して見る。（稻葉氏「近代支那史」所載の書下し文による）

『逆徒洪秀全、楊秀清、稱亂、以來今に五年生、靈を荼毒する數百萬、州縣を蹂躪する五千餘里、過ぐるところの境船隻大小に論なく、人民貧富に論なく、一概に搶掠し罄盡して寸草を留めず。その據して賊中に入るは衣服を剝取し銀錢を搜括し銀五兩に滿ちて賊に獻ぜざるものは即ち斬首を行ふ。男は日に米一合を給し、之を驅りて陣に臨み

前に向ひ、之を驅りて城を築き、濠を濬らしむ。婦女は日に米一合を給し、之を驅りて陣に登り夜を守り、之を驅りて米を運び煤を挑せしむ。婦女にして解脚を肯ぜざれば卽ち立ちどころに其足を斬りて衆婦に示し、船戸にして陰かに逃歸を謀るあれば其屍を倒擔して以て衆船に示せり。粤匪自ら安富尊榮に居り、而も我が兩湖三江被脅の人を視るに、曾て犬豕牛馬だもこれに若かず。此れその殘忍慘酷、凡そ血氣あるもの、未だ之を聞き痛憾せざるものあらさるなり。唐虞三代より以來、歷世聖人の名教を扶持し、人倫を敦叙し、君臣父子、上下尊卑、秩然として冠履の倒置すべからさるが如し。粤匪外夷の緒を緝み、天主の教を崇び、その僞君僞相より下兵卒賤役に逮ぶ迄、皆兄弟を以て之を稱す、謂へらく惟天、父と稱すべし、此外凡そ民の父皆兄弟なり、凡そ民の母皆姉妹なり。農自ら耕して以て賦を納るゝ能はず、謂へらく貨は皆天主の貨なりと。士は孔子の經を誦する能はず、而かも別に所謂耶蘇の說新約の書ありと。中國數千年、禮儀、人倫、詩書典則を擧げて、一旦地を掃つて蕩盡す。此れ豈に獨り我大淸の變のみならんや。乃ち開闢以來の名教の奇變なり。我が孔子孟子の九原に痛哭するところ、凡そ讀書識字のもの、又焉ぞ袖手安生、一たび之が所を爲さゞるべけんや。古より生きて功德あれば、沒して神となる。王道は明を治め神道は幽を治む。亂臣賊子窮凶極醜と雖も亦往往にして神祇を敬畏す。李自成は曲阜に到りて聖廟を犯さず、張獻忠は梓潼に到りて又文昌を祭れり。粤匪柳州の學宮を焚き、宣聖の木主、十哲の兩廡を毀ち、狼籍滿地、これに嗣ぎ、過ぐるところの郡縣先づ廟宇を毀ち卽ち、忠臣義士關帝岳王の凜々たる其の宮室をも亦汚し、其身首を殘し以て佛寺道院、城隍社壇に到り廟として焚かざるなく、像として滅ぜざるなし。斯かるは鬼神の共に憤怒して一たび此の憾みを冥冥の中に雪がんと欲するものなり。本部堂天子の命を奉じ師二萬を統べ、水陸竝進、誓て賊に臥薪嘗膽、凶逆を殄くし、我が被擄の船隻を救ひ、被脅の民人を拔出せんとす。特に君父霄肝の勤勞を紓ぶるのみならず、而も且つ孔孟人倫の隱痛を慰めん。特に百萬生靈のために枉殺の仇を報ずるのみならず、而も且つ上下神祇の爲めに被奪者の憾みを雪がん。是によつて檄を遠近に傳へ、咸な聞知するあらしむ。倘し血性の男子ありて義旅を號召し、吾が征勦を助くるものあらば本部堂引いて心腹となし、口糧を酌給すべし。倘し抱道君子、天主教の中原に橫行するを痛み、赫然奮怒して吾が道を衞るものあらば、本部堂之を幕府に禮し、待つに賓師を以てせん。倘し義に仗るの仁人、銀を捐て餉を助くる者あらば、千金以內は給するに實收の部照を以てし千金以上は專摺して優叙を請はん、倘し久しく賊中に捐陷り、自ら拔いて來歸し、其の頭目を殺し、城を以て來降するものあらば本部堂之を帳下に收め官僻を奏授せん。倘し被脅數年髮長ずること數寸、陣に臨み機を乘て、徒手歸誠するものあらば一概に死を免じ、資遣して籍に回へさん。在昔唐元明の末群盜毛の如し。皆な主昏に政亂るゝに由る。今天子憂勤惕厲、救天恤民、田に賦を加へず、戶に丁を抽せず、列聖深厚の仁を以て暴虐無賴の賊を討つ。遲速に論なく、終に滅亡に歸すること智者を待たずして明けし。爾ち被脅の人、甘心逆に從ひ、天誅を拒むものと、大兵一たび壓すれば玉石俱に焚かん。亦た更に分別を爲す能はず、本部堂德薄く能鮮し。獨り忠信の二字に仗りて行軍の本となす、上に日月あり下に鬼神あり、明に浩浩たる長江の水あり、幽にこれより前き殉難各忠臣烈士の魂あり、實に吾心に鑒み吾が信に聽けよ。檄到らば律令の如く忽かにすること勿かれ。』

右の檄文は湘軍の精神ともなり信條ともなつたものであらうが、革命軍に對する非難の言辭は必ずしも全部肯綮に當つてゐるとは限らない。又數へたてた各種の罪惡の或ものに於ては、官兵の行動がなほ一層甚だしかつたことがないで

もない。併し乍ら全體として右の檄文が湘軍側の革命軍に對する反感を煽つた事は少なからぬものがあつたと思はれる。殊に支那の傳統思想たる儒教への反抗といふ事實が、湘軍の主要なる指導權を掌握してゐた士人階級の反感を募らした効果は著しかつたであらう。

又曾國藩は反革命戰に極めて必要な鄕黨の一致と義勇心とを鼓舞し、又湘軍の士氣の昂揚に資せんが爲に「保守平安歌を初め「水師得勝歌」「陸軍得勝歌」「愛民歌」「解放歌」等を作つたが、保守平安歌は最も有名で咸豐二年に湘鄕に於て作つたものであり「莫逃走」「要齊心」「操武藝」の三章から成つてゐて、よく曾國藩の討伐に對する用意の程を窺ひ得る。

太平軍を滅ぼすに大きな力を持つたのは兵(常備兵)に非ずして勇(義勇兵)であつたが、この兵と勇との關係は頗る圓滑を缺ぎ、各地に於て私鬪を續けたので湘軍の活動がこの爲に阻まれたところが少くない。咸豐三年湘軍が長沙に居た頃湘軍の一兵が小銃の演習に際して營兵を誤つて傷つけた爲に旗隊が出て湘軍を攻めようとした事がある。曾國藩が試銃者を鞭つて繩かに謝罪したといふ。その後塔齊布が教練してゐた辰勇と永順の兵とが遂に衝突して干戈を交へた。その時は曾國藩の公館も兵に圍まれて從者が殺されるといふ騷ぎに至つたが、曾國藩は革命軍の勢ひが猛烈で討伐の事が急であり重要であることを知つてゐたから、避くるに若かずと言つて即日衡州に移駐した。

かゝる經緯があつたにも不拘、湘軍は著々と功を擧げ、安徽の李鴻章の率ゐた淮勇とか、曾國藩の弟曾國筌が長沙に於て作つた鄕勇とかと協力して討伐の歩を進めたのであつたが、太平天國革命軍に最後のとゞめを刺すのは英佛等外國の干渉によらなければならなかつた。

(B)　外國軍隊について(特に常勝軍)

湘軍なくしては太平天國革命軍を亡ぼし得なかつたのは疑ひない事實であるが、同時に又外國勢力の干渉が全然なかつたならば太平軍は沒落しなかつたかも知れないこと、少くともまだ長い命數を保ち得たであらう。然るにこの革命の怒濤が揚子江沿岸の歐羅巴ブルジョアジーの利害を脅威するに至るや、彼等は滿洲朝廷の革命討伐軍に助力するを惜しまなかつた。太平軍が支那國內の封建勢力の反擊のみならず、外國の帝國主義の機に乘じた進擊をも受けなければならなかつた事は革命に取つては非常な不幸であつた。稻葉氏の『近世支那十講』に、リンドレー氏の「太平天國」(Augustus F. Lindley：“Ti-pin Tien Kwoh.”)の一節を譯載して、

『……遂に最後の帝の御代に國民の感情は最早抑ふることが出來なくなつて、一八五〇年太平の大叛亂が破裂した。此起源、此行進は何れの狀態に於ても驚嘆すべきもので、若し曩に英國の不正なる干渉がなかつたならば、實にこれは滿洲朝の顚覆のみならず尙ほ廣大なる支那帝國に洽く基督教の設立を產み出したであらう!』

と述べてあるのは、後半の基督教云々は別問題としても、ある程度まで事實を穿つたものと言ふ事が出來る。

一八五三年に太平軍が南京に根據を定めた當初から、この革命は歐米人の異常な注意を惹いたのであつたが、殊に英國、米國、佛國の三ケ國は太平天國の勢力と、この革命を指導した教義の性質とを確める爲に、續々と使節を天京に派遣した。これは太平天國革命の根幹をなしたと思はれた基督教に對する彼等の期待からであつて、要するに基督教を假面とした帝國主義的侵略の望みを確める爲であつた。英のボンハム、米のマーシャル、及びマクレーン、佛のド・ブール

ブーロン等がその主なる者であるが、彼等の觀察によつてその本國政府へ報告したもの、要旨は、大體に於て何れも局外中立を守るべきであるといふ意見を述べたものであつた。

併し彼等の關心は上海を中心とする揚子江沿岸の通商の利害にあつた。太平軍の北上に際して上海に於ける各國領事は中立を守ることに一決したとは云へ、萬一に備へて上海の防禦手段を講じ、義勇兵を募集したり陸戰隊を上陸せしめたりして警戒を怠らなかつたが、太平軍が上海を脅かすに至るや、英佛人を中心とした外國の勢力は清兵を援助して太平軍に對抗せんとする方針に出で、有名な常勝軍（Ever-Victorius Army）が出現した。

常勝軍は上海に於ける富商が組織した愛國會の委囑を受けて、米人 Ward が咸豐十年（一八六〇年）に少數の外人部隊の指揮に當つたに初まる。Ward は當時愛國會の長であつた Takee といふ銀行家から成功の曉には三萬兩の謝金を受ける約束で太平軍の討伐に從ふ事になつたと傳へられ、又彼の下に最初に集つた海員を主とした外國人も掠奪が出來る見込からであつたと言はれてゐる。Ward の軍隊も初め上海近郊の松江城の攻擊戰に失敗した外、十年の秋には青浦を攻擊して擊退される等餘り振はなかつたが、後次第に戰鬪力を增して來たのは外國兵を漸次撤してその代りに支那兵を用ひ、外國人の士官に隷屬せしめて訓練を積んだからである。

外人の兵力を利用して太平軍を討伐しようといふ意見は、太平軍によつて直接の打擊を受ける江蘇官紳から出たものであつて、北京朝廷とか曾國藩は初めこれに餘り同意を示さなかつたのであるが、常勝軍は他の英佛聯合軍及び李鴻章の率ゐた淮勇などゝ相助けて偉功を立てゝ行つた。常勝軍はその初め兵數僅かに五百人程であつたが、後には四、五千人の多數となり、將校は種々の外國人から成つてゐたが下士官以下は皆支那人で、その中には太平軍から歸降した者もあつた。こゝで吾々は又屢々繰返へした問題をもう一度考へさせられる。即ち馮桂芬の華爾傳に曰く

余在二李公一見二常勝軍支應之籍一。西將薪水。月百金以上者百數十人。視二他軍一數倍。ロ糧軍械稱レ是。

主義よりも理論よりも重大な或ものが支那に於ては常に存在する。そして又支那人も訓練の如何によつては——例へばある外國人がその指導權を握ることによつて——可成りの强力な軍隊が得られることも知られる。この點吾々に何等かの暗示を與へるかに思はれる。

Ward は浙江省慈谿に於ける戰鬪において重傷の末陣歿し（同治元年——一八六二年）、常勝軍は一時李鴻章の直轄に歸したが、後 Burgevin 及び英人大尉 Holland の兩指揮官に、次いで同治二年（一八六三年）英人少佐 Gordon の指揮下に置かれるに至つた。

湘軍の威力が曾國藩の個人的な人格に負ふ處が多かつた如く、其後の常勝軍が旌旗一變した感を與へたのも Gordon の力量によるところ少くなかつたと言はなければならない。個人の力を過大視することは常に誤謬を齎し易いのであるが、一個の將帥の才幹が軍隊の威力の上に非常な影響を有することは認めなければなるまい。謝禮の金に多少なりと目をくれたと言はれる Wand と、常勝軍の解散後恩賞を辭して清廷を驚かした Gordon との間には、人格上可なりの距りが感ぜられる。更に又一本の鞭と一個の双眼鏡を持つて危地に軍の先頭に立ち、彈丸雨飛の間にあつて泰然自若としてゐたと傳へられる彼の勇氣と沈着とが、常勝軍をして眞の常勝軍たらしめたのである。

常勝軍は主として李鴻章の淮軍と協力し、英佛の聯合軍は左宗棠の軍と行動を共にし、曾國藩、曾國荃の精銳も來り援け、又彭玉麟、楊玉斌の率ゐる長江水師も來り會し、かゝる討伐軍の一大聯合は遂に頑强な太平軍を破ることを得、

同治三年（一八六四年）洪秀全は毒を仰いで死し、次いで南京城が陷落したのである。かくて常勝軍は輝かしい使命を果し、同治三年四月二十七日（一八六四年六月一日）を以て解散するに至つた。

第三節　プロレタリアートの力量の薄弱

以上の外更に沒落の理由としては、當時に於けるプロレタリアートの力量の薄弱であつた事である。

支那には十九世紀の上半期頃既に多くの手工業工場があつたが、未だ正しい意味での工場工業ではなく、プロレタリアートの基礎も未だ確立して居なかつた。そこで太平天國軍が南京に到るや、その指導者たる小ブルジョア階級が苟安、腐化、優柔不斷に墮して革命を破壞に導いたに對し、これに代つて農民革命を指導するものなく、終に曾國藩によつて平定される所となつたのである。

第四章　結　語

以上によつて極めて簡略に太平天國革命の發展とその沒落の概觀を終つた。このプルジョア民主々義的な農民革命運動が果してどの程度迄の意味に於て、その後に來たれる國民革命及び共產主義運動に對する前哨戰であつたか、又は之を現在の中國共產軍の活動に比してどの點に類似と相違を發見すべきか等は、次に殘された一つの研究問題である。

併し吾々は此等を通觀して教へられる處があつた。その最も重要なものは反覆重說した例の支那人の生命への執着とその腐敗性とである。人類の本能として生命への執着を行動萬事の原動力と考へ、又苟安に墮して腐敗し易き事は見易い道理であり、支那人でなくとも主義か飯かと言はれた時に先づ飯に喰ひつくことは自然であらう。只支那に於ては、殊に農民の間に於て常に「主義」又は「理論」と「飯」と何れかといふ選擇が現實の問題として續いてゐたといふ丈けである。それと共に、革命指導者の腐敗性が、此の運動を失敗に歸せしめた點も大いに注意を要すべき所である。

更に又支那人もその環境と指導とによつては相等の武力をも具へ得る事をも知つた吾々は、一見或る解決の鍵を與へられたかに感ぜられる。併し問題はもつと複雜である。與へられたのは解決ではなくて實は疑問である。

食はしむればどうにでもなる支那人、飯のある處が「太平天國」の支那人。如何にして食はせるかといふ事も可成りの難問題であるが、もう一つ根本につゝこんだ問題は誰が（或は誰等が）それを爲し得るかといふ事である。

第二篇　中國共産黨の現狀

第一章　中國共産黨の成立

一九一七年の露國の革命は支那朝野に非常なるセンセーションを與へたが、就中青年學徒に對し一種名狀すべからざる刺戟を與へた。その結果、支那の青年をして自國の腐敗せる政治の革新は全くその双肩に擔ふべきものなりとの觀念を深からしむると共に、從來の如何なる政治的變革方式を以てするも、到底露國革命の如き偉大なる成果を收め得ずと妄信し、今後吾々青年の進むべき道は一に露國共産主義によるの外なしとなし、露國革命謳歌の聲は燎原の火の如く支那を風靡するに至つた。一方露國は共産主義による思想的世界統一の大策を樹て、この目的達成の爲めに全世界の弱小民族の解放、並に擁護の態度を宣明し、盛んに共産主義普及の運動に着手した。斯くて支那青年學徒の妄信と露國の野心とは期せずして合致したるのみならず、世界大戰後澎湃として勃興し來れる自由平等、民族獨立、階級打破の思想と相俟つて、支那に於ける社會主義の研究熱、共産主義の傳播は非常なる勢力を以て展開することゝなつた。

斯くて民國七年(一九一八年)から同九年にかけて支那南北に亘つて行はれた共産主義宣傳運動は、軈て萌芽時代から一歩を進めて結黨の時期に這つた。卽ち民國九年夏コミンテルン極東部長ウオイチンスキーは北京に於て李大釗【註一】

と會見し、更に南下して上海に赴き、同年九月【註二】前北京大學教授にして中國共產黨の中心人物たる陳獨秀【註三】を筆頭に、張東蓀(上海時事新報主筆)、邵力子(上海民國日報主筆)、陳望道、李漢俊(日本六高學生)、沈玄廬、楊明齊、張太雷を上海佛租界霞飛路漁洋里の一屋【註四】に召集し、秘密裡に創立發起人會を開き、中國共產黨組織の議を定め、『共產黨』と題する機關雜誌を發行することゝなつた。而して當時の記錄によると、中國共產黨が如何なる政綱を有し、如何なる活動を爲すべきかに就ては具體的に議決はされなかつたやうであるが、併し當面の目的として

一、國內に於ける工作

二、露國遠東大學への留學生派遣

の二項【註五】が承認されたやうである。而して第一項の工作とは勞働組合を作ることを意味し、第二項の實行對象としては上海に外國語學校を作つた。尙ほ當時の黨員たりしものが、『蘇俄陰謀文書彙編』第二冊(註五參照)十一頁に記載する所によると、前記九名の外に戴季陶、施存統、阮嘯仙の三名が擧げられてゐる。而して右會合終了後、陳獨秀は專ら黨勢の擴張の爲めに活動し、同年十月廣東に赴いて同地に黨支部を創設し、譚平山、陳公博の兩名を勸誘入黨せしめ、斯くて中國共產黨の幹部は北京、上海、廣東を支那革命運動の中心とし、漸次湖南、湖北、河南の各省に進出すると共に、東京、巴里等の支那留學生に宣傳を開始した。その結果黨勢漸く擴充し來つたので、翌民國十年(一九二一年)七月【註六】上海佛租界に於て中國共產黨の成立大會を兼ね、第一回全國大會を開き、茲に始めて中國共產黨は正式の指導部を有つ組織となるを得たのである。

註一　天津に近き一寒村に生れ、天津の北洋法政學堂を經て早大文科を卒業、留學當時同盟會に入つた。歸國後北京大學教授、同圖書館主任となり、民國七年(一九一八年)春マルクス主義研究會を創立、一九二〇年共產黨入黨、爾來引續き北京に在つて黨勢を指導した。一九二二年共產黨がコミンテルンの指令によつて國民黨との合作を決するや、彼は同鄉の張繼の紹介で國民黨に入黨し、一九二四年一月の中國國民黨改組に際して執行委員となつたが、一九二七年四月張作霖の北京ロシア大使館手入れの際捕縛され、同二十八日絞殺せられた。彼は學者としては陳獨秀以上で、終始一貫共產主義の爲めに奮鬪し、『南陳北李』と推稱され、北方黨員の總帥であつた。

註二　周佛海著『共產黨成立時狀況』による。

註三　字は仲甫、安徽省懷寧の人、一八七九年生。日本に留學し、歸國後安徽高等學堂の教務長となり、一九一七年には北京大學文科學長となり、學生に對し極力急進思想を鼓吹し、又胡適と共に支那文學革命を起し、雜誌『新青年』を機關誌として白話文を提倡し、孔子教の排擊をなした。一九二〇年北京で社會主義宣傳の傳單を撒布した廉により逮捕され、後赦されて上海に入り、終に中國共產黨の創立に成功した。爾後國共分裂までは彼の全盛時代で、李大釗と共に竝び稱せられ、一時は『支那のレニン』とまで評されたが、國共分裂の責任を問はれ、コミンテルンの叱責を受け、一九二七年八月七日の緊急會議以後、日和見主義の罪名を負はされ、『支那のトロツキー』として黨中樞から遠ざけられてゐたが、一九二九年十一月十五日終に黨籍を剝奪され、爾來上海に在つて病を養ひつゝあつたが、一九三二年十月十五日逮捕せられ、同年十二月末『危害民國緊急罪法』第六條、第二條第二款により起訴せられ遂に八年の刑に處せられるに至つた。

註四　『醒獅』第一四四期所載『中國共產黨之始末』による。

註五　『中國共產黨簡明歷史』(中國共產黨から黨の現狀に就てのコミンテルンへの報告で、李大釗の執筆と傳へられ、一九二四年四月、張作霖の北京ロシア大使館搜索の際發見せられた、『蘇俄陰謀文書彙編』の第二冊に採錄されてゐる。)による。

註六　中國共產黨の成立期に就ては、民國九年(一九二〇年)說、一九二一年說、一九一八年說等種々あるが、その正確な時期を明示したものは一もない。併し種々の情報を綜合して見るに、一九二〇年は單なる創立發起人會の程度であつて、中國共產黨が正式の指導部を有する黨として成立したのは一九二一年七月說が正しいやうである。

第二章　中國共產黨の發展經過概要

かくして成立した中國共產黨は果して如何なる發展過程をたどつて來たか。それは大體三つの時期に分けることが出來る。卽ち第一期は黨の成立（一九二一年七月）より中國國民黨との合作（一九二四年——民國十三年——一月）までの三ケ年間で、萌芽時代と稱すべく、第二期は前期の後を承けて、中國國民黨と共に民族革命の聯合戰線を形成し、一九二七年（民國十六年）七月の國共分裂まで、滿三年六ケ月間に亘り共產黨として最も華かに活動した時代であつて、全盛時代と稱すべく、第三期は國共分裂後の八・七緊急會議〔民國十六年（一九二七年）八月七日の九江會議〕より現在までの時期で、七ケ年餘を經過してゐるが、この時期に於て黨は本來の面目に立ち歸り、一時機宜の策である聯合戰線から退き、純然たる共產主義革命の遂行を目指してゐるから、之を甦生時代と稱して差支へあるまい。次下順次に各時代の大要を述べることにしよう。

第一節　中國共產黨の萌芽時代（一九二一年七月——一九二四年一月）

この時代は黨員の數も少く、尙ほ多分に啓蒙團體としての要素を具備してゐた。從つてその勢力も微弱であつたが、

併し香港海員罷業、【註一】京漢鐵道罷業（所謂二・七事件を含む）【註二】を指導するとか、第一回勞働大會【註三】を開くとか、侮り難い成績を示してゐる。が大體から見て黨勢極めて幼稚で、黨員數も一九二一年頃漸く四十幾名、その後多少は增加したであらうが、それとて知れた程であつた。黨の生みの親であるコミンテルンはこの形成を觀取し、コミンテルン第二回大會で決定された『植民地革命の初期に於ては、インテリゲンチイア及びブルジョアジーの民主主義革命を助け、これと聯合戰線を張り、以て帝國主義に反抗しなければならぬ』云々の所謂植民地革命の原理に依り、支那に於ける小ブルジョア及びインテリゲンチヤの政黨である中國國民黨との合作を企圖し、一九二二年（民國十一年）八月の黨中央執行委員の杭州會議（コミンテルン代表マアリン指導）【註四】以後、專ら中國國民黨との聯繫に依る民族革命聯合戰線の形成を準備した。この準備工作は約一年半繼續され、一九二四年一月の中國國民黨第一回全國代表大會に至つて成功した。卽ち第一期萌芽時代に於ける黨の活動は、

一、勞働者の組織
二、罷業指導の試練
三、民族革命聯合戰線形成の準備工作

の三つに盡きるのであつて、農民運動には殆ど手を着けなかつた。

註一　海員工會は鐵路總工會と共に共產黨の二大有力なる組合であつた。一つは香港で英國に對し、一つは五卅事件の際上海で列國に對してである。香港海員罷業は、一九二二年（民國十一年）一月十三日から三月五日まで五十餘日に亘つて行はれた支那に於ける最初の大規模なストライキである。最初は支那人船員と英人船主との間の經濟的鬪爭だつたが、後には香港、上海全勞働者のゼネ・ストとなり、終に香港政廳と廣東政府（孫文）との抗爭にまで展開した。

原因は物價騰貴による賃銀四割値上げに關する海員工會の要求を英人船主が拒絕し、且つ工會を否認した爲めで、工會のストライキ宣言、英國品ボイコットに始まり、香港の荷揚人足、帆船組合、小蒸汽乘組員等の十數團體の團體罷業これに次ぎ、最後に外人使用支那人にまで波及し、三十二組合、九萬一千七百人の參加を見、三月上旬(一)賃銀一割五分乃至三割增額(二)船主は海員組合を通じて海員を雇入れ、雇傭契約は組合の承認を要するといふ條件で落着した。

註二　京漢鐵道では一九二一年春から勞働組合組織が進められ、一九二二年八月全線從業員の總罷業が勝利を以て終り、一九二三年二月一日、愈々鐵路總工會の創立大會が開かれようとし、同鐵路十五支部の代議員六十五名、全勞働團體三十數團の代表百三十數名が鄭州に集つた時、當時北京の實權を握つてゐた吳佩孚の彈壓が下つた。會衆は大衆デモを以て會場を占領し、創立大會は最後まで行はれたが、官憲は大會出席者を監禁し、總工會鄭州支部を閉鎖した。これに因つてゼネ・ストが開始されたが二月七日吳佩孚は最後の手段を執り沿線各地に於て勞働者の逮捕銃殺を見、長辛店では組合幹部十一名銃殺、その釋放要求のデモを行つた三、四千名の勞働者に向つて軍隊は發砲し、三十餘名の死者を出し、漢口では一萬人のデモが行はれ、三百餘名の死傷者を出した。このゼネ・ストは結局慘敗に終つたが、これを契機として勞働組合運動は益々盛んになつて行つた。

註三　一九二二年五月一日から五日間廣東に於て開催、左の三件を決議した。

1、全國總工會組織を準備すること

2、第二回勞働大會召集

3、プロフインテルン加入の件

註四　陳獨秀はその一九二九年十二月十日附の『全黨同志に告ぐるの書』に於て、『二全大會(一九二二年七月廣東で開かれた共產黨第二次全國代表大會)後間もなく、コミンテルン代表マアリンの請求に依り、中委全體會議が杭州西湖で開かれ、席上マアリンから國共合作の提議があつた。彼に依れば、中國國民黨はブルジョア政黨でなく、各階級の聯合政黨であるから、プロレタリアートは同黨に加入して之を改造し、革命の推進力とすべきだといふ。中委李大釗、張國燾、高語罕及び私は斷然これに反對した。その理由は、中國國民黨内に於ける聯合は級階組織を混合し、我等の獨立政策を牽制するといふに在つた。アテリンはこれに對し、中國共產黨はコミンテルンの決議に服從するや否やを以て迫り、中委は紀律尊重のため已むなくこの提議を容れ、黨員の中國國民黨加入を承認した』と記してゐる。

右決議に基づいて、先づ李大釗は張繼の紹介で個人として中國國民黨に入黨した。

第二節　中國共產黨の全盛時代（一九二四年一月――一九二七年七月）

中國共產黨が國民黨と合作して聯合戰線を張るやうになつて以來、黨は合法政黨としての存在を示し、その尖銳分子を國民黨に入黨させ、殆ど思ふがまゝに國民黨を引き廻した。コミンテルンの三段援助、卽ち人材(ボロヂン・ガロン等の顧問就聘)、知惠(中國共產黨への指令、中國國民黨及び北伐軍の組織)、武器、資金の援助もこの時期に於て頓に白熱化を示した。かくて中國共產黨は中國國民黨の傘下に入つて傘上に舞ひ、聯合戰線のムウヴキング・スピリツトとなり政治、勞働運動、農民運動の三大方面に多大の活躍を現はした。是に於て國民黨としては全く庇を貸して母屋をとられた貌となり、共產黨に自由に飜弄せられるに至つた。

政治方面に就て言へば、共產黨は國民黨を助けて北伐を遂行し、出師以來九ケ月にして長江の線を略取し、一面國民黨左派と緊密に握手して、一九二七年二月には武漢政府を樹立した。

勞働運動の方面では、中華全國總工會【註一】の組織、五卅事件に因る上海ゼネス・ト【註二】、沙面事件に因る對英經濟絕交【註三】の指導を最も重なる業績とする。

農民運動の方面に於ては、表面國民黨の看板の下に、廣東省を眞先きに農民協會【註四】を組織させ、その實際の指導權は共產黨に於て握り、五卅事件が農民の後押しがなかつた爲めに挫敗した經驗からして、同事件後は一層農民運動に

力を注ぐやうになり、北伐開始と共に新に得た地方に運動の火の手を擴げて多大の收獲を得た。この三方面の運動が相並んで昂揚した爲め、黨員の數も一九二五年五月の五卅事件當時の約九百名が、同年末には約二萬人に激增し、二年後の一九二七年五月には六萬人となり、これに黨の外廓機關たる中國共產主者青年團員【註五】四萬を加ふれば、總員實に十萬【註六】に達するの盛況を呈した。併しこの全盛時代にも遂に終焉が來た。國共合作成立以來、支那の常として何時かは分裂するものと思はれてゐた民族革命聯合戰線に破綻を生じ、國共分離が終に來たからである。

國共兩黨の合作成立當初から、國民黨の內部には、容共反對の氣運が相當に濃厚であつた。極右派の馮自由一派は、國民黨一全大會（一九二四年一月）當時既に反共を聲明し、次いで右派張繼の反共を見、一九二五年三月孫文逝去後、新右派或は理論的右派戴天仇等も反共態度を明らかにし、同十月右派及び理論的右派の北京に於ける西山會議となつた。併しこの時は共產派、左派（汪兆銘等）、中間派（蔣介石等）の結束が尙ほ鞏固で、西山會議派の運動は大勢を動かすことが出來なかつた。所が一九二六年に入ると、蔣介石の實力俄然增大し、三月二十日有名な中山艦事件【註七】が起つて蔣と共產派及び左派との間に溝が出來、五月、蔣が共產派牽制の意味の黨務整理案を中央執行委員會に提出可決するに及んで關係益々惡化し、兩後左派及び共產派は徐々に蔣介石一派の攻擊を開始し、先づ第一に國民黨の元老張靜江を吾庸老朽として排擊し、續いて蔣の西山派（戴天仇等）及び舊官僚（王正廷、黃郛等）起用を攻擊し、更に中央黨部及び國民政府の北遷問題に關し、蔣一派の南昌說を押し切つて武漢移轉を決議（九月二十五日）し、十月中國國民黨中央各省區聯席會議なるものを開いて、殆ど共產黨の宣言と選ぶ所のない政綱及び宣言を可決するに及んで、兩派の關係は殆ど救ふべからざる程度にまで押し詰められ、一方共產派及び左派は唐生智及び張發奎軍を背景とし、ボロヂンを總帥として、徐謙、鄧演達を中心に對右派作戰のスタートを切る手段として大衆を煽動して一九二七年一月三日漢口英租界占領を企て、暴動政策の最初の試練に成功した。降つて二月に入るや遂に武漢政府を樹立すると共に、蔣介石排斥運動を起した。次で三月十日國民黨中央執行委員第三次全體會議を開き、蔣介石を常務委員及び政治委員より蹴落して、左派及び共產派中心の委員を選定したのみならず、（一）聯露容共、農工政策を確認し、（二）土豪劣紳懲罰條例の制定、等を敢行し、武漢共產派の勢力は愈々優勢となつた。一方蔣介石並にその一派はこれ等左派及び共產派の橫暴に極度に憤慨したが、目前に北軍の大敵を控へてゐる際とてこれに應酬する遑なく、そのまゝ北伐を續行し、三月二十一日には上海を、同二十四日には南京を占領し、長江以南は完全に蔣介石軍の手に歸した。所が此頃より上海は共產派の勢力が伸び、上海の實權は彼等に掌握せられるに至つたので、豫てより共產派及び左派と決裂の決心を堅めてゐた蔣介石は、遂に四月十二日、クウデターを決行して、總工會を襲擊し、勞働者、糾察隊の武裝解除をなし、共產派を上海から驅逐し、續いて十八日武漢政府移轉の形式を以て南京に國民政府を樹立し、共產黨（共產黨排除）を行ふことになつた。

蔣介石の右翼轉向後、武漢政府は左派（汪兆銘等）、極左派（鄧演達等）及び共產派のブロックで形成されてゐたが、このブロックも爾後三ケ月餘りしか續かなかつた。而もその分裂の原因は農民問題であつた。

五卅事件以後共產黨が力を注いで來た農民運動は、この時に至つて燎原の火の如く熾烈となり、一九二六年十月の共產黨農業綱領、一九二七年三月國民黨中央で定めた農民問題案、同年五月六日の共產黨第五回大會の農業問題決議の何れの範圍をも越えて、農民の直接行動に依る一切の土地の沒收が行はれるやうになり、特に湖南に於てそれが甚しかつた。

所が湖南での被害者中には、湖南派軍人の緣故者が多かつたので、彼等は一致して反共產の態度に出で、五月十八日、唐生智部下の夏斗寅が武昌附近で兵變を起し、二十一日夜同じく唐の部下である長沙守備團長許克祥これに應じて起ち清鄉の名の下に農民協會その他の共產黨機關を破壞し、黨員を捕縛し、共產派を一掃した。これが所謂長沙馬夜事件である。（馬は電報の日附で二十一日に當る。）爾來この反共空氣が左派に作用し、更にコミンテルンからの農民武裝指令が、コミンテルン派遣員印度人ロオイによつて汪兆銘に內示（六月十五日）されるに及んで、左派も亦漸く共產黨の野心に恐怖を感じ、蔣派の後を遂うて右翼陣營に移行し、七月中旬にはコミンテルンの指令に基き極左派及び共產派が武漢政府を退出するに至つた。（但し國民黨よりは脫退せず）、於是武漢政府は全く右傾化し、國共兩派の民族革命聯合戰線は終に破れ、共產黨の全盛時代はかくして終焉を告げたのである。而してこれより以來、軍閥と共產黨の對立、蔣一派のナショナル・ブルジョアジーとプロレタリアートとの直接鬪爭は次第に尖銳化するに至つた。

註一　一九二五年五月廣東に於て第二回全國勞働大會を開き、組合員五十四萬人を有する百六十五組合（一說によれば二百八十五）の代表二百七十八名出席、全國の組合を統一して中華全國總工會を組織しプロフインテルン及び中國共產黨の指導の下に置いた）

註二　一九二五年五月二十九日、上海內外綿會社で社員と職工の衝突が起り、卽死一名、重傷六名を出した。翌五月三十日これに對する上海民衆の示威運動となり、その行列が南京路上で租界警官隊と衝突し、六名卽死、四十餘名負傷した。この報道が全市に擴がり學生團體、勞働組合、各路商會聯合會、及び總商會の聯合團體は、罷市並に外國工場に於けるゼネ・ストを決行した。この鬪爭は九月迄續行されたが、彼等の要求は何一つ通らないで終結した。この事件は勞働運動としては失敗であつたけれ共反帝國主義運動としては恐るべき成功を吉げ、支那社會革命史上に一新紀元を劃し、支那革命の眞の出發點として重視すべきものとされてゐる。而してこのゼネ・ストを指導したのは共產黨で、後で『支那のスターリン』と呼ばれた李立三がそのリーダーであつた。

註三　五卅事件の報が廣東に傳はるや、排日英の空氣濃厚となり、六月二十三日沙面外國租界で民衆の示威行列と英佛陸戰隊と衝突し、七十名の死者と五十名の負傷者を出したので、支那側は非常に激昂し、遂に英貨排斥、對英經濟絕交となり、爾來一年半の久しきに及び、翌一九二六年十月やつと終結した。而してこの背後には共產系分子が指導してゐたことは勿論である。

註四　一種の農民組合であつて、協會の目的は次の二方面に分れてゐた。
1、苛稅雜稅の減少、土豪劣紳の絕滅、潰兵、土匪に對する抵抗
2、農村組織の改良、農村自治の促進、農民教育の發達
又自衞の目的を達するため農民自衞軍を附屬せしめた。全國會員數は北伐前は九十六七萬人であつたが、北伐の進展と共に湖南、湖北、江西、江蘇から中南支一帶に擴がり、殊に湖南省に於て最も盛んであつた。武漢政府時代には會員數は四百萬人に達したと言はれてゐる。

註五　中國共產黨の外廓運動機關の部參照

註六　一九二九年六月二十七日『イズベスチヤ』紙による。

註七　海軍局長李之龍（共產黨員）は黃埔軍官學校に中山、實璧の二艦を廻し、不穩の擧動があつたので、以前から共產派の幹部に不快の感を懷いてゐた蔣介石は、これを機會にして李之龍を捕縛し、軍官學校內の共產黨代表高語罕等を監禁し、共產系糾察隊の武裝を解除し、東山に在つたロシア人顧問の邸宅を包圍した。これが所謂中山艦事件である。

第三節　中國共產黨の甦生時代（一九二七年八月以降現在）

武漢政府を退出した共產黨は、一九二七年七月末南昌に集合し、賀龍、葉挺、朱德の三軍を煽動して七月三十一日南昌を占領、八月一日李立三、蘇兆徵、林祖涵、張國燾、惲代英、周恩來、彭湃等の共產黨左派を以て革命委員會を組織したが、

（これを八・一南昌暴動と云ふ）張發奎及び朱培德の討伐に會ひ、六日南昌を放棄するの已むなきに至つたので、黨員は九江に集合し、八月七日コミンテルンの新代表（ボロヂン及びロオイは、日和見主義の故を以て召喚）の指導の下に緊急擴大會議を開き日和見主義の克服と今後の方針樹立を協議した。即ち、黨幹部陳獨秀、譚平山、及びコミンテルン代表ボロヂン、ロオイ等が、彼等と左派との決裂を恐れ、極左分子（彭湃、羅綺園等）を仰壓して微溫的な農業決議（共產黨五全大會決議）を採擇し、極左分子と農民の直接行動を阻止し、反動軍閥の跋扈を制止し得ず、換言すれば、農民運動の大勢を理解、指導し得ず日和見主義の過誤に陷つたことが、武漢に於ける失敗の原因であると痛烈に指摘し、從來の共產黨幹部派であつた譚平山、張國燾は殆ど無視せられ、黨の實權は李立三、瞿秋白等の手に握られ、陳獨秀一派は殆ど除外せられたのである。かくて同會議に於て、『中國共產黨の任務と策略』といふ議案を可決し、今後は勞農の武裝暴動に依つて地主（小地主を含む）の土地を沒收し、農村革命を實行してソヴエート政權樹立を目標に猛進し、並に國民黨より離脫して從來の日和見主義を淸算することを決定した。

斯くて八七緊急會議に於て決定せる暴動政策實行の爲め黨員は各地に潛入し、勞働運動及び農民運動を煽動し、各地にソヴエート政府樹立の準備に着手した。即ち賀龍、葉挺軍は汕頭放棄後、彭湃指導の下に、廣東省海豐、陸豐地方に潛入し、十一月七日支那最初のソヴエートである海陸豐ソヴエート政府〔註一〕を樹立し、翌年三月迄持續した。

上海では黨中央の指令により、江蘇省委指導の下に、八月中旬より十二月にかけ、外支人經營の工場に罷業を頻發せしめた。宜興、無錫、長沙等にも農民及び勞働者の暴動、罷業があり、殊に農民運動方面では秋の收穫期を利用し、毛澤東がその最も優れた指導者であつた。（此の一聯の農民暴動を四省——湖南、湖北、安徽、江西、——秋收暴動と稱す）

八七會議後廣東に於ける左傾勞動者は、黨南方局及び廣東省委（主席張太雷）指導の下に、武裝暴動に依る廣東奪取を計畫してゐたが、十二月十一日武裝暴動を以て公安局を占領して、勞農兵聯合辦事處とし、引續き各機關を占領、十二日中央公園にて勞農兵大會を開き、ソヴエート委員として蘇兆徵、黃平、彭湃、張太雷、惲代英、葉挺等を擧げ、蘇を主席に、葉を勞農赤軍總司令に選任し、ソヴエート政府を樹立したが、十三日李福林軍に擊破され、張太雷は戰死し、僅か五六百名だけが海陸豐に逃れただけで、その他暴徒全部武裝解除、五千餘名銃殺された。その際ロシア領事館を捜査した結果、背後にロシアがあつたことが判明したので、南京政府は十五日對露國交を斷絶した。共產黨は之を廣東コムミユウンといひ、革命退潮期の殿戰となつた。

此の廣東暴動を最後の一閃光として、地下運動に入つて黨は、一九二八年上半期に於ては僅かに四月、朱德、毛澤東によつて共產軍第四軍が、五月彭德懷の叛變によつて同第五軍が結成せられた位の所で、大體に於に沈默を守つてゐた。只特筆すべきことは、一九二七年七月決議（農民及び勞働者の武裝暴動並に共產黨の武漢政府示威退出の指令）以來鳴りを鎭めてゐたコミンテルンが、一九二八年二月第九回擴大會議を開いて支那問題を審議し、從來の武裝暴動が失敗に歸したに鑑み、七月決議を改變して支那革命を以て今尙ほブルジョア民主主義革命の過程に在るものとなし、從つてプロレタリア革命を時期尙早と斷定すると共に、（原案提出者はスターリン、ブハリン、李立三、向忠發の四人）

一、勞働農民兩運動の並進を期し、

二、近き將來の革命的高漲に備ふべく、日和見主義的鬪爭を避け、地下秘密組織運動によつて大衆獲得に全力を注ぎ、之をソヴエートに組織し、

三、ソヴエート區域では紅軍支隊組織を主務とすべき

旨を指令するに至つた。

右決議の趣旨は、同年七月モスクワで開かれたコミンテルン六全大會、並にそれと併行して同地で開かれた中國共產黨六全大會に於て正式に採用され、且つ中國共產黨は根本任務として

一、地主階級の排除、徹底的土地革命の實行

二、帝國主義を驅逐して支那の統一を完成する

三、武裝暴動に依つて反革命資產階級たる國民黨政權を打倒し、ソヴエート政權を建設すること

を決議し、更に中國共產黨黨章を制定したのである。

この六全大會以後、黨は右方針に從つて徐々にその鬪爭力を恢復し、中南支各地に共產軍及びソヴエート區域の發展擴大を見るに至つたが、八七會議以來殆ど除外せられてゐた陳獨秀一派は黨幹部の暴動主義によるソヴエート政權樹立の方針に對し猛然として反對し、『斯かる方策は結局國民の同情を失ふばかりで、共產黨がいざ第三革命をやらうと云ふ場合に暴動主義を勵行しようとしても出來ない。故に今日は寧ろ黨を整理し、國民大衆の內に鞏固たる組織を作り、訓練に從事すべきである。』と極力暴動主義を否認した。於是、黨幹部は陳獨秀一派の遣り口は黨の規律を亂す反革命者なりとして斷然處分することゝなり、一九二九年十一月十五日、陳獨秀及び彭述之、高語罕、劉仁靜等を除名したのである。これに對し、陳獨秀は十二月十日『全國同志に告ぐる書』と題し、長文の駁論を發表し、續いて陳及び彭述之等八十一名の連名を以て宣言を發表(十二月十五日)し、之を以て彼等同志(取消派又は解消派と稱せらる)の今後の團體的意

見とする旨を宣言した。支那のトロッキー派である彼等取消派の理論は、この二宣告につきると言つてもよいのであつて、その理論の基礎は大要次の如くである。

『支那は現實的に資本主義社會となつた。自然支那社會の經濟機構は資本主義的生產方法と生產關係とが支配的地位にある。支那內部の主要なる統治者は、支那資產階級であり、帝國主義の資本勢力を後援となしてゐる。そのため帝國主義は支那の封建經濟の基礎を破壞し、支那資本主義を推し進めた直接の素因であり、その點に支那資本主義發展の可能がある。支那農村階級の分化は、資本主義商品の農村輸出の結果に外ならぬ。支那の土地革命は地主を排擊する必要がない。同時に帝國主義的統治に至らしめたブルジョアジーを排擊すべきのみだ。國際資本主義は現在著しい變化と動搖がなく、世界革命は低落時期に入つた。この時期に於て支那は一九二七年の革命により旣にブルジョア民主々義革命を完成し、同時にブルジョアジーの統治は漸次安定しつゝある。かうした安定は反面に於て革命的風潮を低落せしめた。幹部派の稱する革命高漲期は、認識不足たるを免れぬ。勢ひ支那革命は各種各樣の資本主義的鬪爭である。』【註二】

これは更に大要左の諸點に要約することが出來る。

(一)封建殘餘の勢力は支那に於てその優勢なる作用を失つた。(二)ブルジョアジーは封建殘餘の勢力に戰ひ勝つたのみでなく、帝國主義をも亦克服するに至つた(陳獨秀は帝國主義の讓歩と援助とを取得したと云ふ)。(三)ために統治階級は安定し革命は失敗した。現在は革命の落潮期である。(四)從つてソヴエート政權の建立には贊成しない。而も國民會議の開催を主張する。

その後取消派は、運動資金に窮した爲め、漸次その勢力を低下し、一九三二年十月陳獨秀の逮捕（第一章註三參照）と共に殆ど全滅するに至り、遂に社會民主黨ＡＢ團に合流するものが續出した程である。

この陳獨秀一派の除名事件以來、中國共產黨は幾多の分派を生じたが、この事が實にその端緒を作つたのである。斯くして八七會議後の黨の實權は李立三一派の掌握する所となつたのである。

これと相前後して、江西全省ソヴエート政府（龍巖）、湘鄂革委會（湖南平江）、東江革委會（廣東海豐）を始めとし、相當基礎鞏固なソヴエート區域が成立してゐたので、一九三〇年五月、此等のソヴエート政府（東固）、閩西ソヴエート區域が成立してゐたので、一九三〇年五月、此等のソヴエート政權及びソ區の連絡の爲に、上海郊外に於て第一次中國ソヴエート區域代表大會を開き、代表者四十九名出席の上

一、共產軍及び武裝農民の擴大計畫案
二、ソヴエート組織法
三、土地暫行法
四、勞働保護法

を決議し、更に六月十一日黨中央政治局會議に於て、『一省或は數省に於ける首先的勝利の必要』を高調したる黨現下の政治的任務に關する歷史的の決議を採擇した。

黨及び共產軍は此の方針に從つて俄然積極的に活動を開始した。時恰も一九二九年來持ち越しの反蔣內亂（蔣閻馮の抗爭）が最高潮に達し南北果して何れが勝つか豫側を許さない情勢であつたので、黨及び共產軍は、國內軍閥の混戰を利して一擧に革命戰爭に變ぜしむべく、長沙及び武漢占領を企圖し、六月末、湖南省政府主席何健が、山西軍攻擊のため軍の一部を山東に派遣し、省內警備手薄となつたに乘じ、共產軍第五軍（彭德懷）及び第八軍（黃公略）等約三萬は相率ゐて長沙に進擊し、七月二十七日夕便衣隊を放つて何健の總指揮部を襲擊放火し、同夜九時長沙は完全に共產軍の手に歸し、何健は身を以て遁れ、翌二十八日には李立三を主席とする長沙ソヴエート政府を樹立し、帝國主義者の一切の財產沒收、各大工場、銀行、交通機關の沒收、友邦蘇聯との提携、各官衙機關の破壞、勞農階級の解放、軍閥打倒、不平等條約取消、租界回收等の布告を出し、且つ主なる官廳及び在留外人の家屋を燒拂ひ、所謂ソヴエート式の活動を開始した。

於是、何健は列强並に各方面の援軍を得てこれが奪回を策し、八月五日遂に長沙を恢復することが出來た。かくして長沙ソヴエート政府は成立後僅かに十日にして倒壞した。

長沙暴動の失敗は、必然の結果として李立三の政治的立場に影響した。これより先、一九三〇年四月頃より黨內の一部（陳紹玉、何子述等のロシア留學生派、卽ち上海駐在コミンテルン代表ミフの系統、ミフはコミンテルン切つての支那通で、元莫思科中山大學學長）に李立三コースに對する反對論があり、同年六月十一日の政治局會議が、李の指導の下に、向忠發、周恩來、項英等によつて、『一省或は數省の首先的勝利の必要』てふ歷史的決議を採擇するや、ロシア留學生派は猛然これに反對したのであるが、長沙暴動が失敗するや、彼等は口實を得て益々攻擊を盛んにした。李立三、ミフ兩派の爭ひは、卽ち勞働者出身の首領に對するインテリの反抗と見るべきである。於是、コミンテルンは中國共產黨に對して抗議的指令を發した。この指令は十一月十六日黨本部に送達されたが、それは中國共產黨の戰略、戰術、卽ち從來の理論的指導者であつた李立三の政治的策略に重大なる誤謬があると指摘警告し、その變更を指示したもので、『李立三は誤謬に滿ちた而も完全なる一系統を造出し、マルクス、レーニン主義に反對のコースを定めたこの方略は具

體的事實及び大衆から離脫し、勢ひ自己的發展中に在つて自ら盲動主義、冒險主義的策略に引導せざるを得なかつた。この方針は「左傾」的空談を以て消極主義ではないやうに見せかけたが、實質的には日和見主義であつた』と喝破し、更に李立三が支那革命運動の機運が全國的に高潮してゐると過大に認定し、かゝる認識の下に全國的暴動を計畫せることを誤謬とし、かくの如きは客觀的情勢の分析及び鬪爭力量の分析を爲さなかつたことに基因するものとして次の諸點を指摘した。

一、中國各地の經濟發展の不均等並に革命運動發展の不平衡を認識せず、『一省或は數省の首先勝利』の前途は全國の直接革命の下に在りて、始めて實現することが出來ると觀察した。

二、中國革命と世界革命との關係に對し、『世界無產階級直接革命の形勢(即ち李の所謂革命の高潮)がなければ、決して中國革命の勝利を持續する能はず』と言つてゐるが、これは根本的に中國革命の勝利を信ぜず、又中國革命力量の中國反革命(國民黨政權等を指す)及び帝國主義に對する戰勝を信じないものであつて、トロツキーと右傾取消派の所謂『國際帝國主義の力量は非常に大であるから、世界革命戰爭は帝國主義相互の戰爭がなければ不可能である』と同樣、中國革命も成功の望みがない』と云ふのと一般である。レーニンは世界資本主義の不平衡は無條件の公律であると言つた。李は中國革命勝利の主要條件は全世界無產階級の中國革命に對する一致行動であると言つてゐるが、これは世界資本主義發展の不平衡の事實を推翻するものである。

三、革命時期と鬪爭力量の對比に對し、完全にマルクス、レーニン主義的分析を爲さず、帝國主義の中國に於ける巨大なる作用に對しても亦完全に測定をなさず、反革命軍閥が相當の軍事力量を有することにも注意せず、農民及び青年團、勞働組合を合併するの誤謬を犯した。【註三】

中國共產黨中央政治局は、前記コミンテルンよりの李立三コースに對する嚴重なる指摘及び抗議を接受するや、直に『全國同志に告ぐる書』を發表し、李立三コースの錯誤を忌憚なく分析暴露するに至つた。かくして一九二七年國共分裂以來、中國共產黨を自由に牛耳り、自他共に支那のスターリンを以て任じてゐた李立三も陳獨秀同樣遂に失脚するに至つたのである。(但し李は十一月二十五日の中央政治局に於て自己の錯誤を自認した爲め除名には附されず)その後黨は翌三一年一月八日上海に於て四中全會を開き、李立三は自己の誤謬を承認する聲明書を寄せ、間もなく註露代表の一員としてモスクワに去り、全會は李立三コースの誤謬を糾正し、コミンテルン、コースに從ふことを高唱した。

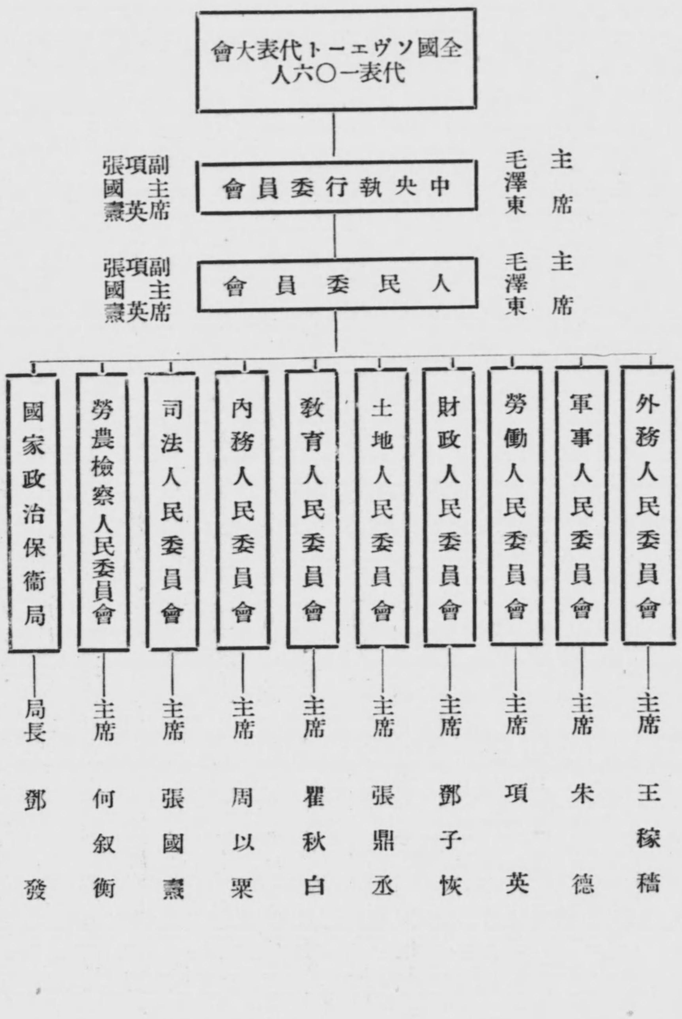
四中全會後瞿秋白、李維漢等は責任の地位を去り、向忠發、周恩來、陳紹玉、沈澤民等を以て新幹部を形成したが、國共分裂後滿三ケ年間に亙つて、黨の實權を握つてゐた李立三派の實勢力は容易に克服出來ず、項英、何孟雄、羅章龍(全國總工會主席)、唐宏景等の調和派が起つて陳紹玉派に對抗し、內訌益々擴大した。併しコミンテルンは飽くまでミフ派たる新幹部を支持したので、二月二日羅章龍は除名され、下つて六月十五日には太平洋勞働組合書記ヌウラン夫妻上海にて逮捕され、更に二十一日には總書記向忠發同じく上海に於て逮捕銃殺せられ、後又何孟雄、韓麟符(北支に於ける黨の有名な組織者)、羅綺園、潘問友等も相次いで逮捕され、かくして黨中央は完全にミフ派によつて占められ、左の顏振れで新中央が組織された。

總書記　陳紹玉　組織部長　張聞天　軍事部長　周恩來　宣傳部長　沈澤民　婦女部長　孟慶樹（陳紹玉の妻）

併し乍ら、新中央の威令は全國には行はれず、李立三派及び調和派の各地に於ける勢力は、容易に絶滅すべくもなく、三派相對立して內訌を續け、黨務は異常に澁滯を呈するに至つた。

所が一方ソヴエート區及び共產軍の方は非常なる發展を見るに至つたので、黨中央としても臨時政府樹立の必要を感じ、內々その準備委員會を組織して工作を開始してゐたが、遂に一九三一年十一月七日江西省瑞金に於て、中華ソヴエート第一次全國代表大會を開き、憲法、勞働法、土地法等の決議を採擇し、中華ソヴエート共和國臨時中央政府を樹立したのである。回顧すれば、黨成立してより正に十ケ年にして始めて中央政府を樹立したのであるが、これ中國共產黨の歷史に於て、六全大會と併稱するに足るべき劃時代的の出來事であつたのである。因に一全大會では左記六十二名を中蘇臨時政府中央執行委員に任命し、又同政府の組織系統を左の如く決定した。

毛澤東　項英　張國燾　周恩來　盧福垣　朱德　瞿秋白
張鼎丞　鄧發　王稼穡　徐錫根　范樂春　陳韶玉　彭德懷
關向應　孔荷寵　方志敏　伍弼時　賀龍　夏曦　葛耀山
林彪　黃平　譚根林　曾山　羅登賢　陳郁　韋拔群
滕代遠　佘漢朝　阮亞仙　劉光禹　周以栗　徐特立　邵式平
段德昌　屈登高　鄧子恢　劉少奇　劉大朝　陳巫人　袁德生
崔琪　古大存　彭軋　陳福元　虛德光　洪紫清　吳致民
劉（建中）　李宗柏　劉生元　王永盛　胡均鶴　張華元　何叔衡
黃甦　胡海　肖垣太　羅炳輝　陳毅　張雲逸



中蘇臨時政府成立後の黨の發展は、果然目覺ましいものがあつた。卽ち共產軍は恰も雪達磨の如く轉展する毎に擴大し、ソヴエート區域も亦これに比例して發展し、南京政府は數度の討伐を決行せるにも拘らず、その都度何れも失敗に歸し、南京政府にとつて一大脅威を感ぜしむるに至つた。於是當局は凡有るスパイ政策を用ひて黨の祕密探査に努めた結果、遂に李立三、向忠發、周恩來と共に四大健將と稱せられてゐた黨の大立物顧順章が裏切つて黨の祕密本部を暴露したので、一九三二年十月一日、共產軍第十三軍長兼浙江軍事委員會主席胡公冕、その弟胡一山、第十軍々事委員會委員李必江(共に上海大擾亂計畫を目論んでゐたといふ)は上海で逮捕せられ、間もなく同十五日には陳獨秀、彭述之等十人が捕縛せられるに至つた。(陳等は何れも十二月末起訴された)於是黨中央は、これ等逮捕黨員及び取消派連仲の口から黨の祕密が白狀されるかも知れないといふ懸念から、周恩來、瞿秋白、沈澤民、張聞天等四十餘人は、前後して上海を脫出し、十一月以後浦鹽に新中央を組織するに至つた。【註四】一方共產軍の方も、一九三二年後半は黨の受難が反映したのと、蔣介石の第四次討伐の相當の成功とに因り振はず、福建、廣東兩省への進出は失敗し、湖北、安徽、河南の原有地盤からは掃ひ除けられ、江西の本據を固守すると共に、僅かに四川、陝西方面に進出する位ひに過ぎなかつた。所が、十二月十二日を以て實行せられた露支國交の恢復は、黨及び共產軍にとり、渡りに船のそれであつた。爾來黨の活動は俄然色めき立つて來、黨內各級機關に對し左の如き革命新方略を通告した。【註五】

（一）軍事方面

（1）湖北、河北の紅軍は西北陝西、甘肅方面に向ひ進展し、逐次勢力の擴充を圖る。

（2）江西、湖南の紅軍は東南福建方面に向ひ進展し、沿海各省の占領を圖る。

（3）中央軍事委員會を福建省北部に移し、全力を以て全省の攻略を圖り、以て紅軍發達の根據地とす。

（4）軍事成功後中國臨時蘇維埃政府の對日宣戰の宣言を發表し、日本に向ひ挑戰し、日本の中國に於ける一切の勢力を驅逐し、日本軍が臺灣より進攻せば全勢力を擧げて應戰する。

（5）紅軍々長にして作戰に努力せざる者は免職し、中央軍事委員會より留露學生、或は久しく軍事工作に從事せる軍官を任命して、再び失敗を防止する。

（6）武器軍費を補充して大擧反攻を準備し、國民黨軍との持久戰を圖る。

（二）政治方面

（1）各省市政治工作者中、政治思想不明或は言行本黨の主張に違反する者には警告を發し、或は蘇聯に派遣して訓練し、又は免職或は黨籍を解除す。

（2）滿洲事變の機會に乘じ、青年學生及工人等を利用し、猛烈なる反日運動を惹起せしむ。

（3）日貨排斥運動の名義を以て、資本家に對して激烈なる示威を擧行し、日貨商人に限らず流血事件を勃發せしむ。

（4）各省市政治工作者には、多くの留露學生を派遣就任せしめ、或は之をして監視せしむ。

（5）某地が取消派黨員多數にして工作に努力せざる時は、經費の發給を停止し或は全員を免職す。

（6）黨員、團員を問はず、工作を擔任するものの違反者は黨籍を解除し、成績優秀なるものは表彰す。

かくて黨中央は黨勢の挽回に努力せんとしたけれども、國民政府の彈壓は各地に延び、殊に黨中央の所在地たる上海の如きに於ては、雌伏を餘儀なくせしめられたが、それでも一九三三年(民國二十二年)九月末には、マーレー卿一行を

迎へて第二回反戰反ファッシスト大會を開き、宋慶齡女史始め各地代表五十九名（大部分は勞働者、兵士）參集の上、主席マーレー卿から世界の一般狀況、極東に於ける帝國主義列强の侵略狀態、世界各地の反戰鬪爭狀況に關する報告、宋慶齡女史、支那ソヴエート區代表、滿洲義勇軍、十九路軍、紡績職工其他各代表の報告あり、議事に入り

一、世界戰爭反對
二、獨乙ファッショ化反對
三、白色强怖反對
四、第五次討伐反對（蔣のソヴエート區に對する討伐）
五、ソ聯邦に對する進擊反對

等を決議し、抗議書を可決し、『世界反帝國同盟極東分會組織大綱』、『中國民衆の友の會組織』を決定し、極東反帝國同盟執行委員を選出したのである。

降つて十一月末より福建に勃發したる人民革命政府運動に對しても相當活躍をなした。又これより先六月十七日黨中央は會議を開き、十二月十一日の廣東暴動記念日を期して、中蘇第二次全國代表大會を召集することを決議したが、國民政府の不斷の彈壓政策や討伐戰等の爲め、代表選擧運動を遂行する遑なく、豫定の十二月十一日は終に開會不能となり、越えて民國二十三年（一九三四年）一月二十二日を以て愈々首都瑞金に於て擧行せられるに至つた。大會は二十二日より二月七日迄續行され、新に左の政府幹部を選出した。【註六】

中央執行委員（百七十二人）

博古、陳韶玉、何克全、劉少奇、毛澤東、項英、吳亮平、瞿秋白、周月林、金維映、黃癸桂、謝玉厥、李富春、謝名仁、蕭世榜、林國宋、黃長嬌、蔡暢、鍾葆元、婁夢俠、徐達志、曾山、鐘昌桃、劉殷輝、鍾循仁、李單然、劉廣臣、謀先霖、朱德、周恩來、張績之、王稼穡、劉伯承、賀昌、何長工、董振堂、黃甦、聶洪鈞、萬永誠、尋淮州、滕代遠、彭德懷、楊宵昆、林彪、聶榮臻、劉伯堅、蔡鈴藩、王如痴、陳光、羅瑞鄉、周遠平、周昆、樂少華、陳毅、陳光時、孔荷寵、劉疇西、陳昌浩、張國燾、賀龍、陳阿金、袁國平、葉劍英、畢士梯、蕭克、朱瑞、徐彥剛、徐向前、張琴秋、關向應、夏曦、宋白民、王維周、張然和、王世泰、姜何三、古大存、朱琛、詹以錦、王鳳鳴、羅炳輝、洪水、蔡乾、余洪文、潘士忠、張冠一、鄭振芬、高峻亭、鄭位三、成仿吾、郭述用、張德三、祝維垣、朱兆祥、劉曉、傳才秀、劉明輝、劉國珠、羅邁、林伯渠、顧作林、邵式平、黃道、孔書安、鐘世斌、周義開、熊仙璧、胡海、范樂春、會洪易、巫子元、吳蘭甫、邱先英、張聞天、鄧發、潘漢年、張雲仙、張大和、黃宜章、張鼎丞、李見珍、吳必先、陳雲、陳潭秋、黃加高、張金樓、周少文、何振吾、陳壽昌、王震、彭仁昌、吳德峯、熊國柄、李維海、李先念、周光坤、黃光保、譚余保、劉士杰、曠彪、任弼時、王秀章、余洪遠、何長、曾廣瀾、李成甲、陳子謙、余漢朝、汪金祥、徐振農、吳玉章、楊其鑫、何叔衡、梁柏台、阮嘯仙、董必武、方志敬、黃萬生、關英、關春香、朱地元、鄧振詢、高自立、徐特立、韓顯超、趙雲、王賢選、羅梓銘、楊世珠、賴美玉、張純清、王盛榮、

候補執行委員（三十六人）

楊炳龍、謝振富、邱時鳳、鄧堯盛、劉毅、李美羣、鄒中才、徐順洹、徐明富、粟德貴、鄧子恢、朱榮生、賈元、馮雪峯、李一泯、李克農、張慶萍、羅榮垣、李賜凡、顏立記、君仁柱、劉燕玉、方敬和、謝炳煌、鐘義謙、黃富武

方振華、鄒敦厚、廖漢華、龍春山、華新湘、周桂香、曠朱權、鄧萍、康克清、董長勝。

主席團

毛澤東、項英、張國燾、張聞天、朱德、博古、周恩來、瞿秋白、劉少奇、陳雲、林伯渠、鄧振詢、朱地元、鄧發、方志敏、羅邁、周月林。

中央執行委員會主席　毛澤東、同副主席　項英、張國燾

政府委員

人民委員會主席　張聞天　外務人民委員會主席　王稼穡
軍事人民委員會主席　朱德　〃　鄧振詢
土地　〃　高自立　〃　林伯渠(林祖涵)
國民經濟　〃　吳亮平　〃　陳潭秋
司法　〃　梁柏台　〃　曾山
教育　〃　瞿秋白　〃　項英
革命軍事委員會主席　朱德　同　副主席　周恩來　王稼穡
中央審計院長　阮嘯仙　臨時法院主席　董必武

斯くの如く、中央政府の外形は整つた如く見ゆるけれども、一方國民政府のスパイ政策、テロ政策は、最近相當効果を收め、檢擧される者多數に上り、【註七】又轉向者續出する有樣で、黨にとつては全く受難時代の再來ともいふべき時なるに鑑み、七月中旬上海にて中央政治局緊急會議を開催し、黨中央部は、此の原因を組織上の缺點に歸し、今や組織强化の必要を痛感し、フアツシスト細胞の疑ある者、或は右傾的乃至日和見主義的傾向のある省委、區委、支部黨員は全部之を一掃すべく努めつゝあると共に、一方國民政府の白色テロ團たる藍衣社の前衛隊たる劇共同志會に對抗すべく、ソヴエート中央政府の政治保衛局(ゲ・ペ・ウ)から特派された特務幹部によつて赤色テロ團を組織し、裏切者の暗殺、フアツシスト陣營の潰滅を企圖せんとしてゐる模樣である。又前記の中央緊急會議には、一九二八年七月の黨第六回大會後、再三延期せられてゐた第七回大會開會の準備工作が論議された趣である。

かくして一九二七年(民國十六年)八月以降甦生時期に入つた黨は、その間一進一退の歩を續けつゝ、黨幹部の甦生の努力も未だ成らず、支那今日のフアツショ化の情勢を迎へて、其の前途は益々多難、支那支配のヘゲモニーが共產黨、國民黨の何れに握られるか、支那の前途は愈〻益〻注目を要すべきものとなつて來た。

註一　海陸豐地方は、支那最初のソヴエートであるといふ點で有名なばかりでなく、支那農民運動の發祥地としても亦有名な土地である。該ソヴエートの指導者は彼の有名な彭湃である。彼は海豐縣溪東社の人、早大經濟科の出身である。一九二八年二月末該ソヴエート政府が顚覆するや、上海に逃れ、黨中央農民部長となつてゐたが、一九二九年同地佛租界で就縛銃殺に處せられた。

註二　濱田峰太郎著『轉換期支那の全貌』二五二頁參照。

註三　上海日氏『報告』二九九號(一九三〇・一二・二六)及び『改造』(一九三一・七)による。

註四　一旦浦鹽に移つた黨中央は、露支復交と共に、再び上海に歸り、總書記陳紹玉、組織部長朱森、宣傳部長楊尙昆、軍事部長聶雲岑、職工部長謝康、政治局委員秦邦憲、張聞天、趙容、廖程雲、王雲程、青年團總書記陸定一、副書記張際明、紅旗日報主任張聞天、贛閩政治局長周恩來、中華總工會委員長劉少奇の顚覆れを以て新陣容を整へ、又モスクワに在つてコミンテルンから

新訓練を受けつゝあつた李立三も復交と同時に歸國し、江西中央區に入つたとの報が傳へられたが、虛報であつたやうである。

註五　陸軍省調査班發行『支那共產軍の近況に就て』による。

註六　『國際評論』第三卷第六號による。

註七　民國二十二年末から二十三年八月上旬迄に檢擧された黨員數は、上海一地方丈けでも二千數百名に上つてゐる。（上海日氏情報六一〇號による。）

第三章　近代に於ける支那ブルジョア民主主義革命の特質

中國共產黨の見解に依れば、現段階に於ける支那革命の特質は、中國國民黨の見解とは異り、單純にブルジョア民主主義革命（農業革命を基礎として、封建的政治支配の打倒を目標とする）ではなく、主たる本質は反帝國主義ブルジョア民主主義革命である。そして、それは徹底的な土地革命をその社會的內容として居り、確實に社會主義革命に成長する前途をもつものであるとなし、中國共產黨の理論家瞿秋白は、次の如く論じてゐる。

『支那革命は反帝國主義革命である。』――此の意味からして、當然二つの結論が得られる。第一には、支那の民族ブルジョア（買辦、地主出身の銀行家、工業家）經濟と帝國主義の經濟侵略との鬪爭である。そこで支那のブルジョアジー（國民黨及び其の代辯者）は革命の初期に於ては革命を支持してゐたのみならず、これに參加した。**【註一】**支那革命のブルジョア的性質も亦この對外的經濟鬪爭の中に表現せられてゐる。第二に支那の反帝國主義鬪爭と世界のプロレタリアートの反帝國主義運動は、一つの世界革命の陣營の中にあり、又それはコミンテルンの指導の下にある。支那革命發展の前途は、成功した場合には、それは必然に非資本主義的であり、社會主義革命への成長に趨向するものである。

更に支那特有の豪紳、軍閥の封建制度は、帝國主義が支那を搾取する爲めの主要な基礎である。帝國主義の支那侵略は、支那の國內に工場を設け、網の目のやうに購入の爲めの買辦制度を張り廻はし、又多量の工業製品たる日用品を輸

入する、……かゝる經濟侵略は、支那の經濟を沒落させ、發展を不可能にするものである。支那の民族ブルジョアジーは、——從つて南京政府——は、反封建的勢力たり得ない。それは多分に封建的豪紳、地主經濟と密接な關係をもつて居るからである。帝國主義は資本主義的貿易をもつて支那の農村に侵入したが、かゝる現象は單に支那の豪紳、地主をより商業化し、その搾取を一層加重せしめた丈けであり、そして帝國主義が農民の膏血を搾る爲めの仲介物とすると同時に軍閥支配の支柱ともするのである。（トロツキー反對派は、支那には單に商業ブルジョアジーの農村侵入があるのみで、封建的地主制度は決してない、と云つて居るが、これは完全に誤謬で、彼等の見る所は全く事實と相反してゐる。即ち支那では決して單純に商業ブルジョアジーだけが農村に侵入し、土地を購入し、極度の搾取をなして居るのではなく、豪紳、地主階級は帝國主義的商業の侵入と經濟的壓迫の下で、半資本主義化することが出來、又中世紀的收奪制度をそのまゝに存續せざるを得ないのみならず、日一日とかゝる收奪を加重せざるを得ない過程にあるのだ）それ故に、支那革命の對象とする目標は、單に政治の上で軍閥（封建的秩序の維持者にして、帝國主義の手先）及び國民黨を覆すだけでなく、是非とも徹底的に土地革命を遂行しなければならず、又徹底的に封建制度の一切の殘存物、即ち、地方の豪紳の支配、地主階級の土地私有等々を一掃しなければならないのである。

『支那革命の中心は土地革命である。——此の事から我々は又二つの結論を導き得る。即ち、第一には、支那革命が土地革命への進展を開始する時期に至つて、始めてそれを大衆的民主主義革命の展開であると量定することが出來る、と云ふことである。徹底的な土地革命とは、豪紳、地主階級及び軍閥の支配を打ちのめし、凡有る封建的殘存物を一掃し、そうして又更に一歩を進めて、帝國主義の對支那支配の支柱を掃滅する（關稅自主の獲得や不平等條約の撤廢等より更に一歩を進めた）ことである。かゝる徹底的な土地革命は、直ちに土地國有へ進展させられる。そしてその社會的內容は最も徹底したブルジョア民主主義革命であつて、大商人、大資本家のブルジョア革命ではなく、農民のブルジョア革命である。第二には、支那の民族ブルジョアジーと豪紳、地主階級とが極めて密接な關係にあり、同時に、支那のプロレタリアートも、國際プロレタリアートの指導の下に、獨自の大衆鬪爭の發展の爲めに奪鬪するものだ、と云ふことである。此れが爲めに、農民の土地革命運動が、プロレタリアートの指導の下に勃發する時に當つて、豪紳、地主階級が直ちに反動化するばかりでなく、民族ブルジョアジーも亦革命を裏切らざるを得なくなる。只支那プロレタリアートのみが、農民の土地革命を指導し得る。

所が、ブルジョアジーの、甚しきは小ブルジョアジーの革命家までが、皆、專ら平和な方法で土地關係を改良することに依つて土地革命を避け得ると幻想してゐる。だが、支那プロレタリアートは、是非とも、革命のヘゲモニーを獲得し、農民大衆の下からの土地革命を指導して、徹底的にブルジョア民主主義革命を完成しなければならない。その時に至つて、支那の民族ブルジョアジーは、單に革命に於ける一つの動力たる事をやめるばかりでなく、反革命的勢力に變化するであらう。再び云ふ、支那の革命は徹底的な土地革命であり、プロレタリアートの指導の下で、より一層確實に生長し、社會主義革命に生長して行く趨向を持つものである。

支那革命の性質は、その對象から云へば、勿論ブルジョア民主主義的である。だがその動力から云へば、却つてプロレタリアート的である。支那革命の社會的內容は土地革命であり、封建的殘存物を徹底的に一掃するブルジョア民主主義革命であるとは云へ、それは斷じてブルジョアジーが革命のヘゲモニーを握るべきだといふことではない。丁度その

反對に支那革命は正にそれ故にこそ、プロレタリアートに依つてヘゲモニーを獲得されなければならないのである。支那のブルジョアジーは農民の土地革命を指導し得ないばかりでなく、反帝國主義革命をも決して徹底的に遂行し得ない。彼等は初期の反帝國主義革命に參加することは出來た。だが彼等が參加した目的は、實は、帝國主義及び軍閥が戰爭を引起し、廣大なる勞農大衆の革命運動を惹起したことを恨んだからである。從つて、彼等は革命に參加して其のヘゲモニーを奪取することに依つて、革命を消滅させやうとしたのである。

此の性質は、正に、一九二五年から一九二七年までの支那革命に於て【註二】、急激に進展した革命の各段階の中に明白に現はれて居る。支那革命の段階は、とりも直さずプロレタリアートとブルジョアジーのヘゲモニー爭奪の過程である。」(以上主として瞿秋白著『中國革命と共產黨』による)。

上述の如く中國共產黨の見たる支那革命の特殊性を形成する根本的特質は、異常に複雜にして且つ强靱性を帶びてゐるが故に、必然的に中國共產黨及びコミンテルンの前に、戰術問題の複雜性と特性を要求する事は當然なりと言はねばならぬ。

註一　民國十三年(一九二四年)、國民黨の聯露容共時代より民國十六年(一九二七年)寧漢分裂(國共分離)までの時期を指す。

註二　註一參照

第四章　中國共產黨の實體

第一節　中國共產黨の組織

中國共產黨は、民國二十年(一九三一年)、ヌーラン夫妻が逮捕された頃より既に上海に設置せられてゐる『東方局』を介してモスクワに在るコミンテルン東方秘書局の支配下に在るコミンテルンの一支部であつて、コミンテルンより派遣せられた六人の代表者に依つて其の一切の指導を受けてゐる。

中國共產黨黨章に規定する所に依れば、中國共產黨の最高機關は、全國代表大會であつて、每年一回之を開き、(黨章三十五條)左記事項を行ふのである。

一、中央委員會及び中央審査委員會の報告を接受し審査す
二、黨の黨綱問題を決定す
三、一切の政略及び組織等の問題の決議を決定す
四、中央委員會、中央審査委員會等を選擧す

而して全國代表大會の下に、中央委員會を置き、その下に省、縣、市、區(城、鄉)の各級黨部委員會があり、更に區の下に支、支の下は組に分れてゐる。外に監督機關として審査委員會があり、支部を以て黨の基本組織としてゐるが、

之を詳述すれば左の如くである。

支部幹事會　工場、鑛山、作業場、商店、街道、農村、軍隊等に於て、三人以上の黨員が有れば支部を設立し得べく黨員數の多寡に依つて三人或は五人の幹事會を組織し、支部書記一名を選任し、日常の事務を處理せしむるが、此の工作は全然秘密とし、一切の會議には黨員以外の者を參加せしめず、決議案も外部には發表しない。（十六條——十九條參照）

黨部委員會　省、縣、市、區黨部委員會は、省、縣、市、城區或は鄉區代表大會から選出し、委員の數には規定はないが、多きは三十八人、少いのは五人の委員會も有り、縣市代表大會は、三ケ月に一度招集され、省代表大會は六ケ月に一度招集される。縣委員會が有る市には、別に市委員會を組織せず、その工作は縣委員會が直接擔當し、又省委員會の所在地に縣委員會が組織されてゐる場合は、該縣委員會の工作は所屬各鄉に局限されてゐる。各鄉黨部委員會の日常事務は、常務委員會が處理し、その下に組織部、宣傳煽動部、職工運動委員會、婦女運動委員會、農民運動委員會を設け、夫々主任一人を置いてゐるが、主任は黨部委員或は候補委員が兼任してゐる。（二十條——三十一條參照）

中央委員　中央委員會は、全國代表大會で選出し、毎年一回改選し、委員の數も右大會で決定する。中央委員會は、中國共產黨の實質上の最高機關であつて、（組織上では最高機關は全國代表大會であるが、常置されてゐるものではないから、次の代表大會に至る迄の期間、中央委員會が實際上の最高機關となる）黨を代表し、各級黨部委員會を指揮し、行政區域及び各地の基本組織を區劃する外、一切の政治工作を指導する責任を負ひ、その內部組織は、組織部、宣傳煽動部、職工運動委員會、農民運動委員會、婦女運動委員會等の各部、各委員會の外に委員を選出して、政治局を組織し、黨の政治工作を決定し、並にソヴエート區域及び共產軍の政治上の最高指導機關たらしめ、別に常務委員

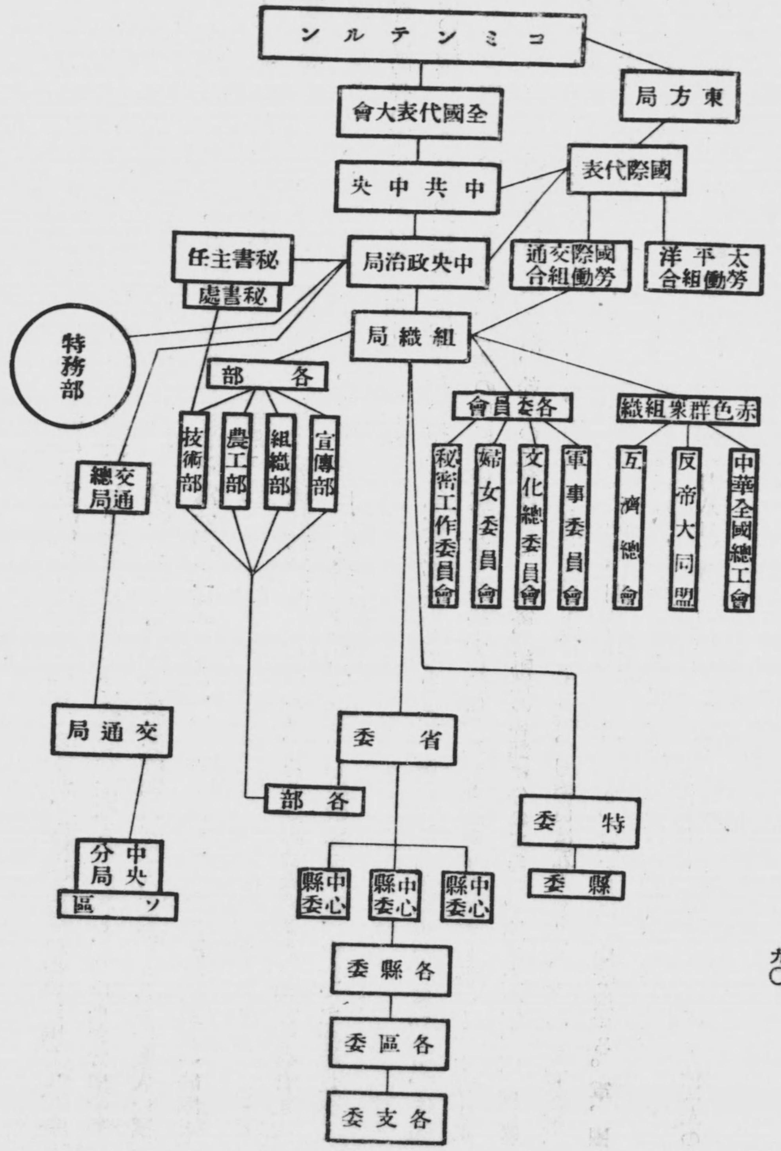
會を組織し日常工作を進行せしめてゐる。各部の主任は中央委員が兼任してゐるが、四圍の情勢の必要に應じて、各省に依り執行局、或は分局を設置し得べく、特派員を各地黨部に派遣して黨の財政收入を分配し、又中央會計處の如き機關も設置することが出來る。併しその組織が不健全なる爲め、此種の重要機關は支那人の通弊として少數人の獨占する所となるを免れず、その爲め從來往々にして黨分裂の一原因となつたこともあつて、此點黨組織上の一缺點と評すべきであらう。（三十八條——四十二條參照）

審查委員會　各級黨部委員會の監督機關としては各級黨部審查委員會があり、その委員は黨部委員と共に各級代表大會で選出されるが、人數は明らかならず、その任期は黨部委員と同樣である。各級黨部の財政、會計、工作等は悉く該委員會監督の下に進められる。（四十三條參照）

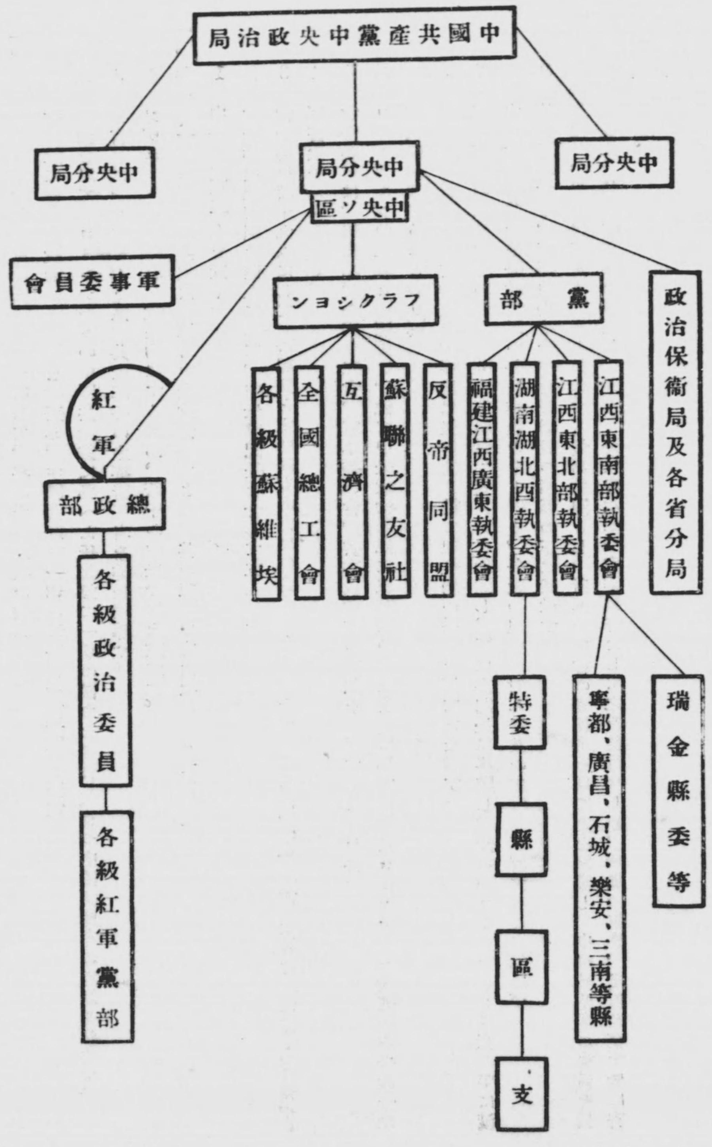
軍中の黨務　共產軍中の黨務及び政治工作の指導は總政治部に屬してゐるが、別に獨立的な組織の系統があり、その基本組織は連（中隊）支部であるが、一連の中に共產黨員が三名以上あれば幹事會を組織することを得べく、支部は正幹事三名、候補幹事二名を選出するが、幹事の職務は書記、宣傳、組織の各部に分れてゐる。連以上の軍、師、團（聯隊）にも黨務委員會が設けられ、各軍、師、團代表大會で委員を選出するが、團委員は五人ありて、書記、教育指揮、俱樂部工作人、群集工作管理人、青年團工作管理人に分れ、別に候補委員二人あり、三ケ月に一度改選する。軍、團の黨部委員は九人、候補委員三人、師黨部委員は五人、候補委員三人あり、その任期は何れも一年である。

今中國共產黨第四次中央全體會議（民國二十年一月八日）後の組織概要並に中央局現在の責任者名を表述すれば左の如くである。

中國共產黨組織系統表其一



中國共產黨組織系統表其二



【註】一、中央政治局は、共產黨最高指導機關にして、其の任務は次の如し。
1　世界竝に支那の政治經濟情況を考察し、中國共產黨一切の策略と行動方針を決定す。
2　責任を以て、コミンテルンの中國共產黨に與へた任務竝に一切の訓令を執行し、且つ中國共產黨の現狀を報告す。
3　各省委員、ソヴエート區、共產軍等の主要責任者を委任指導す。
4　ソヴエート區の指導を效果的にするため、若干の中央分局を設立す。
二、共產黨一切の問題の決定は、總て中央政治局による。其の組織內容は次の通りである。
1　中央書記長一人を置く。
2　常任委員主席團は四人にして、中央書記長を合して五人とす。
3　常任委員は十九人にして、書記長と主席團も其內に包含す。各分局の成立後には、中央政治局の責任者は九人に減ず。
4　秘書主任一人を置く。
5　常任委員は、組織局、全國總工會、軍事委員會、省委員會等の書記を兼任することを得。
6　コミンテルンの代表との應接は、總て中央政治局竝に組織局の責任者にて爲す。（尙ほコミンテルン代表の中央政治局會議に參加することあり）。
7　各部各委員及び各省委員の指導竝に報告は、總て組織局の系統を經て之を爲す。
8　組織問題の報告は、組織部より直接組織局責任者に通達し、更に書記長に移牒し、然る後コミンテルン代表の手に渡す。此故に其身中央政治局の普通委員なりと雖も、各級の組織に對しては其の內容を了解すること能はず。
9　特務委員會は、直接中央政治局常任委員の指導の下に活動す。
三、組織局は、中央の決定せる議案を執行する最高機關とし、所屬各部會の責任者を以て之を組織し、中央政治局の決議を接受したる後、具體的方案を作成し、各々各委員會乃至各省委員會をして之を執行せしめ、所屬の組織、黨員及び大衆に普及せしむ。

中國共產黨中央局責任者氏名表

名稱	責任者
政治局	秦邦憲、李竹生、盛忠亮、趙容、廖程雲、楊天生
書記局	秦邦憲（書記長）、李竹生、盛忠亮、趙容、廖程雲
組織局	李竹生
宣傳部	李素慧
軍事委員會	廖程雲
婦人部	杜作强
特務隊	趙容

第二節　中國共產黨の外廓運動機關

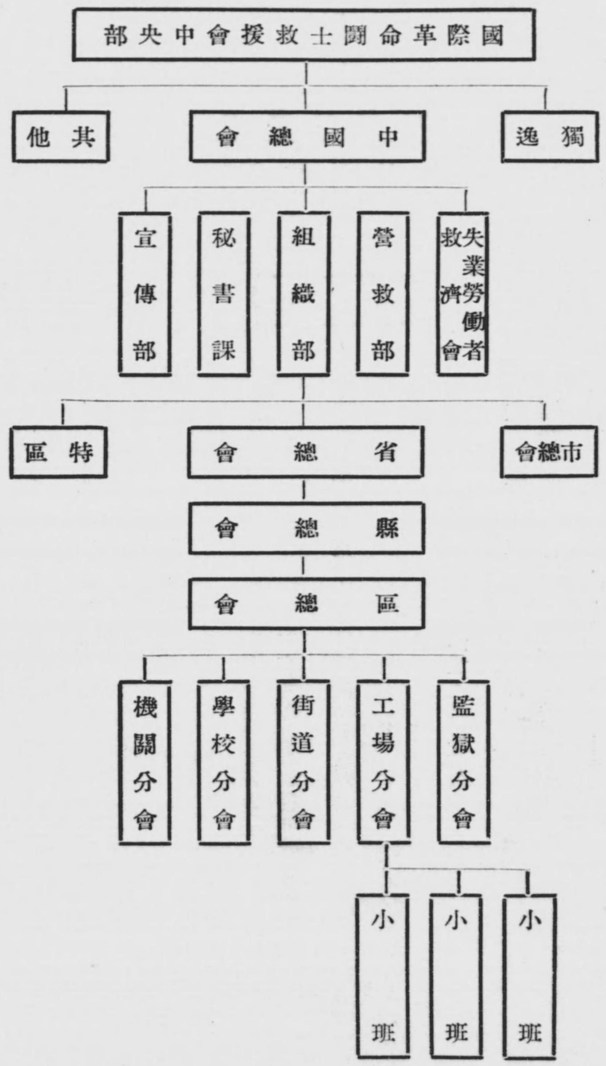
コミンテルンは其の活動上の補助機關として、國際青年共產同盟（略稱キム）、國際共產少年團（ビオニール）、國際革命鬪士救援協會（略稱モップル）、赤色勞働組合インターナショナル（略稱プロフインテルン）等を有してゐるが、中國共產黨も亦その活動上の外廓機關として、中國共產主義青年團（キム支那支部）、革命互濟會（モップル支那支部）、中華全國總工會（プロフインテルン支那支部）及び反帝大同盟等を有してゐる。

中國共產主義青年團　民國九年（一九二〇年）夏、支那に初めて共產主義青年團（略稱C・Y）の組織が出來た。當時は名稱を「社會主義青年團」（略稱S・Y）と云ひ、上海に於て共產黨が組織された當時、これと聯絡して、共產黨指導の下に、社會主義思想を有する青年學徒を以て組織されたものである。民國十四年（一九二五年）二月の第三回大會で正式に『中國共產主義青年團』と改稱し、爾來、此の團體が全國青年學徒の中心となり、反日運動、反キリスト教運動、香港海員ストライキ、五卅事件等を指導し、學生及び知識階級の間に勢力を張り、相當の活動を續けて來た。

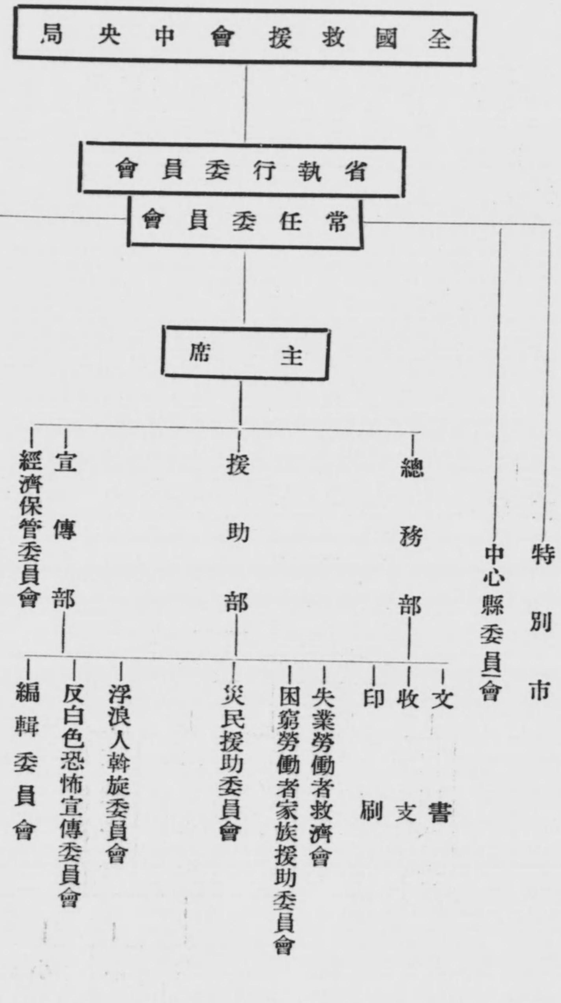
同團の規定に依れば、『C・Yとは共產主義を信仰し、政治的意味を有する青年無產階級の團體であり、青年無產階級の先鋒隊である。又C・Yは、共產黨指導の下に青年勞働大衆を領導し、經濟鬪爭をなさしめ、文化宣傳と共に共產主義敎育を施し、政治宣傳と活動とを爲すべきである』。とある。

革命互濟會　民國十四年（一九二五年）九月上海に於て組織され、最初は『中國濟難會』と稱してゐた。一時會員八十

（A）救援會組織系統表



（B）ソ區內救援會組織系統表

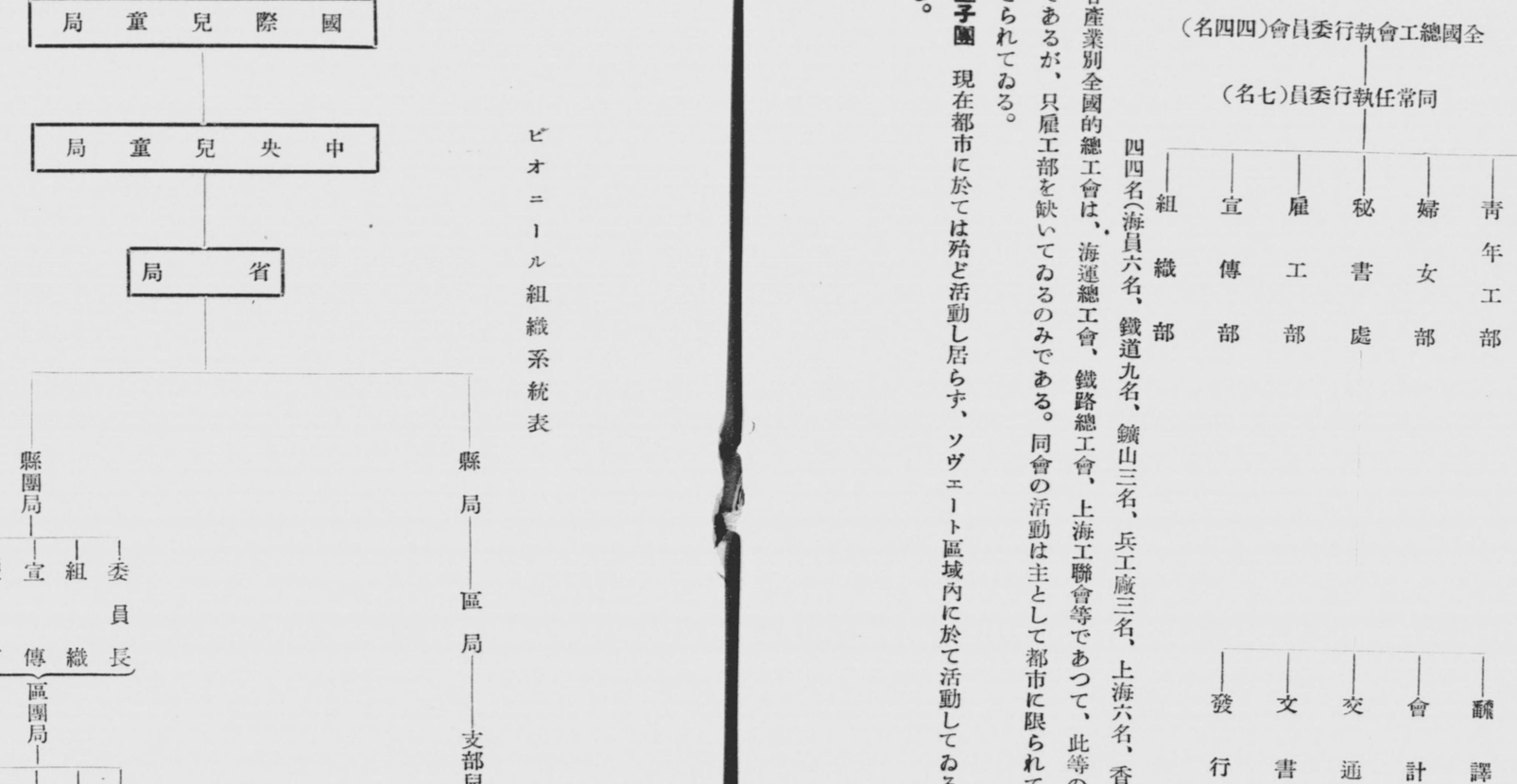


一萬餘名の加入者を見、非常なる勢力であつたが、國共分離後漸次失勢し餘り振はないので、民國十八年十二月上海に於て全國代表大會を開き、會勢擴張案を討議した。その結果濟難會の組織並に活動方針を改變することゝなり、新に『中國革命互濟會』と改稱し、コミンテルン及びモツプル指導の下に革命運動者並に革命同情者の大同團結を組織して革命大衆に積極的援助を與ふると共に、反革命討滅に全力を注ぐことゝし、中央部を上海に置き、各ソヴエート區並に各都市に支部を置き今日に至つてゐる。

革命互濟會の組織系統は上表の如くである。

中華全國總工會　民國九年（一九二〇年）北京大學の共產系分子を中心とする學生により、中國勞働書記部なるものが組織せられた。同部は中國共產黨と中國社會主義青年團（後の共產主義青年團）と提携して勞働運動を開始し、爾來、交通、鑛山、工場等に漸次勞働組合の組織に努力すると共に、此等組合の全國的統一の爲め、民國十一年五月一日より五日間廣東に於て第一回勞働大會を開き、民國十四年五月『中華全國總工會』と改稱し、コミンテルンの命を受け、（上海に在る太平洋勞働會議書記局にはプロフインテルンの代表が駐在してゐる）中國共產黨の別働隊として支那に於ける左翼勞働運動を指導してゐる。彼の民國十一年一月——三月の香港海員罷業、同十二年二月の京漢鐵道罷業（二・七事件）、同十四年四月の青島日本人紡績罷業、同年五月三十日の上海五卅事件、同六月の香漢、廣東對英ボイコット（沙基事件）等に於ける同工會の活躍の如きは實に目覺しいもので、支那勞働運動史上特筆すべきものである。現在全國會員總數は約二十萬（中國共產黨の勢力——黨員數の項參照）と稱されてゐる。

全國總工會の組織系統は左の如くである。（一九二九年十一月第五次全國勞働大會決定のもの）

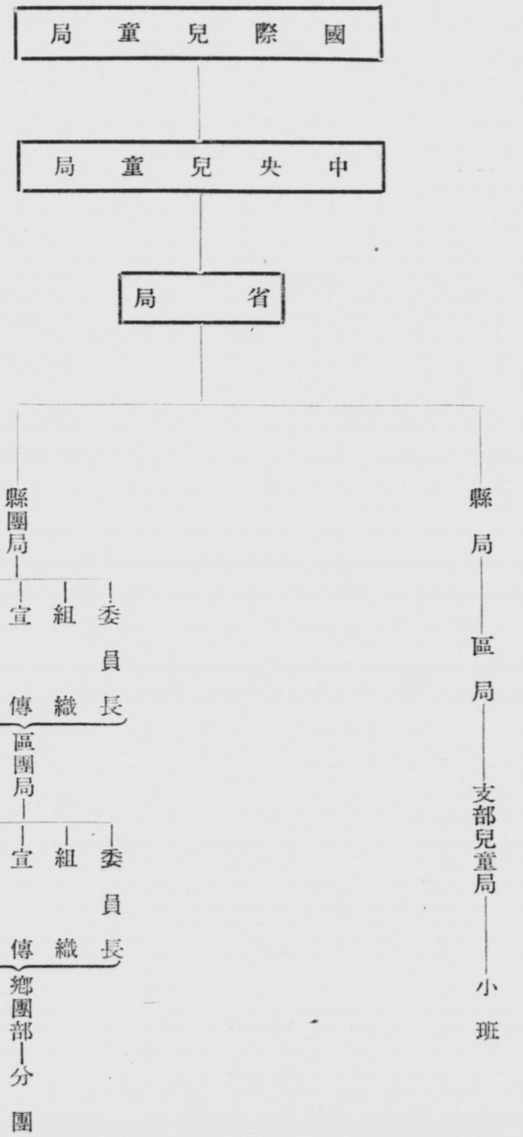


四四名（海員六名、鐵道九名、鑛山三名、兵工廠三名、上海六名、香港二名、其他十三名）

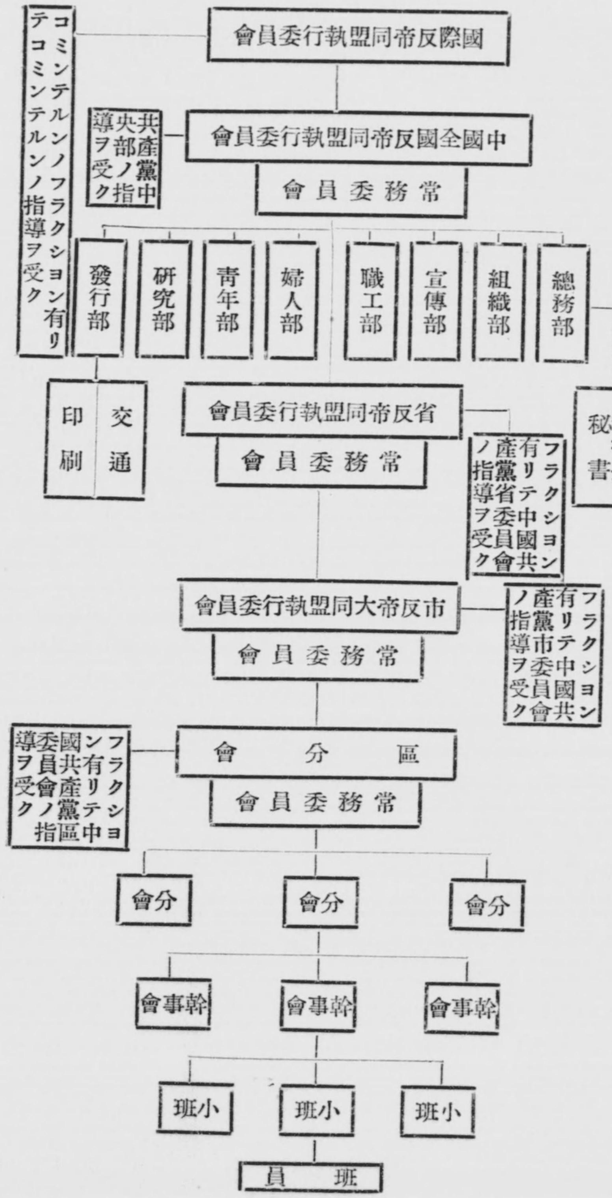
各産業別全國的總工會は、上海工聯會等であつて、此等の組織は全國總工會の組織と略同一であるが、只雇工部を缺いてゐるのみである。同會の活動は主として都市に限られてゐるが、ソヴエート區内にも組織せられてゐる。

童子團　現在都市に於ては殆ど活動し居らず、ソヴエート區域内に於て活動してゐるのみである。その組織表は左の如し。

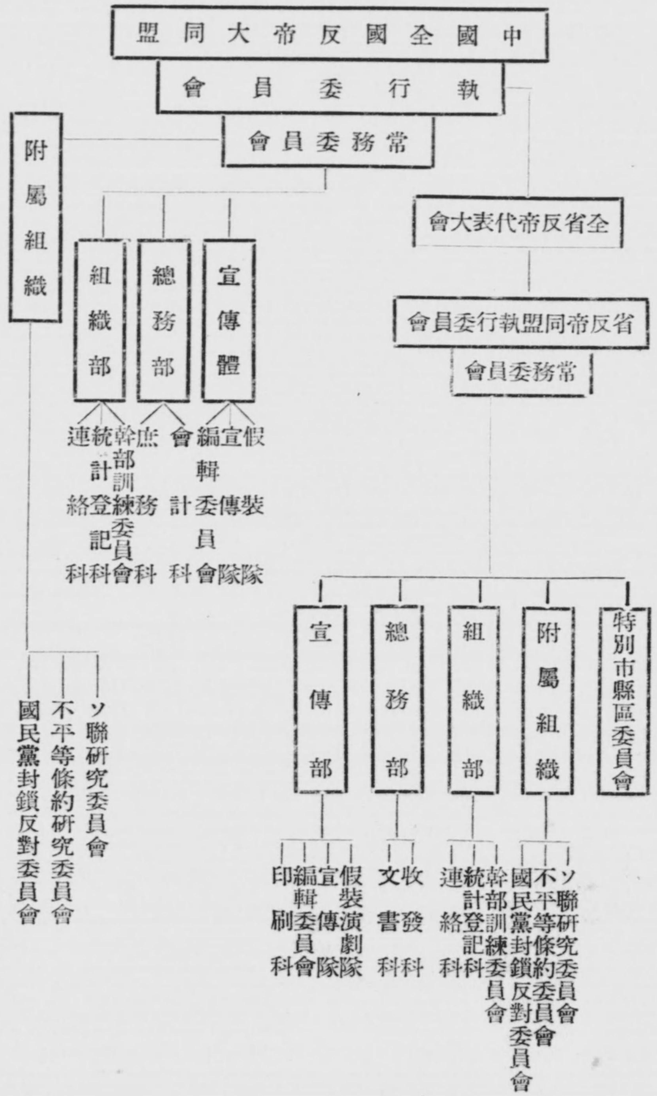
ピオニール組織系統表



反帝同盟の組織系統表（A）



反帝同盟組織系統表（B）



116466

反帝大同盟　一九二七年に組織せられた帝國主義反對及び民族獨立期成聯盟は、その創立當時は民族の獨立開放を目的とする自由主義的國際團體であつたが、其後漸次共產系となり、事實上コミンテルンの指導を仰ぐことゝなつたが、同聯盟の成立を機會として、支那に於ても、東方被壓迫民族反帝大同盟、上海反帝大同盟等種々なる團體が組織せられた、併しその間に何等の統一がなかつたので、中國共產黨は民國十九年（一九三〇年）四月、上海各界反帝大同盟及び青年反帝大同盟の二團體を解散して、上海反帝大同盟を組織し、次いで東方被壓迫民族反帝大同盟も之れに合併せしめ、爾今該同盟を主體として、帝國主義反對、弱小民族の團結、世界戰爭反對運動の機關と爲さしむることゝなつた。爾來、北平、天津、武漢、廣東等にも皆反帝同盟が組織せられ、彼の國際聯盟調査團が來た時の如きは、各地に於て示威を擧行し、調査團反對の宣言、一・二八上海戰爭反對、九・一八滿洲事變反對等の傳單を散布し、又昨民國二十二年九月には、上海に於て、マレー卿を初め世界の代表者參集の上、極東反戰、反ファッシスト大會を開き、帝國主義戰爭反對、帝國主義ファッシスト恐怖反對等の宣言、決議をなした。該同盟の組織系統は右の如くである。

右の外、中國共產黨中央文化委員會の指導下に在つて、多くの文壇、劇壇、評論界の一流を網羅して其の組織を誇つてゐた大文化機關、中國左翼作家聯盟、中國社會科學家聯盟、中國左翼劇家聯盟、及び青年世界語聯盟、ソ聯の友社等は、國民黨の壓迫と、國民政府當局の極端な彈壓に抗しかねて、組織細胞の中から轉向者を續出して、內部的崩壞作用を起し、今や劇聯盟を除く他の聯盟は殆ど潰滅してゐる有樣である。

尙ほ此等の外に、對外事件發生する每に、例へば、國民禦侮自救會或は中華民國武裝自衞委員會等（何れも抗日運動團體）の如き排外運動團體が、隨時共產黨の指導下に設けられ、反帝國主義的民族解放運動を煽動してゐる。

第三節　中國共產黨の勢力

黨員數

ソ聯邦當局は全世界の共產黨中、支那の共產黨はソヴェート聯邦（二百萬人）、ドイツ共產黨（十二萬四千人）【註一】に次ぐ有力なる團體と見做してゐる。そこでコミンテルンでも中國共產黨を重視し、代表者を特派してゐるのみならず、常に重要なる指令を中國共產黨幹部に向つて發し、或は相當多額の黨資金を供給する等鋭意努力してゐる譯である。然らば一體どれ程の黨員が有るかといふと、一九二九年六月二十七日のイズヴェスチヤ紙の報ずる所に依ると、

『民國十三年（一九二四年）一月國共合作成立當時は、黨員僅かに四十名內外を有するに過ぎなかつたが、共產黨が國民黨の假面を被つて殆と公然その宣傳に從事し得るに至つた結果、黨員は遽かに增加し、民國十四年（一九二五年）五卅事件の頃には約九百人に增加し、【註二】五卅事件の結果共產黨の戰線擴大し、同年末には一萬人を數ふるに至り、翌民國十五年（一九二六年）七月國民革命軍の北伐開始と共に、共產黨は革命軍の占領地域に於て黨員の獲得に全力を注いだ結果、民國十六年五月漢口にて第五回全國大會（五全大會）が開催された時には、約十萬（內共產主義青年團員四萬、勞働者六五——七五%）となり、その翌年には國民黨の反共政策に依る淸黨運動の爲め、約二萬の犧牲者を出し、七萬五千乃至八萬に減少したが、民國十八年（一七二九年）春現在に於ては、十三萬三千六百五十五名となつた。』と報じてゐる。併し此數は、恐らく共產青年團員及び共產軍並にソヴェート區域內の黨員も加算したるものであるべく、正規の黨員數としては聊か過大に失してゐるやうに思はれる。

其後の累年の統計に就ては、據る可き文獻も無いが、黨中央は、每年一二八、二七、四一二、五一、五卅、八一、九

一八、十一月七日の十月革命、十二月十一日の廣東暴動等の如き國耻或は共產黨の記念日を利用しては、黨員の徵收獲得運動に懸命の努力を拂つて來たのと、ソヴエート區域の擴大とに因つて、黨員の延數からすれば、增加して來てゐることは事實であらう。併し、一方國民政府の藍衣社を手先とする絕えざる彈壓政策、スパイ政策乃至は轉向政策等によつて、ソヴエート區域外に於ては幾多の黨員を失ひ、差引きすれば、黨員の現在數は增加してゐる所か後表に示すが如く民國十八年頃に比して非常なる減少を來してゐる。國民政府の調査に依れば、民國十九年十一月中に、國民政府各機關に逮捕された共產黨員は、實に四萬三千百九十一名に上つた【註三】と報じてゐる程で、僅か一ケ月の間にそれ丈けの黨員が彈壓の犧牲になつてゐる位であるから、數ケ年を通じて計算すれば、逮捕せられた者、轉向した者、其他を合して五、六萬近くには達すると見て大差なからう。

事實左の統計が示す如く、僅か二年餘の間に、差引約一萬近くの黨員が減少してゐるのを見ても、國民政府の彈壓、テロ振りが如何に激甚を極めたかが判明するであらう。今四中全會（民國二十年——一九三一年——一月）後、ソヴエート區域外に於ける黨員、團員の推移情勢を各省別（滿洲を含む）に示せば左の通りである。（滿鐵資料課の資料による）

省名	黨員數		團員數		備考
	一九三一年三月	一九三三年七月	一九三一年三月	一九三三年七月	
江蘇	六、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇〇〇	八〇〇	
河北	三、〇〇〇	二、五〇〇	二、〇〇〇	一、五〇〇	
福建	二、〇〇〇	五〇〇	一、〇〇〇	三〇〇	
滿洲	二、〇〇〇	三、〇〇〇	一、五〇〇	二、〇〇〇	
山東	一、五〇〇	五〇〇	三〇〇	二〇〇	
廣東・廣西	一、五〇〇	二〇〇	五〇〇	三〇〇	
河南	八〇〇	二〇〇	一〇〇	五〇〇	
陝西	五〇〇	八〇〇	七〇〇	八〇〇	
安徽	二〇〇	五〇	三〇	三〇	
浙江	二五〇	三〇	三〇	三〇	
山西	五〇	五〇	—	—	
湖南	一〇〇	—	五〇	—	
湖北	一五〇	—	七〇	—	
四川	五〇〇	六〇〇	三〇〇	五〇〇	
總計	一八、五五〇	九、九三〇	九、五八〇	六、五一〇	

上述せる如く、國民政府統治下（ソヴエート區域外）に於ては、官憲の彈壓が加重して來る爲めに、最近に於ては、黨員は漸次ソヴエート區域内に潛入しつゝある。卽ち滿鐵資料課の資料に依れば、四中全會後に於けるソ區内黨員、團員工會會員の數は左表の如く、均しく增加を示して居つて、前記非ソ區内の減少は、ソ區内の增加となつて現はれてゐるのであつて注目すべき點である。

これに依つて見れば、ソ區内、非ソ區内を合し今や中國共產黨の黨員總數は滿洲のそれも含めて、約十一萬に上つて居つて、これは黨中央の計算で十二萬以上【註四】と稱してゐるのと大體一致してゐる。

地區	類別	時日	一九三一年三月	一九三三年七月
ソ區	黨員		五〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
	團員		四〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇
	工會會員		一〇〇、〇〇〇	一六〇、〇〇〇
非ソ區	黨員		一八、五五〇	九、九三〇
	團員		九、五八〇	六、五一〇
	工會會員		五〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇
全國	黨員		六八、五五〇	一〇九、九三〇
	團員		四九、五八〇	九六、五一〇
	工會會員		一五〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇

次に中國共產黨員及び團員を階級別に調べて見るに、共產黨側の資料に依れば【註五】

『民國十五年（一九二六年）七月頃の黨員數を基礎として調査した所に依れば、全國的の統計では、全黨員の中、勞働者と農民が七一％を占め、知識階級が二二％であるが、產業區域に於ては、勞働者のパーセンテーヂは更に多く、例へば上海の如きは、勞働者が全體の八〇％を占め、知識階級は僅かに一三％六に過ぎない狀態である。』

と報じてゐるが、國民政府側の全國的の統計資料では【註六】次表の如くになつてゐる。

黨團	成分	勞働者	農民	兵士	知識分子
黨員		五・八％	八七％	三％	四・二％
團員		五％	七〇％	—	二五％

上記の中、共產黨側の資料では、全國的に見た勞働者と農民の各パーセンテーヂは不明であるが、前にも述べた如く、國民政府の彈壓に因つて都市に於ける共產黨の組織が薄弱であることと、ソヴエート區域內の現狀よりして、勞働者よりも農民が大多數を占めてゐることは、パーセンテーヂが眞に近きか否かは別として、國民政府側の資料は大體信賴して可からう。

之を要するに中國共產黨は、その構成分子から見ても判る如く、未だ企業內に食ひ込むことが出來ず、勞働大衆より離脫して、所謂「企業進入」「產業支部獲得」等の組織原則は實行し得ず、黨中央でさへ、

『眞の意味の產業勞働者は全國中でも依然二千人に過ぎず、ソ區內に於ては農民が絕對多數を占めてゐる。』【註七】

と自白してゐる程であるから、支那に於ける共產主義運動が、將來プロレタリアート獨裁政權樹立を達成し得るか否かは、都市に於けるプロレタリアート運動の勝敗こそ最後の鍵を握るものであらう。

註一　滿鐵『ソヴエート聯邦年鑑』一九三四年版七一頁

註二　モスクワ「國際農業問題研究所」發行、アグラール・プロブレーメ、第一卷第一號所載、ベ・フライエルの『支那に於ける農民

運動の最新段階』なる論文中には『上海五卅事件當時、中國共産黨は、三、四千の黨員を有してゐた』と述べてゐる。

註三　『東洋』一九三一年六月號滿川氏の論文參照。

註四　一九三一年三月五日共産黨中央の黨組織發展に關する決議案による。

註五　『中國青年』第一二七期所載、則連の『中國共産黨の階級的基礎』による。

註六　國民政府が舊共産黨重要責任者の談話及び幾多の資料を基礎として作製せるもの。

註七　註四の決議案による。

第四節　コミンテルンと中國共産黨との關係

支那に於ける共産主義運動がコミンテルンと最も密接なる關係を有し、中國共産黨の成立、同黨と國民黨との提携等悉くコミンテルンの盡瘁に俟たざるなきは既に前章に於て說述した如くであるが、今日に於ても、中國共産黨は、コミンテルンの一支部として、コミンテルンより派遣された人員によつて指導されつゝある。

抑々コミンテルンが、斯くの如く支那に着目するに至つたのは、ロシア革命當初に於けるその豫想に反して、歐洲に對する赤化意の如く進展せず、殊に一九二三年獨逸革命の流産以後、西歐資本主義は安定傾向を示すに至つたのに鑑み西歐無産階級に革命爆發の可能が無いのを認める一方、國内に於ては戰時共産主義の成績思はしからず、爲めに新經濟政策の採用と歐洲資本の輸入とによつて、局面の打開を計るの已むなきに至つたのであるが、此等の事情によつて寧ろ對歐赤化は暫時之を緩和して主力を東洋に傾注し、以てコミンテルンのモットーとする世界革命の目的を達成せんとするに至つたからである。卽ちかの革命の亘頭レーニンは、夙然起つて、『世界革命は東洋よりすべし。その前提として先づ支那の赤化に全力を注げ！』と激勵一番したのである。

元來支那は、尨大なる國土と數億の民衆とを有しながら、外的には外國の資本主義に壓迫され、內的には戰亂の止む時なき國家であつて、民衆は常にその戰禍に塗炭の苦を嘗めてゐる。而も當時に於ける支那の社會情勢は、世界大戰並に國民黨思想の影響を受けて、反帝國主義運動と左翼思想の擡頭漸く顯著ならんとしてゐた際であつたので、亞細亞諸國中コミンテルンの最も望みを屬したる國であつた。これが卽ちソヴエート露西亞の「東方政策」の由來である。

於是ロシアは一九一九年及び一九二〇年の兩度に亘り對支宣言を發して一切の不平等條約を撤廢し、且つ帝政ロシアの獲得したる權益を放棄すべき旨聲明【註一】して先づ支那の歡心を買ひたる後、コミンテルン極東部長ウオイチンスキー、マーリン共他有力なる宣傳員を多數支那に派遣して中國共産黨の組織、工會及び農民協會の構成等に盡瘁せしめ、國共合作以後は、ボロヂン、ガロン等多數の顧問を國民政府並に國民革命軍中に派遣してこれが改善を斷行せしむると共に、財政的、軍事的にも亦多大の援助を與へたのである。國民革命軍が短時日の間によく北伐を完成し得たのは殆ど全く右ロシア側の助力に負ふものと言ふべきである。

その後、國共兩黨は分裂し、南京政府とロシアとは國交斷絶し、爲めに、ロシアは國民政府に派遣したる顧問、宣傳員、並に外交機關等を總て本國に引揚げるに至つたので、その對支赤化宣傳は從來の如く直接且つ容易なるを得ざるに至つたが、併しコミンテルンは常に支那共産主義運動の推移を注視し、事態に應じて臨機の指令をこれに與へたるのみならず、上海にはコミンテルン駐在員【註二】及びプロフインテルン所屬の太平洋勞働組合書記局【註三】を置いて共産運

動並に勞働運動の直接指導宣傳に當り、更に支那赤化に必要なる宣傳員並に人材養成に對する機關として、モスクワに學校を設けて支那勞働者乃至共產黨員を多數招致留學せしめ、一切官費を以て黨運動上の指導者たるべく敎育してゐる。現在モスクワに於ける支那學生は約一千五百名と稱せられ、左記學校に收容せられ、共產主義敎育を受けてゐる。

一、孫逸仙支那勞働者大學　一九二五年一月支那共產主義運動の指導者養成を目的としてモスクワに設立せられたもので、校長は當初ラデックであつたが、其後ミフとなり、現在はウエーゲルであると言はれてゐる。本校は最初ヨツフエ、ラデック、ブハリン等の有力者によつて組織せられた孫文大學後援會によつて維持されてゐたが、後ソ聯邦政府の直營に移つたものゝ如くである。同校一年の經費は百二十萬留で、支那學生の學費は全部支給されてゐる。一九二七年頃の學生數は約四百名(內約百名は女學生)內外であつたが、現在は多少減少してゐる由である。

二、スターリン東方勤勞者共產大學　本校は、日、支、鮮、比、印等東洋諸民族及びソ聯邦內の亞細亞民族に共產主義敎育を授くる目的の下に設立せられたもので、スターリンがその名譽校長たる關係上、校名に同人の名を冠して居るも、普通は略してクートヴエーと稱してゐる。本校では特に新疆省出身者數十名を收容してゐることは注目すべき所である。

更に他方共產軍並にソヴエート區域に對しても亦相當の援助指導を與へつゝあることは左記事實によつても明らかである。卽ち

一、一九三〇年七月共產軍が長沙を占領したる際同軍兵士にしてロシアの銀貨を使用したる者あること

二、江西省東固に據る共產軍の彈藥製造廠にはロシア人技師數名が招聘せられ居ること

三、一九三〇年春、共產軍第七軍が廣西省龍州を占領し、同地にソヴエート政府を樹立したる際、廣西省政府及びフランスの聯合軍の爲めに擊破せられ、同地を撤退したるが、當時聯合軍は龍州ソヴエート政府指揮の任に當れる露人四名を俘虜とし之を銃殺したること

四、廣東省海陸豐ソヴエート政府內には數名の露人ありて指導の任に當り、一九二七年國共分裂までに支出されたる額丈けでも約一千萬圓と見積られてゐる。尤も最近では餘り大した金額も來てゐないやうである。所でコミンテルンと中國共產黨との間に金錢上の直接授受は何處で行はれるかといふと、大體に於て上海で行はるゝやうである。その機關と目されてゐるのは、ロシア通商代表部や、プロフインテルン所屬の太平洋勞働組合書記局等である。その事實は、一九三一年六月、上海に於けるヌウランス夫妻の逮捕によつて明らかにされた。又一九二七年八月には我國に駐在するロシア外交官の手を經て、東京より上海の總工會宛二百萬弗を送附したことは此間の消息を物語る一證據である。【註四】

註一　モスクワ政府外交委員長代理カラハンの名を以て支那國民と南北兩政府に宛てゝ發表された對支宣言。

註二　コミンテルン上海駐在員として派遣せられたる者は、ウオイチンスキー、ヤンソン、ジョンソン、ゼームス等である。

註三　一九二七年五月漢口に開催せられた太平洋勞働組合第一回大會の決議に基きて設立せられたものであつて、當初は漢口に設置せられてゐたが、國共分裂後は漢口に於ける共產黨彈壓の結果之を上海に移した。同書記局は永く米國共產黨員ブラウダーを

書記長とし、その下に、日、支、露、英、濠、比等の各代表がその幹部となつて活動を繼續し來た。ブラウダーは一九三〇年本國に歸國し、官憲に逮捕せられた。

その後一九三〇年三月ヌウランなる者その後任として來滬し書記に任じてゐたが、(ヌウランは又コミンテルン東方局主任をも兼ねてゐた)一九三一年六月十五日妻と共に上海にて逮捕され、南京に護送の上江寧地方法院で審理の結果、一九三二年十月十四日遂に無期徒刑の宣告を受けた。

註四　一九三〇年、ロシア前駐日代理大使ペトロフがフランスに於て發表せる記事參照。

第五章　中國共產黨政綱政策の分析

第一節　中國共產黨の政綱

中國共產黨の根本任務とする政綱なるものを一般的に觀察すれば、第一、地主を打倒して土地革命を實行し、第二、帝國主義に反對して支那を解放し、第三、國民黨政府を打倒してソヴェート政權を樹立することにある。中國共產黨は民國十七年(一九二八年)七月の六全大會に於て、客觀情勢を基礎として所謂十大政綱なるものを決定したのであるが、此れは現段階に於ける中國共產黨の政策乃至戰術の根本指針であり、又共產軍の行動綱領であつて、左の如くである。

一、帝國主義の打倒。
二、外國資本に依る企業、銀行の沒收。
三、中國の統一と民族自決權の承認。
四、軍閥、國民黨政權の打倒。
五、勞農兵代表會議(ソヴェート)政權の建設。
六、八時間勞働制、賃銀增加、失業者救濟、並に社會保險等の實行。
七、一切の地主の土地沒收と農民の耕地所有。

八、兵士生活の改善、兵士に對する土地及び工作の附與。
九、一切の軍閥課稅の廢止、統一累進稅の實行。
十、全世界プロレタリアート及びソ聯邦との聯合。

第二節　中國共產黨政策の變遷

中國共產黨の指導者は、コミンテルンの指令に從ひ、その黨綱の示す所に依つて行動すること勿論であるが、その目前の政策並に戰術は如何なる方針の下に運行してゐるのであるか。中國共產黨が結黨して以來、國共分裂に至る迄の事は旣に前章に於て略述した通りであつて、再び之を繰返す必要を認めないが、本節に於て特に研究を要すべき點は、國共分裂後に於ける中國共產黨の政策並に活動方針の變遷である。大體論から此等を分類すると、民國十六年（一九二七年）八七九江會議以後廣東暴動（民國十六年十二月十一日——十三日）に至る迄のものと、第六回全國大會（民國十七年七月九日）以後のものとに分けなければならぬ。併し乍ら此れとても歸する所は大體論としての區別であつて、國共合作時代の政策や方針を根本より改むるといふのでなく、

『無產階級の獨立性を闡明にし、一部の妥協を棄て、勞働者農民自身が國民革命の完全なる指揮者となり、勞農大衆の力量を以て勞農ソヴエートの政權獲得を目指す武裝鬪爭に進出する。』

といふ根本政策に至つては何等の變化もないのである。

九江會議の持つ重要意義は、結黨以來の中國共產黨の政策を實際的に改變することを宣言した點にある。即ち同會議に於て決議された、『中國共產黨の政治任務と策略の議案』は、國民革命の過程に於ける民族ブルジョアジーの役割と共の必然的歸趨とを詳細に述べ、過去に於ける共產黨の機會主義的政策がプロレタリア運動の發展を非常に阻碍したことを嚴重に批判し、勞働者農民自身の政府建設、プロレタリアートの獨裁への前進を高唱し、この前進に依つてのみ支那現在の環境の解放、卽ち

一、外國資本の壓迫よりの完全なる解放、例へば一切の不平等條約、帝國主義特權の廢止、關稅自主、外債取消、外國人の占有する生產資料及び交通機關の國有
二、全國的市場の建立、例へば一切の封建遺毒の肅清、土豪劣紳の私有地の沒收、土地國有、一切の上下國家機關を破棄して革命的民權的新政府を建設すること
三、勞働者農民の政治的、經濟的、法律的地位の急激なる改善等

が解決されることを說明し、更に

『勞農兵ソヴエートは革命的政權の形式であり、勞農民主獨裁制を保證するものであり、支那の非資本主義的發展の唯一の方法であることを述べたる後、現在の形成に於て、ブルジョア民主主義革命と社會主義革命との間には、何等明確なる階級的境界線なく、又民主主義革命が社會主義革命に變移する前途は、唯無產階級の組織力量の程度如何に依つて決定され、從つて黨は勞農大衆の中にソヴエートの意義宣傳を切實に開始し、ソヴエートの組織の準備を行はねばならぬ』

と切言してゐる。而して實際戰術として勞農の武裝暴動を高唱し、各地に革命委員會を設け、臨時革命政府の性質を保持し、暴動勝利の後、即ちソヴエート代表會議組織と共に、政權をこれに引繼ぐべきであるとなし、黨員は此の決議に依り各地に潛入して勞農の武裝暴動を煽動した。その結果、湖南、湖北、安徽、江西の四省秋收暴動となり、革命の波は急激に高漲したが、結局此の暴動政策(責任者瞿秋白)も完全に失敗し、今後の鬪爭に適應しないといふことを痛感するに至つた。そこで此の經驗と敎訓に基き、黨中央は再び新對應策を考慮し、以て來るべき第二の革命高漲期に對する準備に著手したのである。蓋しこれが具體的に宣告せられ具體化せられたのは、實に民國十七年(一九二八年)七月モスクワに開かれた第六回全國大會の決議がそれである。それに依ると、

『過去に於ける經驗を詳細嚴密に批判したる後、第二革命期の切迫したることを高調し、大衆の獲得及び武裝暴動の意義の宣傳の必要を力說して日和見主義と妥動主義を警告し、黨內工作、勞働者農民の運動に對する目前の行動、ソヴエート區域內に於ける任務、民衆運動中の任務、反帝國主義、反軍閥鬪爭中の任務、兵士運動の任務、各國共產黨との聯絡。』

等に就いて一々具體的方針を指示したる上、對國民黨方針として、

『國民黨の罪惡と本質を暴露し、之を打倒すべき運動を繼續すると共に、大衆中の階級意識を朦蔽し、反帝國主義民衆運動の內に不斷の妥協を提出する所謂第三黨の一派に對しても、無產階級の獨立性を支持して絕對に排擊すべきものである。』

と訓令してゐる。斯くて此の新方針に基いて決定せられた、就中黨の重要問題たる農民運動及び勞働運動に對する政策及び方針は大體次の如きものであつた。

(一)　農民運動に對する政策並に指導方針

支那革命の中心は農民革命にして、農民革命の主要內容は土地革命である。故に共產黨の土地政策は、

1、豪紳地主の政權を打破し、農民代表會議(農村ソヴエート)及びソヴエート政權を樹立すること
2、豪紳地主階級の土地を無償沒收し、之を農民代表會議(農村ソヴエート)の管理に歸せしめ、土地を有せず又僅かなる土地を有するに過ぎざる農民に之を分配すること。
3、官田、公田、祠田(祠堂、廟宇及び敎會の所有地)等を沒收し、農民代表會議(農村ソヴエート)の管理に歸せしめ之を農民に分配すること。
4、高利貸に對する債券を取消すこと。
5、豪紳地主に對する小作契約を取消すこと。
6、軍閥及び地方官憲の賦課したる諸稅を取消すこと。
7、國家は土地の工事、水利の改良、天災豫防、移民事業の辨理、農業銀行及び信用組合の設立に依る低利貸借辨理、貨幣制度及び度量衡の統一、並に森林、河川、道路の直接管理に依り農業經濟を援助すること。

等にある。而して**農民運動指導方針**として、

1、農民協會の組織を擴大强化すること。
2、農民協會を中心として農民運動を起さしめ、暴動成功の曉には農民代表會議(農村ソヴエート)を組織し、農民協

會に代つて農村の政治的及び經濟的指導に任ぜしむること。

3、從來支那農村に於ける迷信的武力的團體たりし紅槍會、大刀會等を暴動に際して利用すること。(但し暴動後は速かに其の武裝を解除し、又は機會を俟つて改編し、その領袖を排除すること。)

4、農民運動の戰術として遊擊戰爭を行ふこと。

5、農民運動に當つては、勞働者階級をして指導的地位に立たしめ、且つ農民と勞働者との提携を常に密接ならしむること。

等を擧げてゐる。之を要するに、從來の如く過激なる暴動主義を止め、且つ妄動主義に墮せずして運動の重心を農民協會に置き、同協會の擴大强化を計ると共に、勞働運動と常に密接なる聯絡をとりつゝ徐々に運動を繼續し、以て革命高漲期の再來を待たんとするに在つた。

(二)　勞働運動に對する政策並に指導方針

1、過去に於ける勞働運動の組織が眞正なる民主集中制度の基礎の上に立たず、下層工作中に於て勞働者を訓練し、其中より選拔して指導機關に加入せしむることをせず、却て勞働者の生活狀態を知らざる學生を派遣して勞働機關に加入せしめた結果、黨と工會との連繫薄弱となつたに鑑み、過去の此の錯誤を改むること。

2、多數の勞働者を有する反革命工會或は黃色工會に對しては、積極的に參加して此等を共產黨內に引入れること。

3、都市に於ける店員と店主との衝突を利用して都市に於て勢力の擴大を計ること。

4、資本家は女工、幼年工を以て成年工に代へつゝあるを以て女工、幼年工をも共產黨に吸收するに努むること。

5、罷業に對する方策は、全國總工會第四回代表會議(民國十六年六月十九日漢口にて開催)に於て決議せる經濟綱領たる、

イ、八時間勞働制
ロ、每週一日の休日制
ハ、休日に於ける普通賃銀の給與
ニ、十四歲以下の幼年工の禁止
ホ、少年工の六時間勞働制
ヘ、女工の夜業禁止
ト、女工の產前產後の休暇に對する普通賃銀の給與

等を採擇決議した。

右六全大會の決議はその後に於ける中國共產黨政綱政策の根幹をなすものであつて、現在に於ても依然この決議に準據してゐるのである。只その間、革命的客觀情勢の推移とソヴエート區域の擴大とに從ひ、黨の政策上に於ける重點もそれに適應して按排せられて來た。卽ち黨は民國十八年(一九二九年)十一月陳獨秀一派を除名し、黨中央は李立三一派を以て牛耳られるに至つたが、丁度その頃朱德、毛澤東を中心とする共產軍及びソヴエート工作は意外に進展し、又翌民國十九年五月には初めて全國ソヴエート區域代表大會の開催に成功した爲め、李立三等は革命の客觀情勢は、廣東暴動以來の革命退潮期から漸次高漲期に進みつゝあると妄信し、この革命高漲期に處する黨の任務と戰略方針として、

『黨は只廣汎なる大衆を戰取し、廣大なる大衆の鬪爭を組織して、革命高漲の迅速な到來を促進せしむるに注意するだけではなく、今一度進んで革命高漲が爆發した時、全國的武裝暴動を組織して政權を奪取すべき任務を注意せねばならない。それ故に大衆の政治鬪爭を强固に組織すると同時に、武裝暴動の組織上、技術上の準備に注意し、武漢を中心とした各省區の首ればならない。全國の革命高漲に注意し、武裝暴動から政權奪取の必要をより一層宣傳しなけ先勝利に注意することは、目下黨戰略の總方針である。【註一】

との決議を採擇し、『一省或は數省に於ける首先的勝利と全國的革命政權の樹立』に向つて黨の全力を傾注した。其結果民國十九年七月末の所謂長沙暴動事件、延いて長沙ソヴエート政府の樹立を見るに至つたが、李立三等の黨最高幹部が『中國共產革命の氣運が全國的に高漲してゐると過大に認定し、この認定の下に全國的暴動を計畫せること、及び下層組織と下層訓練工作とを怠つて、大衆と離れて只前衞のみの鬪爭に終始したこと。』等に因つて、該政府は僅か十日にして倒壞するに至り、その結果黨の責任者たる李立三及び其の一派は失脚し、その後黨中央は、陳紹玉等のロシア留學生派に占められ、一方コミンテルンからも民國十九年（一九三〇年）十一月十六日、李立三コースの誤謬を指摘し、黨の政治方針として左の如き指令が到着した。

一、即時團結ある眞正の勞農赤軍を訓練編成すること、

二、即時鞏固にして工作能力あるソヴエート政府を建設すること、

三、ボルセヴキキ主義の下にソヴエート區域の大衆を組織することに努力すること、

四、非ソヴエート區域に於ては、大衆の政治的經濟的鬪爭の組織に努力すること、

五、帝國主義者間の矛盾を利用し、その反革命との聯絡を微弱ならしむること、黨が或程度に發展する迄は、勝敗を決する底の衝突は避けるが、それ迄に反帝國主義の任務を徹底的に宣傳すること、

以上の指令は現在に於ても、黨の政策の一般原則となつてゐる。

第三節　現段階に於ける中國共產黨の政策並に活動方針

中國共產黨は前述のコミンテルンの指示せる政治方針、並に一九三二年九月開催のコミンテルン執行委員會第十二回總會に於ける中國共產黨に對する決議たる、

『中國共產黨は國民黨下の支那に於ける反帝國主義大衆運動に、プロレタリアートのヘゲモニーを確保すべく今後全力を傾注すべき義務がある。此の目的の爲めに中國共產黨は、ソヴエート運動の今後の展開及び深化、支那ソヴエート赤軍の强化、國民黨下の支那に於ける反帝國主義大衆鬪爭とソヴエート運動との結合をその任務とし、大衆の反帝國主義鬪爭に於ける下よりの單一戰線の戰術を廣汎に合理的に適用し、支那の獨立、統一及び保全の革命的國民解放戰爭、凡ての帝國主義者に對する鬪爭、帝國主義者の代辨者たる國民黨打倒のスローガンの下に、大衆を組織する事を任務とせねばならぬ。』【註二】

に根據して、左記六大要項を決定し、現段に於ける政策並に活動方針としてゐる。【註三】

一、反帝方面　支那の統一と領土の完璧とを爭取するとの口號を掲げて大衆を動員し、下層統一戰線の策略を用ひて反

帝的大衆組織を組織す。一切の黃色勞働組合及び反動派の反帝組織の中に喰込むと同時に、外貨排斥運動を我等の手中に握ること。

二、ソ區と共產軍方面　從來のソ區を擴大し鞏固ならしめ、出來得る限り各ソ區を打つて一丸となし、川陝新ソ區を發展し創造す。共產軍を擴大して一百萬人となす。

三、勞働運動方面　勞働者の日常鬪爭、失業勞働者の鬪爭を强くアジリ、且つ此等を組織して赤色勞働組合の組織を擴大して黃色勞働組合に喰込み、出來得る限り勞働者の經濟鬪爭を政治鬪爭に迄發展せしむるを要す。

四、農民運動方面　農民の抗租、抗稅鬪爭を捉へ、此の鬪爭を農民暴動、遊擊戰爭に迄發展せしめて、新ソ區を成立するを要す。

五、ソ區と共產軍勝利の宣傳　ソ區及び共產軍の勝利を廣く宣傳し、ソ區及び共產軍擁護の運動を組織化するを要す。

六、ソ聯邦五ケ年計劃成功の宣傳　ソヴエート聯邦社會主義建設の勝利を廣く宣傳し、ソ聯邦擁護の大衆運動を進行す。

註一　滿鐵『ソヴエート聯邦年鑑』一九三四年版による。

註二　某方面の資料による。

第六章　中國共產黨の內訌と分裂

第一節　內訌分裂の概觀

既に述べた如く中國共產黨は、コミンテルンの一支部であり、その指導下に在つて行動するものであるから、黨の幹部はコミンの指令を忠實に執行するものでなくてはならない。換言すればコミンテルンの指導に盲從する者が幹部となつて黨內に勢威を張り、然らざる者は過去に於て如何に黨の爲めに功勞者であつても容赦なく黨外に驅逐されるといふ風で、黨人の消長や離合は全く朝を以て夕を測り難いものである。例へば中共立黨以來の黨員であり、且つ指導者として功績あつた譚平山が、民國十六年（一九二七年）十一月右傾したとの理由の下に除名され、中國共產黨の大元老ともいふべき陳獨秀はトロッキー日和見主義の過誤を犯したといふ譯で民國十八年（一九二九年）十一月除名され、更に支那のスターリンと迄稱されてゐた李立三は、徒らに左傾盲動主義に走つて長沙事件（民國十九年八月一日）の失敗を演じたといふ理由で、民國二十年一月指導者たるの地位を奪はれたといふが如きである。而もこれのみではなく、その間各派勢力の內訌が程度の强弱こそあれ絶えず行はれて來たのである。

內訌の最近の例を示すならば、豫て李立三派を攻擊しつゝその倒潰の機を窺つてゐたミフ【註一】の系統に屬する陳紹玉、秦邦憲、何子述等のロシア留學生派が、長沙事件の失敗を動機として、李立三派に對して開始した鬪爭の如きが卽ちそ

れであつて、此の內紛は結局ミフ派の勝利に歸し、向忠發、陳紹玉、周恩來、沈澤民等の新中央幹部が組織されたけれども、黨內に殘つた李立三の勢力は依然新幹部に對して抗爭を續け、加ふるに、何夢雄、羅章龍等の調和派が起つて陳紹玉一派に對抗した爲め、却つて內紛を激成せしめたのである。而して、民國二十年六月には向忠發が逮捕銃殺され續いてヌウラン夫妻、韓麟符、羅綺園、何夢雄等が前後して逮捕されるに及んで、黨中央の指導權は自然ミフ派の陳紹玉等の手に握られるに至つた。これ民國二十年九月頃の事である。所が間もなく此の陳派の內部にも亦暗鬪を生ずるに至つた。即ち陳紹玉は向忠發逮捕前後に、支那代表としてモスクワに派遣されてゐたのであるが、その留守中、黨中央の指導權は秦邦憲の一手に握られたのである。秦はその際、陳紹玉（陳紹禹とも書く）に對し聊かたりとも不滿の意を示す者があれば、其等を利用しては自己の勢力を殖し、或は自己の意のまゝにならざる者は同派の者と雖も他へ放逐した。例へば張聞天をソ區へ追ひ込んだ如きである。かくして、秦邦憲が黨中央を指導するに至つた以後、所謂ロシア留學生派も亦分裂し、現在黨中央の實權は秦邦憲の手に在るとは云へ、實際は各々我見を固執し、絕えず暗鬪を演じてゐる有樣である。

かくの如く中國共產黨の幹部級は常に新陳代謝して今日に及んでゐるのであつて、今日の幹部も明日はコミンテルンコースの違反者或は反動分子として警告批判等を受けるどころか排斥されるやうな事は珍しくない。或は又久しく黨の幹部として或は革命の鬪將として重きをなしてゐた要人であり乍ら、政治的意見、又は個人的感情の衝突位で直に黨を攪亂したり、又は國民政府の買收によつて一夜にして其の態度を一變し、飜然國民政府の官吏となり、ブルジョア生活に耽つたり、或は國民黨のスパイとなり、或は密告に依つて同志を賣る等厚顏無恥の所謂階級的裏切者も多く見受けられる程で、同志の間と雖も常に警戒の眼を張り不安動搖常なき有樣である。

而も此の黨內の動搖に乘じて、國民政府の白色テロは最近愈々深刻化しつゝあるに鑑み、黨中央は組織の改革と强化の必要を痛感し、最近組織部の重要會議を開いて全國の組織に關する報告を檢討すると共に、今後組織工作の中心を組織の嚴密化に置き、白色區域（特に裏切者の最も多い浙江、江蘇の兩省及び上海特區）の組織を改造し、ファシスト細胞の嫌疑或は右傾的傾向ある省委、區委、支部黨員は全部除名し、之れに新なる幹部を入れ換へて一切の責任を負はしめ、一方國民政府の白色テロに對抗して赤色テロを以て對抗すべく、ソヴエート中央政府の政治保衞局（ゲ・ペ・ウに相當するもの）より數十名の人員を上海其他に派遣して、突擊工作を進めて黨の强化を計つてゐる。【註一】

以上は黨內の內訌分裂の大要であるが、この影響はソヴエート區域內にも反映して、ソ區內に於ても朱德、彭德懷、黃公略等の軍權派（實力派）と毛澤東等の黨權派との衝突軋轢があり、毛澤東は朱德を暗殺せんとする陰謀さへ企んだとの報さへある程である。事實毛澤東は自己の黨政上に於ける潛勢力を利用して、異分子を排除して自派を以てソ區內を牛耳らんとした。此の爭鬪が延いては民國十九年（一九三〇年）十二月七日黨の內訌史上有名な所謂富田事件【註二】を惹起するに至つたのであつて、最近孔荷寵（共產軍第六軍團總指揮）の如き共產軍の領袖が、國民黨軍に投降するに至つた事もその一因は斯うした內爭に基因してゐる。【註三】

註一　上海日氏情報第六一〇號による。

註二　毛澤東が、江西省委及び同省ソヴエート政府內にAB團（アンチ・ボルセヴキク）の分子が潛在してゐるのを除くといふ口實の下に、自派以外の分子七十餘人を逮捕し斬殺した事件である。

註三　孔荷寵自らその投降手記にさう述べてゐる。（上海日氏情報第六二二——六二四號）

第二節　各派分裂の狀況

（1）派別の概況

以上の如く、中國共產黨は結黨以來絶えず抗爭分裂を續けて來、幾多の派別を形成して來たが、之を嚴密に分つならば、幹部派と反幹部派の二大別に分つことが出來る。幹部派は中央派又は正統派乃至スターリン派とも稱され、反幹部派は卽ちコミンテルンの爲めに除名せられたトロッキー派と陳獨秀派との聯合體であり、又取消派とも謂はれてゐる。幹部派は更に左の四大派に分かれてゐる。

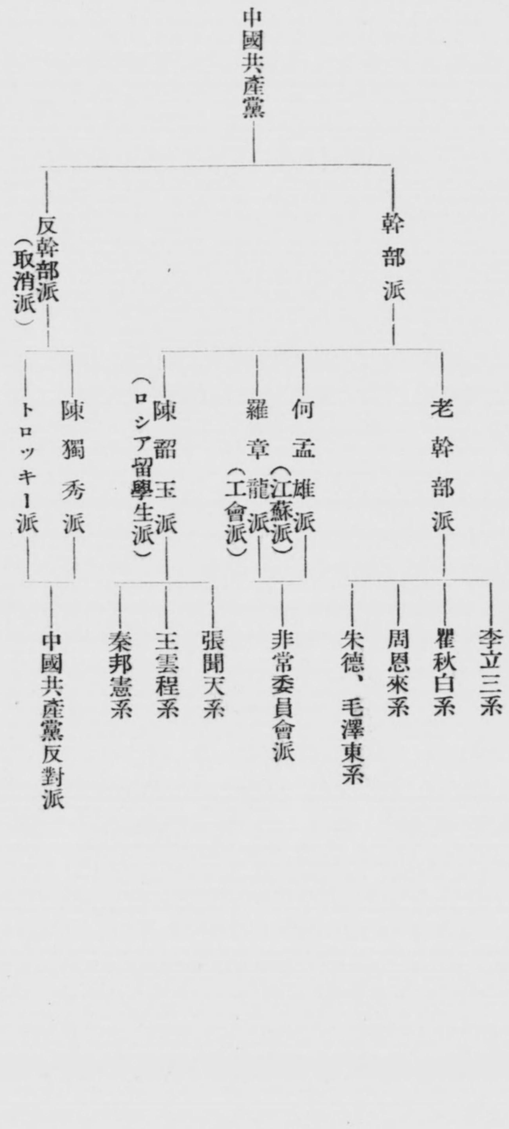
一、老幹部派、李立三派とも稱せらる。

二、何孟雄派、一名江蘇派とも稱せらる。

三、陳紹玉派、一名ロシア留學生派又は飜譯派とも稱せらる。

四、羅章龍派、一名工會派、又は何孟雄派と共に非常委員會派とも稱せらる。

老幹部派は又李立三、朱德、毛澤東、瞿秋白、周恩來等の諸系に分れ、陳紹玉派の下にも亦王雲程、秦邦憲、張聞天の系統がある。之を表示すれば左の如くである。



（2）各派成立當時に於ける主要幹部及び其の勢力範圍

A、反幹部派、該派は陳獨秀、劉仁靜を首領とし、彭述之、段子良、蔡正德、鄭超麟、李季、梁幹喬、汪澤楷、何資深、馬玉夫、高語罕、劉伯堅、王若飛、李平、劉英、羅士藩等を其の主要幹部とし、上海に於て電氣、新聞事業

工人、及び一部の飜譯著述家を其の勢力範圍としてゐた。

B、老幹部派、卽ち舊中央派、該派は瞿秋白、李立三、毛澤東等を首領とし、向忠發、周恩來、羅登賢、李維漢、鄧中夏、彭湃、賀昌、吳振鵬、溫玉成、袁炳輝、羅綺園、項英、蔡和森、關向應、余飛、惲代英、阮笑仙、陳郁等を主要幹部とし、香港、上海の一部、及び湖南、湖北、福建、江西省內並に海員等を其勢力範圍としてゐた。

C、何孟雄派　該派は何孟雄、徐錫根、李富春を以て骨領とし、王克全、徐炳根、蔣雲、陳資平、許晏之、沈先定、劉俊三、李超時、朱秀英、徐大妹等を其の主要幹部とし、上海及び江蘇、浙江、安徽三省を其の勢力範圍としてゐた。

D、工會派　該派は羅章龍を以て首領とし、李震瀛、張坤弟、韓運會、唐宏景、林育南、張金保、孫振一、吳雨銘等を其の主要幹部とし、鐵道、鑛山及び北方各省を其の勢力範圍としてゐた。

E、ロシア留學生派　該派は陳紹玉、秦邦憲を首領とし、沈澤民、王稼穡、王雲程、張聞天、汪盛荻、何子述、陳昌浩、楊尙昆、夏曦、孫際明等二十八名を以てその主要幹部とし、モスクワ留學生及び江西、安徽、湖南、湖北西部ソ區を其の勢力範圍としてゐた。

註一　――印は現在では轉向して國民黨の走狗となつてゐる由傳へられてゐる。（上海日氏情報第六一二號による）

註二　本項は某方面の資料に依る。

（3）各派の相互鬪爭の結果と其後の情勢

a、陳獨秀派（取消派）　該派は陳獨秀が民國十八年（一九二九年）十一月正式に黨籍を解除せられ、續いて民國二十一年末國民政府の手に捕逮せられると共に、殆ど全滅するに至り、黨員の多くはAB團に合流してゐる者が多い。現在上海の飜譯著述家の中には尙ほ此派に屬してゐた者が相當勢力を占めてゐる。

b、何孟雄派　該派は民國二十年（一九三一年）一月の中共四中全會後、老幹部派とロシア留學生派が聯合して壓迫を加へた爲め、工會派の羅章龍と協調し、非常委員會を組織して四中全會に反對した。所がその反對運動が非常に盛んになつたので、老幹部派と陳紹玉派とは大恐慌を來し、敵愾心から遂に國民政府に密告したので、同年半頃何孟雄始め四十餘名は逮捕されるに至り、爾後該派の重要分子の多くは、非常委員會より退出して中央に降り、同年多蔣雲も亦逮捕せられ、王克全、劉俊三等は中央の爲め除名せられ、今や該派は瓦解の狀態にある。

c、工會派　該派は中共六全大會後全國工會を牛耳つてゐたが、後該派の羅章龍は、何孟雄、陳紹玉等と聯合して老幹部派打倒を劃策した處、陳の裏切りに因つて非常なる打擊を蒙むるに至つた。於是、何孟雄等と共に非常委員會を組織して四中全會反對を表示した。所が後になつて、何派の一部は逮捕せられ、一部は中央に降り、斯くて非常委員會は遂に羅章龍派に占められるに至つたが、其後羅派の分子中或者は中央に降り、或者は陳獨秀派に投ずる者もあり、斯樣にして該派も自然消滅するに至つたのである。

d、老幹部派　該派の中、李立三系は御大の李が民國十九年（一九三〇年）十一月末、その政治コースの錯誤に因つて、中央政治局より退いてモスクワに召喚されて以來、陳紹玉一派に壓倒せられて中央を去り、該派分子の多くはモスクワに行つたり、或はソ區內に分散して居る。

瞿秋白系、周恩來系も右と同樣、多くは中央より追ひ出され、瞿秋白はソヴエート中央政府の教育人民委員となり、（瞿は病沒したとも傳へられてゐる）周恩來は、中央政治局ソ區中央分局の副主席並に中央軍事部長となつてゐる由傳へられてゐる。

e、ロシア留學生派　該派の中堅陳紹玉系が中國共產黨の指導權を獲得したのは民國二十年（一九三一年）九月であつたが、その後該派も分裂を生じ、左記數派に分れてゐる。

イ、秦邦憲、孫際明（既に轉向せりと傳へらる）、趙容、廖雲程、黃勵、史東等の一派で、現在の中央は此の一派に握られてゐる。

ロ、張聞天、汪盛荻（既に轉向せりと傳へらる）等の一派

ハ、王雲程（既に轉向せりと傳へらる）、華崗、楊尙崑、何克全、陳鐵眞等の一派

ニ、劉少奇、盪福坦、姚曙時、林仲舟等の工會工作員の一派

ホ、朱德、毛澤東のソ區內實力派は、從來中央の命に服從して來て居たが、周恩來、鬪向應等の老幹部派がソ區中央部に轉ぜられた後は、事實上秦邦憲等の中央より離れてゐる由傳へられてゐる。

第三節　中國共產黨分裂の原因

以上述べた如く、中國共產黨は、結黨以來今日に至る迄僅か十數年に過ぎざる間に、絕えず分裂紛糾を招來し、その間國民黨のスパイ政策、テロ政策は此の分裂に拍車をかけ、黨そのものは（ソ區及び赤軍は別として）今や多事多難の時代に遭遇してゐる有樣である。

然らば鐵の規律の下に黨紀に服從し、黨章を尊重し、熱烈なる階級的意識に燃えてゐる革命的分子を以て組織されてゐるべき筈の共產黨が、何故に斯くの如き離合集散、分裂排擠を事として自ら黨を破壞に導くかと云ふに、それは勿論一面には革命に對する見解の衝突と理論鬪爭の結果でもあるが、詮ずる所支那人の性格的缺陷の然らしむる所であらう。由來支那人は、黨中黨を樹て、嫉妬排擠、自己の領袖慾、權勢慾を滿足せしめずんば已まざる一種の利己的排他心を多分に有つてゐるが、共產黨幹部とてその例外ではない。此れは國民黨內に於ける小黨分立、黨內要人連の絕えざる內訌分裂によつても判る所である。支那人のかくの如き缺點は、固き團結と服從とを信條とし、殊に秘密を嚴守すべき地下工作の非合法運動を行ふには、非常なる障害となつて居つて、尙ほより嚴密なる訓練と指導とを經て、彼等の最も排斥する封建的惰性、官僚氣分、ブルジョア的性格を自ら一掃して、先づ自己革命より完成せざる以上、中國共產黨の將來は依然分裂紛糾を繰返へすのみであらう。

中國共產黨の此の分裂紛糾の原因に就いて、一共產黨員は之を解說して左の如く述べてゐるが、實に肯綮に當ひする點が多い。卽ち言ふ

一、上級の權力利益の爭奪

民國十六年（一九二七年）、湖南の秋收暴動失敗後、幾多の共產黨員は、新たなる方略を抱いてゐたが、コミンテルンから陳獨秀、譚平山の如く追出されるに至つた。コミンテルンのスターリン、ミフ等は斯樣な情況を見て、支那の知

識分子は無用の長物だと痛罵して、代りに知識淺陋な多くの奴隷的分子を重用する事となつた。そこで黨の最高指導機關に居る者は、何れを見ても、黨を喰物として只官僚然と構へてゐる無能分子のみとなり、只管權力、利益の爭奪にのみ沒頭し、一度念願の某々權力地位獲得の望みを達すると、威風凛々豪然と命令を發し、美服を着、美食を備へ、富貴繁榮兩つながら兼ねることが出來たのである。民國十三年から現在に至る迄、かゝる爭奪紛糾は一刻も止む所なく繼續されて來た。

某一派の失敗を待つて、他の一派がこれに代つて成功し、成功した派は勿論意氣揚々得意然と構へてゐる。これに對し、失敗した連中は自分の周圍に集つて來て同情を寄せる分子を捉へ、之を別に組織して一派を作る。併しそれも結局財政的關係から久しからずして滅亡の浮目を見るに至るのである。

二、上級の專制

共產黨員の頭が斯くの如く簡單幼稚であるから、自然深刻に政治認識を究める事もなく、その決する所の策略も必然に淺陋幼稚で、均しく有識者の笑を招いてゐる。併し彼等の間では、それが可能不可能にお構ひなく、電流の如く下級に指令し、その執行を强要し、決して下級の意見なぞは容れられない。若しも、その執行に就いて黨部が躊躇したり、或は黨員が疑問の點を上級に問合したりした場合は、上級は早速お前の思想は左傾だ！右傾だ！とか、或は思想が動搖してゐる！之をお前に警告する！若し警告に異心を挾んだ時は非常手段がお前を待つてゐる！と來る。（斯くの如きは黨の組織原則たる『民主集中制』に反するものである。――筆者――）

斯くの如き政策の結果は、幾多の黨員を失つた外には、何等の好結果をも得なかつた。のみならず、幾多の黨員は一方では上級に對して全然信賴を有せず、他方では斯かる死の政策の執行せられることを懼れ、斯くて已むを得ず他に自分の出路を求めさるを得ないやうにして仕舞つたのである。

我等は黨の基礎は黨員の身上に築き上げられなければならぬ事を知つてゐる。黨が黨員や大衆の信賴を失つたならば、それは一個の空虛な機關になることは當然である。事實現在の一般黨員は、既に黨に對する信賴を失ひ、疑心暗鬼を生じて居る。……

三、上級の欺瞞

共產黨の上級幹部は、下級に對して、自己の權力利益爭奪の外、完全に指導云々を語らず、彼等は口先では革命を高唱し、犧牲奮鬪を說くが、裏面に廻つては私娼を買ひ、賭牌を弄して全く下級を欺瞞してゐる。下級黨員が生活に窮して上級黨員に補助を求めた時でも、上級委員は必ず官僚然として『補助はお前達の上級依賴心を養成して困る。お前達は自分で自分の經濟的出路を見出さなければ不可ぬ』と、斯う戒める。又事實、その下級黨員の懷に一錢も無い場合、飯屋に一緒に行つて飯を喰はして呉れと願つても、『あんな飯屋はブルジョア共の行く處で、我々の行くべき場所でない。我々は數片の燒餅で澤山だ』と言つて美事に拒絕する。又萬一一緒に飯屋に同行する事となつても、大概途中で急に慌て出し、『此の時間は某々處で緊急聯絡を約束してゐるから一寸待て！』とて同行を忌避し、其實某處でマーヂヤンでもして再び顏を見せない。（『光明之路』第二卷第二期より）

第三篇　共産軍の現狀

第一章　共産軍の成立及びその發展

第一節　共産軍成立の沿革

孫文の死後、國民黨の兵權は蔣介石の手に移つたが、彼は自己の手に養成した軍官學校の學生軍を中心に軍隊を統一し、國民革命軍と稱し、一九二六年(民國十五年)七月自らその總司令に就任した。斯くて彼は一意孫文の高調せる三民主義を奉じ、『軍閥の打倒』、『列强帝國主義の打倒』の二大スローガンを高く揭げて意氣揚々と北伐を決行することゝなつた。斯くて北伐軍はその行動を開始するや、靑天白日旗の向ふ處恰も無人の境を行くが如く、同年七月中旬には早くも長沙を占領して一氣に岳州に迫り、九月七日には漢口を占領し、一九二七年三月には上海を占領して長江以南をその掌中に收め、同軍の基礎漸く鞏固を加ふるや、豫てより共産黨の跳梁跋扈を憤慨してゐた蔣介石は、機會ある毎に共産分子の掃蕩に着手し來れるのみならず、武漢政府(一九二七年二月成立)內に於ても亦反共産分子の擡頭漸次有力となり共産黨彈壓の傾向顯著となつたので、コミンテルンは事態の急變に驚き、萬一の場合に備ふべく一九二七年六月初旬在

漢口派遣員印度人ロオイに宛て密令を發し、湖南、湖北に於て七萬(共産黨員より二萬、農民及び勞働者より五萬)の共産軍を編成すべき旨を命令した。【註一】然るに此の計畫は武漢政府内の國民黨幹部をしてコミンテルンの野心を益々疑はしむるに至り、却つて國共分裂の原因となり、遂に共産黨の右計畫は水泡に歸した。是に於てコミンテルンは方針變更の已むなきに迫られ、同年七月中委員會を開いて、共産黨員の武漢政府示威退出を指令した。共産派は此の指令に基づき、七月十日頃からボツボツ武漢政府を退出し、南昌に集合し、同地に駐屯してゐた賀龍、葉挺、朱德の三軍と提携し、同年八月一日南昌暴動事件を起し、【註二】茲に始めて共産軍なるもの、出現を見た。然るに右暴動に對し國民政府は直ちに張發奎、朱培德にこれが討伐を命じたので、三軍は同月六日南昌を捨てゝ江西南部より福建西南部を經て廣東省に出で、潮州、汕頭を攻略して更に廣東を攻略せんとしたが、廣東守備の李濟琛、黃紹雄兩軍に擊破されて四散し、所在の農民を赤化武裝しつゝ賀龍、葉挺兩軍の一部は同省海豐、陸豐地方に竄入し、同地にソヴエート政府を樹立し、又朱德軍は福建省を經て一九二八年四月江西、湖南の省境井崗山に據り、同地にて毛澤東指導下の農民軍と合體して、茲に正式の共産軍として所謂朱毛軍(朱德、毛澤東の軍)なるものを組織したのである。

註一　中國々民黨の資料に依る。

註二　國共分離後、南昌に集合してゐた譚平山等の共産黨員は、張發奎部下の賀龍、葉挺及び朱培德麾下の朱德等と提携し、一九二七年七月三十一日夜突如兵亂を起し、一擧に南昌を占領し、革命委員會なるものを作り、翌八月一日省政府を組織し、林祖涵、張國燾、惲代英、周恩來、彭、湃郭沫若等の共産黨員を以て臨時政府を組織した事件を云ふ。

第二節　共産軍の發展經過概況

一、はしがき

支那に於て共産軍が正規に組織されたのは前節にて述べた如く一九二八年(民國十七年)四月以後のことである。而してこの共産軍の基幹となつたものは、一九二七年八月の南昌暴動の失敗以來、廣東、福建、江西、湖南各省に四散して所在の農民を赤化武裝しつゝ不斷の鬪爭を續けてゐたパルチザン隊である。

一九二七——二九年に於けるパルチザン部隊の主なる活動舞臺は、農村ソヴエート運動の中心地たる江西、湖南、福建各省の山岳地帶であつた。この期間は都市に於ても幾多の大事件、大鬪爭が起つた。例へば一九二七年十二月十一日の廣東暴動、一九二八年五月の濟南事件、同年十月の上海郵便局ストライキ、一九二九年一月の漢口に於ける排日暴動(我が海軍陸戰隊の軍用車と支那人の人力車と衝突し、双方負傷者を出した事件が原因となり、遂に暴動化するに至つた)、同年一月——二月の英米煙草會社天津工場のストライキ、四月の唐山の繊維及び鑛山勞働者のストライキ、開灤炭坑のストライキ、七月の東支鐵道從業員のストライキ等々都市のプロレタリアートの此等の鬪爭は、直接間接農民のパルチザン運動を刺戟したことは事實である。かの朱德毛澤東のパルチザン部隊が正式の共産軍として編成されたのも恰度この時代であつた。已に述べた如く、この軍隊は主として南昌暴動に破れた賀龍及び朱德の軍隊の殘黨と毛澤東指導下の湖南省の農民軍とが合體して出來たものであつて、中には極めて鬪爭的な尖銳分子が多かつた。而して彼等の大部は廣東暴動の軍事

的中心となり、國民黨軍に大打撃を與へた張發奎の殘黨や、廣東暴動事件にて廣東を追はれた共產黨員の連中であつた。かくして編成された朱毛軍は、一九二八年四月以來、正式の共產軍として先づ湖南省一帶に亘つて活動を開始した。以下年代順に共產軍の發展概況を述べて見よう。

二、一九二七年—二九年（民國十六年—十八年）

一九二七年八月一日の南昌暴動以來、國民黨系軍隊の將校で共產黨員であつた者は皆部下と共に兵變を起したのである。賀龍、葉挺は南昌で兵變を起し、失敗後は福建に出で潮州汕頭にまで進み、更に廣東を攻略せんとしたが、李濟琛系の廣東軍に破れ、賀軍の一部は廣東省海陸豐地方に竄入して共處に初めてソヴエート政府を樹立した。（一九二七年十一月）これが支那に於けるソヴエート區域の最初のものである。又國民革命軍第三軍長朱培德の第九軍副軍長たりし朱德は、南昌暴動後、第九軍の一師を率ゐ葉挺、賀龍と共に南下し、賀葉軍が汕頭潮州に戰敗するや、その盤據地韓江上游地帶を放棄して福建の永定、汀州、上杭より江西廣東の省境に沿ひて湖南に入り、南支第一の嶮峻井崗山（湖南、江西七縣に跨る大山）に據り、此處にて支那共產黨中切つての農民運動の權威毛澤東指揮下の農民パルチザン部隊と合しソヴエート政府を設立した。（一九二八年四月）この部隊は後に第四軍として有名となつたものである。又農民組合指導者たる方志敏も武漢より逃れ、江西省東部の戈陽に到り、其處で少數の支持者群と一緒に農民運動のために活動を續けた。爾來此等の部隊は地方農民武裝隊と合流して、湖南、湖北、福建、江西の各地で專ら農民パルチザン區域を作ることに奔走した。又一九二八年の五月頃より廣西軍の團長であつた彭德懷は、湖南省東部、湖北省南部、江西省西部を根據として農民、土匪の間に勢力を扶殖しておた。

中國共產黨はかゝる部隊の實例に徵して、一方農民を煽動すると共に、國民黨系軍隊や地方軍閥中の兵隊を煽動して或は暴動を起させ、或は兵變を起させて、その過程中に農民を不完全ながらも武裝し、兵卒出身へは農民に武器の操縱法を教へるなどさせ、斯くして武裝部隊はその數を激增した。國民黨軍は絕えずこれが討伐を實行したが、彼等は共產軍の所謂『パルチザン戰術』乃至ゲリラ戰術を利用し、出沒の迅速、奇襲用兵によつて巧に討伐軍の攻擊を避ける方法を採つた。

一九二九年末に於けるパルチザン區域（遊擊戰區域）は、福建、江西、湖北、湖南、廣東、河南、廣西、四川の八省に亘つて約二百縣に達した。卽ち左の如し。

第一表　一九二九年末に於ける赤色パルチザン區域

省別	縣總數	赤色パルチザン區域（縣）
福建	六三	一六
江西	八一	四〇
湖北	六九	三〇
湖南	七六	四〇
廣東	九四	三〇
河南	一一三	七
廣西	九三	一〇
四川	一四六	正確な報告なし

合計	七三五	一七三

註　本表の數字は一九三〇年四月二十八日の『プラウダ』紙所載『中國に於ける來るべき革命の嵐を迎ふ』の統計に據る。合計には四川省は含まれてゐない。

一九三〇年初頭に於けるソヴエート區域數に關する統計から推定すれば、このパルチザン區域の大多數はソヴエート區域と見られる。かゝる多くの區域が、ソヴエート化してゐる以上、當時共産軍の數は五萬を越してゐたと見做して可からう。

次に一九三〇年に於ける共産軍の發展を見よう。

三、一九三〇年（民國十九年）

八七會議以後、中國共産黨の實權は李立三一派に掌握されてゐたが、一九二八年七月九日の六全大會以後、李一派の勢力は益々顯著となり、一九二九年十一月には終に陳獨秀一派を除名し、李立三全盛時代を現出した。恰度此頃、毛澤東を中心として共産軍及びソヴエート發展の工作は意想外に進捗した。於是、李立三は黨は廣東暴動以來の革命退潮期から漸次高漲期に進みつゝあると誤認し、一方得意時代にあり勝ちな自惚からして、一九三〇年初頭以來盛んに機會到來を叫んだものであつた。かくして一九三〇年五月には上海で全國ソヴエート區域代表大會を召集するに至つた。此の會議は、共産軍及びソヴエートの發展に對して劃期的役割をなした最も重要な會議であるが、この會議は多くの決議中『一省乃至數省の首先的勝利』と云ふ決議を採擇した。これによつて全國の共産軍は一齊に行動を開始し、特に江西、湖南、湖北三省に於て最も活潑に活動し、以下揭げるが如き發展强化を示すに至つた。

一九三〇年に於ける共産軍に關しては、雜多な統計があるが、此等を綜合して見れば、一九三〇年前半には、大體十四ケ軍、約十萬の共産軍が存在してゐたやうである。一方一九三〇年四月上旬に於ける共産軍の兵力に關し、コミンテルン前駐支代表ミフの發表する所によれば次表の如くである。

第二表　一九三〇年四月上旬に於ける支那共産軍の兵力

共産軍	兵士數	武裝兵士數	勢力區域（縣）
第一軍	四、〇〇〇	二、五〇〇	一〇
第二軍	四、〇〇〇	一、五六〇	一〇
第三軍	九、四三〇	六、五二二	一七
第四軍	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	一七
第五軍	三、八〇〇	二、〇〇〇	七
第六軍	三、〇〇〇	二、〇〇〇	七
第七軍	七、五〇〇	四、〇〇〇	一一
第八軍	二、〇〇〇	一、四〇〇	九
第九軍	三、〇〇〇	二、〇〇〇	一八
第十軍	八、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇
第十一軍	三、〇〇〇	二、〇〇〇	三
第十二軍	三、〇〇〇	二、〇〇〇	五
第十三軍	二、〇〇〇	一、〇〇〇	七
合計	六二、七三〇	三八、九八二	一二四

註　本表の數字は、一九三〇年五月三十一日のコミンテルン機關誌『ボルセヴキク』に前駐支代表ミフが發表した統計に據る。

これに據れば、卽ち一九三〇年の四月上旬には支那共産軍は十三軍より成り、六萬二千七百三十人の兵士を有し、其中三萬八千九百八十二人が武裝して居り、湖南、湖北、江西、廣東、福建の各省に亘つて、實に百二十四縣が其の勢力範圍となつてゐたのである。更にミフは一九三〇年六月二十三日の全聯邦共産黨第十六回大會に於て、支那の共産軍は一九三〇年四月下旬に於ては兵力七萬五千、內武裝せる者五萬二千に增大せりと報告してゐる。（一九三〇年七月九日の『ブラウダ』紙に據る）更に他の統計に據れば、一九三〇年前半に於ける支那共産軍の勢力は次の如く發展してゐる。

第三表　一九三〇年前半に於ける支那共産軍の勢力

軍別	軍長（總政治委員）	兵士數	小銃數	活動區域
第一	許繼愼（曹大靖）	五、三〇〇	二、九〇〇	湖北、河南、安徽省境、
第二	賀龍（陳叶平）	五、八八〇	四、一〇〇	湖南省西部及び湖北省西部
第三	蔡會（申熙）	五、三九〇	三、六〇〇	湖南省西南部、東部及び廣東省北部
第四	朱柏如（毛從）	八、八八〇	六、五〇〇	江西省東、西、南部、廣東省東部、北部、湖南省南部
第五	彭德懷（滕東遠）	六、八六〇	五、〇〇〇	湖南省東部、湖北省南部、江西省西部
第六	鄢繼助（周逸群）	五、八九〇	四、五〇〇	湖北省西部
第七	鄧希賢（張雲逸）	六、八九〇	六、五二〇	廣西省西江流域
第八	黃公略（鄧乾元）	四、八七〇	三、〇〇〇	湖北省東南部
第九	不明	不明	不明	湖北省北部
第十	〃 李明瑞	〃	〃	湖北省西部
第十一	古代存（鄧子恢）	五、〇〇〇	三、五〇〇	廣東省東江地方
第十二	不明	八、八六〇	六、〇〇〇	福建省西部地方
第十三	不明	不明	不明	浙江省南部
第十四	何昆（董長民）	一、八〇〇	九〇〇	江蘇省北部
合計		六六、六二〇	四六、五二〇	

註　本表の數字は一九三〇年の『上海報』（中國共産黨江蘇省委員會機關紙、現在廢刊）及び『露西亞事情』一一七號に據る。合計には第九、第十、及び第十三軍は含まず。

尙ほ中國共産黨側よりの別の情報に據れば、右の外に、方志敏（武漢政府時代の江西省農工部長、八七會議出席者）を團長とせる獨立第一團（兵數三千人）があることになつてゐる。故に右表中の不明な三軍の兵數を加算するならば、共産黨の宣傳と見て多少割引して計算しても、一九三〇年半ば頃には、共産軍の兵力は約十萬【註】位に達してゐたと見て大差あるまい。

註　一九三〇年五月の第一次全國ソヴエート區域代表大會の發表によれば、支那に於ける共産軍は二十一軍で、その中正式に改編を經たるもの十五軍、武裝十萬を超え、全國的に分布されたと言つてゐる。

又一九三〇年の前半に於て、支那共産軍は既に數萬の小銃の外に大砲、機關銃、拳銃、迫擊砲、飛行機の如き近代的

武器を有してゐたやうである。それを圖表に示せば左の如し。

第四表　一九三〇年前半に於ける支那共産軍の武器數

軍別	小銃	大砲	機關銃	拳銃	迫撃砲	飛行機
第一	二、九〇〇	二	三二	八〇	四	一
第二	四、一〇〇	四	五四	五〇〇	八	
第三	三、六〇〇	二	五三	六〇〇	一二	
第四	六、五〇〇	一六	一五六	八〇〇	一六	
第五	五、〇〇〇	四	五五	五五〇		
第六	四、五〇〇	一一	七五	六〇〇	二五	
第七	六、五二〇	二五	一〇三	八〇〇	二八	四
第八	三、〇〇〇	二	三九	五〇〇	八	
第九	不明	不明	不明	不明	不明	
第十	〃	〃	三四	八〇	〃	
第十一	三、五〇〇	二	三六	七二〇	四	
第十二	六、五〇〇		不明	不明	不明	
第十三	不明	不明	九	三〇〇		
第十四	九〇〇		六四九	五、五三〇	一〇五	五
合計	四六、五二〇	六八				

註　本表の數字は一九三〇年の『上海報』所載の統計に據る。第九、第十及び第十三軍の武器數は不明なるため、合計には其等を含まず。

不明な武器數を除いても、小銃四萬六千五百二十挺、大砲六十八門、機關銃六百四十九挺、拳銃五千五百三十挺、迫撃砲百〇五門、飛行機五臺であるが、第九、第十及び第十三軍等の如き不明な軍團の武器をも加算すれば、一九三〇年半ば頃には小銃だけでも五萬挺以上に達してゐたであらう。

次に一九三〇年前半に於て、共産軍の兵士は如何なる武裝狀態にあつたかを知るために、陸軍の基本武器たる小銃と兵士の數とを比較して見るに、兩者間の比率は左表の如くである。

第五表　一九三〇年前半に於ける支那共産軍兵士と小銃との比率

軍別	兵士數	小銃數	兵士一〇〇人に對する小銃數
第一	五、三〇〇	二、九〇〇	五五
第二	五、八八〇	四、一〇〇	七〇
第三	五、三九〇	三、六〇〇	六五
第四	八、八八〇	六、五〇〇	七三
第五	六、八六〇	五、〇〇〇	七三
第六	五、八九〇	四、五〇〇	七六
第七	六、八九〇	六、五二〇	九五
第八	四、八七〇	三、〇〇〇	六二
第九	不明	不明	不明
第十	〃	〃	〃
第十一	五、〇〇〇	三、五〇〇	七〇
第十二	八、八六〇	六、〇〇〇	六八

第一	十	三	不明	不明
第二	十	四	一、八〇〇	不明
合計			六六、六二〇	四六、五二〇（平均）五〇 七〇

註　本表は前記第三表と第四表とより作製す。合計及び平均數は不明な部分を除いて算出す。

此の統計よりすれば、一九三〇年前半に於ては、共產軍の兵士はその約七〇％が小銃を有してゐたことになり、他の者は拳銃及び木銃、土砲等の舊式武器で武裝してゐた模樣である。

かくの如くに發展した共產軍は、閻、馮等の反蔣軍討伐のため、中央軍の主力が北方に集中されてゐる際に乘じ、七月二十七日には長沙を占領し、（其後長沙は列國海軍の砲擊に因つて、僅か十日にして何鍵軍に奪回さる）、十月五日には吉安を占領する等、愈々積極的に活動を開始し、當時江西省の如きは實に全省八十一縣の內五十餘縣が共產軍の支配に歸した程であつた。

四、一九三一—三二年（民國二〇—二一年）

かくの如き共產軍の增大に驚き、一九三〇年秋季から蔣介石は討伐軍を起したのであるが、それは大した成果を收むるには至らなかつた。共產軍討伐總司令何應欽は、一九三一年五月の國民會議に於て、左記の如き芳しからぬ報告を呈出しなければならなかつた。即ちその報告[註]によれば、『江西八十一縣中(A)全縣赤化せるもの寧都、安福、永新、弋陽等十一縣、(B)縣內大部分赤化せるもの瑞昌、修水、銅鼓、萬載、萍鄉、吉安、吉水等二十五縣、(C)赤化未だ全境に遍かざるもの上饒、廣豐、玉山等三十一縣である。』と述べてゐる。これに依つて見れば、共產軍の活動せざる縣としては、江西省內に於て一九三一年前半頃既に僅かに十縣餘に過ぎなかつたことが判る。又該報告は『……全國に於て共匪の災禍を被れる地方は恐らく三百餘縣に及ばん』と云つてゐるから、その當時に於て既に三百餘縣のソヴエート區域（パルチザン區域を含む）が存在してゐたと見て可い譯である。

註　民國二十年五月十三日上海『民國日報』による。

蔣介石は前記第一次討伐に續いて一九三一年三月から五月にかけ第二次討伐を決行し、更に同年七月から九月に亘つて第三次討伐をなしたが、何れも失敗に歸し、一方九月には滿洲事變勃發し、且つ廣東に於ては反蔣軍事計劃が相當に進行して來、蔣介石としては此上討伐を續行する餘裕がなかつたので、討伐を中止して急遽南京に引上げた。於是乎、上海の黨中央は九月二十日附を以て共產軍に對して次の如き指令を發したのである。（中國共產黨の文獻に依る）

支那革命の勝利を獲得する爲め、黨中央はソヴエート區域と非ソヴエート區域に於て卽時、以下の緊急任務を發令する。

（一）　ソヴエート區域の黨（共產黨）は蔣介石の第三次進出を粉碎したる今日、卽時政治上及び軍事上に於て既得の勝利を確保し、より徹底的にコミンテルン及び黨中央の指令を執行し、より深刻にソヴエート區の階級鬪爭を發展せしめ、特に廣汎なる大衆鬪爭を强化し、以て敵の退却部隊を追出して、彼等が再び陣容を整理し、ソヴエート區域に向つて逆襲せざる樣にせねばならぬ。

（二）　可及的に零細に分散するソヴエート區を聯繫一丸となし、赤軍十六軍及び福建西部の第十二軍は江西ソヴ

エート中央區と聯絡し、湖南、湖北西部省境の第九師は須らく湖北西部の赤軍と聯絡し、第二軍團(賀龍)は須らく漢水流域に向つて發展し、以て湖南、湖北省境の第九軍と聯絡をとり、此の外第十六軍と湖北、河南、安徽省境のソヴエート及び赤軍、又湖北、湖南省境ソヴエート及び赤軍との聯絡を取らねばならぬ。

(三)　十月革命紀念日前(ロシヤ革命紀念日)に於て各ソヴエート區は須らく代表を選出し、同紀念日に於て召集されるソヴエート第一次全國代表大會に參加せしめ、以てソヴエート臨時中央政府を成立せねばならぬ(赤軍代表も勿論參加)。

(四)　赤軍を擴大强固ならしめ、堅く新制の赤軍組織條例及び政治工作條例により赤軍の改組を實行せねばならぬ、又赤衞隊(農民義勇軍)、少年先鋒隊中より、積極的分子を選拔し、赤軍を擴大せねばならぬ、卽ち中央ソヴエート區(江西)の赤軍は現有數量の三分の二、湖北、河南、安徽省境ソヴエートの赤軍は現有勢力の二分の一、湖北湖南西部ソヴエート區の赤軍は三分の一を增加し、福建西部ソヴエート區の第十六軍及び第十軍等は軍或は師に擴大せねばならぬ、此の外須らく赤軍補充團を成立し、中央區及び湖北、湖南、安徽省境ソヴエート區は各縣に一團、(一ケ聯隊)其他の各ソヴエート區は各縣に少くとも一營(一大隊)を成立せねばならぬ、又中央區には須らく警衞師を編成し、湖北、湖南、江西省境ソヴエート區には、必ず赤軍々官學校及び軍事政治學校を設立し、此外各軍では市街戰、堡壘戰の演習を開始せねばならない。

共產軍に對する黨の緊急指令は大體以上の如くであつたが、當時上海の黨中央からも、多數の尖銳分子を各地に派遣して、共產軍の指導に當らしめた。而して蔣介石が廣東政府との妥協や滿洲問題等の爲め奔命に疲れてゐる間に、共產軍は孜々として陣容の整理、充實、擴大を計り、降つて同年十一月七日には、江西省瑞金に中華ソヴエート共和國臨時中央政府を樹立するに至り、それと同時に從來の個々の共產軍は政府統制の下に正規の共產軍に改編されて、一九三一年末には左表の如く四ケ軍團(三十五軍)二十萬の兵力を有する雄大な勢力となつた。

第六表　一九三一年末に於ける支那共產軍の勢力狀態

軍團	軍團主席(政治部主任)	軍	長	兵數	活動中心地
第一軍團(朱、毛軍)	朱　德	第四軍	林　彪	一五、〇〇〇	江西省南部、寧都、龍岩
	(毛　澤　東)	第十二軍	羅　炳　輝	七、〇〇〇	福建・江西省境
		第二十二軍	陳　毅	五、〇〇〇	馬榮、石平樂
第二軍團(賀龍軍)	賀　龍	第二軍	賀　龍	一〇、〇〇〇	湘北省洪湖一帶
	(段德昌)	第六軍	段德昌	一〇、〇〇〇	湖北湖南省境の東岳山、桃花山
第三軍團(彭德懷軍)	彭德懷	第三軍	黃公畧	一〇、〇〇〇	江西南部の東固及び招携岩良村地方
	(黃公畧)	第五軍	彭德懷	三、〇〇〇	沙溪司、招携岩、蕭田
		第八軍	項　英	八、〇〇〇	良村、興國
第四軍團(鄭行爲軍)	鄭行爲	第一軍	許繼慎	一〇、〇〇〇	安徽、浙江、及び江西省東部
	(許繼慎)	第九軍	蔡　盛　基	二、〇〇〇	

第十五軍	陳資平	二、〇〇〇		
第二十九軍	不明	一、〇〇〇		
新編第七軍（李明瑞軍）	李明瑞	八、〇〇〇	江西・湖南省境	
第十六軍	李實行	八、〇〇〇	江西西南部	
第十四軍	李超	一、五〇〇	江西、安徽省境	
第十三軍	胡公晃	一、〇〇〇	浙江省南部の臺州附近	
新編第七軍	李文林	不詳	〃	
第二十一軍	張鼎丞	〃	〃	
第二十六軍	楊岳斌	〃	〃	
第三十五軍	羅桂波	〃	〃	
第十軍	周建屏	〃	〃	
第七軍	張雲逸	八、〇〇〇	廣西	
第十一軍	李明光	五、〇〇〇	海陸豐	
軍團を組織せざる各軍				
合計		二三　一一四、五〇〇		

註　本表は一九三二年一月六日の國際パンフレット通信『支那共產軍の現狀』及び、上海週報八七四號によつて作製す。軍の内不明なものは掲げてゐない。兵數の合計には第二十一、第二十六、第三十五及び第十軍は含まれてゐない。右の統計表に示された二十三個軍中十八個軍の合計は十一萬四千五百人で、兵力不明の殘餘の五個軍、それに全然不明な十二個軍（全軍は三十五個軍まであること明白なる故）の兵數を加算すれば、一九三一年末の總兵力は約二十萬近くに達してゐたと見て可からう。

次いで一九三二年初頭には更に增大して、共產軍中の主力部隊だけでも、左の如き勢力を有するに至り、更に左記九個の主力軍の外に、群小の兵數をも加ふれば、一九三二年初頭の共產軍總兵數は大體二十萬乃至二十一萬位に上つてゐたと見て大差ないであらう。

第七表　一九三二年初頭に於ける主力共產軍の勢力狀態

軍別	軍長	兵士數	小銃數	活動區域
第一軍團	鄺繼勛	八〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	河南、湖北、安徽省境地方
第三軍團	賀龍	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	湖北、湖南省境地方
第四、第五及び第十二	朱德、毛澤東及彭德懷	四〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	江西省東南部及福建省西部
第七及び第二十二	李明瑞	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	湖南、江西省境地方
第十六	方志敏	五、〇〇〇	二、五〇〇	江西省東部
第十六	孔荷寵	六、〇〇〇	三、〇〇〇	湖北、湖南、江西省境地方
合計		一五一、〇〇〇	八七、五〇〇	

註　本表は（China Forum, may, 1932）特別號（Five Years of Kuomintang Reaction）中の統計による。

下つて八月頃に於ては、次表に示するが如く非常なる發展を來し、正規軍三十三萬、それに保衞隊をも加ふれば三十五萬と云ふ尨大な數に上つてゐる。但し、此れも多少宣傳的意味を含み事實を誇張したる點が少くないやうである。故に多少割引して考へて見て、大體三十二萬位とするのが事實に近いものと思はれる。

第八表　一九三二年八月初句に於ける支那共産軍の勢力狀態

第一方面軍（總司令朱德）

第三軍長　周子昆（或は徐彥剛とも云ふ）
第七師長　陳伯鈞（或は徐彥剛とも云ふ）
第八師長　劉務人（或は李聚奎とも云ふ）
第九師長　徐斗魁（或は彭雄とも云ふ）
（以上合計兵四萬、銃一萬、機關銃五〇、砲一五、遊擊區域江西、福建南部省境）

第四軍長　（林彪）
第十師長　蕭幹臣
第十一師長　王良（七月陣亡說あり）
第十二師長　歐陽豪
（以上合計兵四萬、銃一萬五千、機關銃八〇、砲七、遊擊區域江西、廣東省境）

第十二軍長　羅炳輝
第三十四師長　周坤
第十五師長　不詳
第三十六師長　張宗遜
（以上合計兵四萬、銃一萬二千、機關銃四〇、砲八、飛行機三、遊擊區域江西、廣東、福建省境）

第二方面軍（總司令賀龍）

第二軍長　賀龍
第六軍長　段德昌
（以上合計兵三萬、遊擊區域湖北東部）

第三方面軍（總司令彭德懷）

第一軍長　許繼愼（一九三一年夏、AB團の責任者として、湖北の新集で銃殺されたとの說あり。——筆者）
第一師長　侯中央
第二師長　鄭炳生
第三師長　彭　鄂
（以上合計兵三萬、機關銃二五、砲一二、遊擊區域江西、湖南南部省境）

第七軍長　李明瑞（或は龔初とも云ふ）
第六師長　（不詳）
第二十七師長　鄭玉山
第四師長　龔　琳
特務團長　洪　超
（以上合計兵三萬、銃一萬四千、機關銃三〇、助砲一五、遊擊區域江西、湖南東部省境）

第四方面軍（總司令鄺繼勳）

第十六軍長　孔荷寵
第七師長　向永生
第八師長　張　濤
第九師長　僉　根
（以上合計兵三萬、銃二萬、機關銃二七、砲三、遊擊區域河南、湖北、安徽省境）

第二十五軍長　黃公略
第——師長　張柱坡
第——師長　胡日笙

第二十九師長　（不詳）
（以上合計兵三萬、機關銃一二、砲五、飛行機二、遊擊區域湖北、河南省境）

第五方面軍（總司令季振同）
第十三軍長　趙博生
第十四軍長　董振堂
第十五軍長　黃中岳（或は左權とも云ふ）
（以上合計兵三萬、銃二萬、機關銃四〇、遊擊區域江西、福建省境）

第六方面軍（總司令陳東立、或は東山とも書く）
第五師長　伍仲豪
第十師長　楊岳彬
第十一師長　古大存
（以上合計兵三萬、機關銃二〇、砲九、遊擊區域不明）

軍事委員會直轄政治保衞隊關係部隊

第一獨立師長	劉沛然	兵三千	銃二千	駐屯地安徽省境安福
第二〃	黃震喬	一千	四百	江西淦鄱
第三〃	黃葉眞	二千	七百	江西龍港
第四〃	鄭琦	不詳	不詳	不詳
第五〃	蕭克	三千	一千	湖南篤陽、關士、小寧一帶
第六〃	郭天民	二千	一千	龍白沙
第七〃	李天柱	千五百	五百	龍白沙
第八〃	袁溫旺	一千	不詳	不詳
第九〃	陳韶	千五百	五百	不詳
第十〃	邵式平	三千	三千	江西上饒
特務師長	劉煥	二千	五百	江西瑞金
政治保衞師	毛澤東	二千	不詳	江西瑞金

註　1、本表は『國際事情』三四三號及び『中國年鑑』一九三二——三年版による。
2、諸情報を綜合するに第四方面軍鄺繼勛軍の部に李燦、徐向前の二軍を入れるのが事實のやうである。

かくの如き共産軍の發展に伴い、一九三二年の初頭に於ては、各ソヴェート區の範圍は、江西、福建、廣東省境區（中央區）、江西、湖南省境區、江西東北區、湖北、河南、安徽省境區、湖北中部區、湖北東南部區及び湖北西部區の七大地域に擴大するに至つたので、中國共産黨中央部は、一月九日左記要旨の決議を採擇し、各ソヴェート區の擴大及びその相互の聯絡を命じた。**【註一】**

經濟危機の進化は、國民經濟の總崩壞、廣汎なる勞働者、農民の艱難苦痛を增加し、必然的に革命鬪爭の激烈、緊張を齎らした。この種の情況の下に於て、ソヴェート運動は、幾多の新たな偉大なる勝利を獲得した。國民黨はたゞにこれを消滅し得ないのみか、一時的にもこの種革命の發展を阻止することさへ出來ない。三回に亙る對ソヴェート、赤軍進擊に於て國民黨軍閥は見んごと粉粹された。赤軍は十五師以上の國民黨軍を擊破したのである。赤軍は江西南部に於て二萬以上の小銃、五百萬發の小銃彈、百五十挺以上の機關銃と、二萬以上の俘虜を獲た。江西、福建、廣東省境ソヴェート區は、一時失つた地域を恢復するとゝもに、且つ大いに擴大された、即ち上杭、武平、汀州、龍巖より發展して、建寧、淸流へ向ひ、江西東北區は、鉛山、崇安一帶のソヴェート區と聯絡せるのみなら

ず、浙江、安徽兩省に向つて發展し、常山、盪源等を占領した。湖北、河南、安徽省境區は、國民黨軍の破壞作用を消滅して、赤軍とソヴエート區を鞏固ならしめ、且つ英山、霍邱、黃安等を占領した。又湖北、湖南西部ソヴエート區の賀龍の指揮する赤軍第三軍は、第九師と合して後、根據地洪湖をして一層鞏固ならしめ、且つ襄河北岸の新たな根據地を建立した。又江西、湖北、湖南省境區も、同樣に原有ソヴエート區を擴大して、蒲圻、嘉魚、上猶崇義に向つて發展しつゝある。特に中央區に在つては、一時失つた地域を恢復したのみならず、更に江西南部の安遠、信豐等を占領した。特に江西南部の中心都市贛州を占領したことは、偉大なる業績である。孫連仲の第二十六軍全部（約二萬）が赤軍に投降して後寧都、廣昌も再び赤軍の手に歸し、撫州（臨川）をも占領した。吉安は孤立に陷り、反動勢力の江西に於ける統治區域は、南潯鐵路沿線の八九縣に過ぎない。目前の形勢を評價するに、國內に於ける階級的對立は、既に大いなる變動をなしてゐる。しかもこの變動は、勞働者農民に對して有利であり、赤軍とソヴエート運動とに對して有利である。國民黨の勢力が減少したのに反して、勞働者、農民及びソヴエート運動の力量は大いに增大し、强化された。赤軍は極めて堅固な力量となつた。赤軍遊擊隊の發展は南昌、吉安、武漢等の主要都市を包圍する形勢である。これは過去に於ける『大都市は占領せず』の策略とは、完全に不同の形勢である。ソヴエート區を擴大し、零細なるソヴエート區を聯繫して一丸となし、目前の順調なる政治的、軍事的條件を利用して、一二の主要都市を占領し、以て『革命の一省乃至數省の第一步的（除幕的）勝利』を發展することは、黨の全幅的工作及びソヴエート運動に關する議事日程に上された。各ソヴエート區に於ては、赤軍の行動をしてより積極的ならしめ、これと相呼應して行動し、一層の進出を遂げなければならない。又中央最近の軍事指令に照し、江西福建、廣東、江西東北、湖南、湖北、河南、安徽各ソヴエート區を聯絡せしめ、武漢、長江上下流及び平漢線を脅威する形勢を造成しなければならない。勝利的進擊、革命的進擊は、我等に對して、赤軍の强化、赤軍兵士に對する軍事訓練の緊要、赤軍成分の改善、都市無產階級の軍事への動員、等々を要求する。

右の決議の趣旨を要約すると、

一、ソヴエート革命の客觀的情勢は益々成熟しつゝある。（經濟恐慌及び滿洲事變等のため）

二、過去に於ける『大都市不進出』の政策を改めて政治的中心都市の占領を期する。

三、各ソヴエート區を聯繫して一丸となす。

といふに歸するが、これこそ一九三二年に於ける黨及び共產軍に對する根本方針であつたのである。かゝる際折も折一月末に至つて上海事變の發生は、共產軍に與ふるに絕好の機會を以てした。さればこそ此年に於ける共產軍の組織活躍は急速に進展し、正に一日萬里の勢であつた。以下その發展狀態を地域別に考察して見よう。

A、江西、福建、廣東省境方面

朱德軍（羅炳輝、林彪、季振同各軍を含む。季振同は孫連仲の舊部下で、一九三一年末共產軍に寢返る）及び彭德懷軍合計五萬は、朱德を總司令として第一方面軍を組織し、大擧東進して、二月二十三日福建武平を占領し、四月十四日には政府軍第四十九師張貞軍を逐うて龍巖（曾て閩西ソヴエート所在地より）を占領した。續いて十八日には長驅して南靖、龍山を、十九日には終に漳州を占領し、同地に閩南（福建南部）ソヴエート政府を樹立し、毛澤東をその主席に任命した。共產軍は引續き漳州附近を侵略し、四月廿五日頃迄に長泰、安溪、海澄、石碼、漳浦、楊鄉、石美等の地を占領

し、南支の要港厦門の陷落も目睫の間に迫るに至つたので、南京政府は大いに狼狽し、上海事件によつて一躍有名となつた第十九路軍をして之を討伐せしめんとし、五月二十五日その福建移駐を命じ、該軍の總指揮蔣光鼐を、駐閩綏靖公署主任に任じた。一方各國も軍艦を厦門に派遣して萬一に備へたのである。於是乎、共產軍は皮肉にもこの措置に對し、『第十九路軍の上海に於ける抗日鬪爭に敬意を表し、且つ軍を以て廣東に侵入するため、自動的に撤退を開始する』旨を聲明し、五月二十八日以來、一部は詔安(三十一日占領)に入り、大部隊は龍巖に集結した。一方第十九路軍は七月福建移駐を完了し、同二十六日、蔣介石は蔡廷楷を同軍總指揮兼駐閩綏靖公署主任代理に任命して、共產軍の討伐を命令した。斯くして八月上旬には龍巖を恢復し、一應全省の肅清を見るに至つた。

所が又九月下旬に至るや、方志敏軍は福建侵入を開始し、り朱毛軍の有力なる一部は、黎川、南城方面より福建省光澤、邵武、泰寧を侵し、更に進んで順昌に逼迫した。同地方の守備に任じてゐた第五十六師(劉和鼎)、獨立第四旅(周志群)等は之を支ふるを得ず、辛うじて浦城、建陽、順昌、沙縣等を保持してゐた。又朱毛軍は方志敏軍と合體し、更に延平に迫らんとし、福州亦漸く危險を感ずるに至つたが、福建省南部地方に占據して地盤の擴張に專念してゐた第十九路軍は、此機に乘じ、その一部を北進せしめて此れに對せしめた。於是、共產軍は第十九路軍部隊の北上に先ち、十一月七日頃撤退を開始した。

所で玆に注意すべきことは、共產軍の福建進出の原因目的並に此の方面に對する共產軍今後の方針に就てであるが、これに關し、廣東獨立第三師長李漢魂軍の捕虜羅桂元(共產軍第三軍作戰科長)の言に依れば、その原因は、【註二】

一、南京政府の經濟封鎖政策に堪へ兼ねて、資金調達の必要に迫られたこと、(共產軍は漳州占領によつて百萬元調達の目的を達したと傳へられてゐる。——筆者)

二、經濟的に窮迫し生計が益々困難となつたこと、

に在り、而して今後の方針としては、福建東部及び廣東方面は、【註三】

一、言語が不通で慣習異なること、

二、民衆の反共思想が普及してゐること、

三、民團の組織が鞏固なること、

等に因り、當分此の方面への進出を中止して專ら福建西部のソヴエート區域の强化に力を注ぐことに變更せるものゝ如くである、と述べてゐる。

註一　中國共產黨の文獻に依る。

註二　民國二十一年七・三〇——八・一〇廣東『民國日報』所載『赤匪內容の一頁』による。

註三　同　上

B、湖北、河南、安徽省方面

湖北省は元來第二共產軍方面軍(賀龍、段德昌)、第四方面軍(孔荷寵、鄺繼勛)の活躍せる地盤である。賀龍は漢口攻略の目的を以て、兼任の第二軍(兵力約三萬と稱せらる)、及び段德昌部隊の第六軍(兵力前者と殆ど同樣で騎馬隊二大隊、機關銃一中隊、拳銃隊一中隊を有すと報ぜられてゐる)、その他赤衞隊(約三萬)を以て一九三二年四月中旬より行動を起し應城、京山、天門附近に於て徐源泉軍(中央軍第四十一師、第四十四師、第四十八師、獨立第二、第三旅)に對し

攻勢をとつたが、地形險難な爲め不成功に終つたので、主力を平漢線東方地區に移動し、麻城附近を根據として許繼愼の第一軍と聯繫して南下し、四月中旬考感附近に於て衝突し、中央軍に多大の打擊を與へた。

六月二十六日には雞公山（河南湖北省境）を襲つて避暑中の米人宣教師及びその家族七名を人質として拉致した。

六月二十八日には羅田縣城が再び共產軍の手に歸し、次いで七月中旬には麻城、黃安等の各縣も前後して陷落した。

七月下旬六安は包圍され、霍邱は再び危機に頻した。ために蚌埠には十萬の避難民が殺到し、當局はその處置に窮した程であつた。八月に入つてから漢水河岸の應城、天門一帶に跳梁してゐた賀龍の部隊は突如漢水を渡つて荊門、遊安等の各縣下に侵入し、討伐軍に對して攻勢を取つた。孔荷寵軍は八月三日咸寧縣城を占領し、同地守備の討伐軍第八十二師の二ケ營は共產軍に寢返りを打つた。而して此頃湖北省の四分の一は、共產軍の支配に歸してゐた。これより先蔣介石は、六月初旬より第四次の討伐に從事したけれども捗々しからず、漸く九月に入つてから討伐軍の攻擊は好調を辿つて來、九月初めには安徽省の獨山を奪回し、蘄埠と英山を包圍し、九月六日には湖北省東部の共產軍根據地たる新集を占領し、飛行機レニン號及びマルクス號を分捕つた。而して此の新集の占領は共產軍に對して致命的打擊を與へた。次いで九月十二日には賀龍、段德昌の部隊が過去六年間蟠踞してゐた洪湖（漢口の西方數百里、長江に面する湖水の名で、その中には廣大な州が幾つもある）一帶は完全に徐源泉軍の手中に歸し、九月二十日には安徽省に於ける共產軍最古の據根地で、約六年の歷史を有する金家寨も遂に第十四軍衞立煌のため占領せられた。その爲めに鄂繼勛は失脚し、同軍の大部分は徐向前（象謙）の引率の下に平漢線武勝關附近を橫斷西進し、その西方大洪山（安陸東北方）附近に於て、同地附近に在つた賀龍軍の一部と合し、北折して河南省南部に入り、十一月下旬頃陝西省西安に迫つたが、陝西の楊虎城軍竝に中央軍の追擊隊たる第一師（胡宗南）、第六十五師（劉茂恩）、第四十四師（蕭之楚）等の壓迫を受け、西南進して十二月中旬、陝西省西南部漢中に達した。

五、一九三三年—現在（民國二十二年—現在）

一九三二年（民國二十一年）の蔣介石の第四次討伐は、前述の如く相當の成功を收め得た爲め、一九三三年初頭に於ける共產軍は從つて相當の苦境に立たされるに至り、徐向前（鄂繼勛の後任者）軍は四川東部に追込まれ、賀龍軍は湖北西部地帶に逃げ込み、孔荷寵は江西北部に遁れ、彼等の最後の賴みとする江西中央區とそれを拱衞する三區、所謂江西四區のみが、最後の根據地となつて、蔣介石の第五次討伐と對抗しなければならなかつたのである。於是乎、必然彼等は機先戰法に出で廣東、湖南の兩戰線は守勢を取り、江西北部、福建西北部に向つて主力を集中し、死物狂ひの奮鬪を試みた。江西北部の西衞金雞の如きは、六回の爭奪を繰返へしたといふ程の激烈さを傳へてゐる程である。

かくの如き共產軍の奮戰に對し、蔣介石は江西省丈けに三十萬以上の大軍を動員し、宋子文の稅警團迄繰出し、經濟封鎖を併用しつゝヂリ〳〵に押して行つた。その間十一月末に勃發した福建政變のためその方面に兵力を轉用するの已むなきに至り、一時討伐戰の進行を阻止せられたけれども、福建政權も二ケ月足らずして潰滅し去り、一方廣東、湖南軍閥方面との協力も順潮に行つたので、年末から年初（一九三四年）にかけて、江西四區の約五分の一乃至四分の一の地區を恢復し得たのである。

第五次討伐の中心目標たる江西方面では、以上の如く多少の成功を收め得たけれども、その他の方面では、國民政府

の苦痛の種が益々多くなつた。徐向前の川陝區が通江、巴中、南江の三縣から渠縣、蓬安、南部、儀隴等の十數縣に成長したのを筆頭に、賀龍の湘鄂西區（湖南湖北西部）が擴大强化され、蕭克の一部は貴州方面に進出し、新に陝甘區が創成され、（此點に就ては、從來の所謂北方落後論を打ち破つたと黨中央では勝利の宣傳に利用してゐる）湖北、河南、安徽方面の一時中央軍に奪回された地區も、部分的に再建され、（立煌縣及び金家寨と新集の中間地帶等）此外、新疆にはソ聯邦の手が延びて、大部分赤化してゐるとの報が荐りに傳へられて居り、（盛世才は既にソ聯の傀儡となつてゐる模樣である。）斯くして、今や四川、陝西、甘肅、新疆、を經てソ聯邦と連絡する所謂コミンテルン・ルートの完成近しとの警報さへ喧傳される程迄になつてゐる。

而して現在に於ける共産軍の兵力は、（正規共産軍以外の兵力をも含めて）各方面の資料を綜合するに、左の如く、大體二十萬近くに上つてゐるやに觀察せらる。（民國二十三年——一九三四年——十月末現在）

共産軍の最高幹部

軍事委員會主席兼第一方面軍總司令	朱　德
軍事委員會副主席兼第三軍團長	彭　德　懷
政治委員	周　恩　來
總司令部參謀長	葉　劍　英
政治部長	王　稼　穡
政治部副部長	袁　國　平

各軍幹部・兵力並に活動地帶

（第一方面軍）

A　第一軍團　軍團長　林　彪

政治委員　聶　榮　臻

參謀長　陳　奇　涵

政治主任　羅　榮　桓

同副主任　李　卓　然

第一師（不明）

第二師　師長　徐　彥　剛

第三師　同　劉　運　洪

計　二五、〇〇〇

主力は江西省永豐東方七都一帶より樂安南方招携、善和方面へ移動、第三師は黎川南方樟村、橫村一帶に在り、第五、第九軍團と共に積極的に中央軍と接觸してゐる。

B　第三軍團　軍團長　彭　德　懷

政治委員　滕　大　遠

參謀長　鄧　萍

政治主任　賀　田
第四師　師長　張　錫　龍
第五師　同　泰　淮　洲
第六師　不明
計　二〇、〇〇〇

主力は福建省龍巖、延平、漳州附近にて中央軍第四師と接觸してゐたが、逐次江西、湖南省境一帶に集中しつゝあり

C　第五軍團　軍團長　董　振　堂
政治委員　朱　瑞
參謀長　陳　伯　釣
政治主任　劉　伯　堅
第十三師　師長　趙　博　生(?)
第十四師　同　同
第十五師　同　左　權(李清雲?)
新編第七師(不明)
計　一五、〇〇〇

江西省資溪、黎川、南豐一帶に亘つて中央軍と接觸を續けてゐる。

D　第七軍團　軍團長　方　志　敏
副指揮　王　一　弱
第十九師　師長　不　明
第二十師　同　同
第二十一師　同　同
計　五、〇〇〇

江西省資溪縣桐埠の公司嶺を根據地とし、一部は黎川方面にて第一、第五、第九軍團と行動を共にし、葛水一帶に在り。

E　第九軍團　軍團長　不　明
第一第五軍團と行動を共にす。

F　第十軍　軍長　周　延　平
第三十師　師長　不　明
第三十一師　同　同
第三十二師　同　同
計　三、〇〇〇

第七軍團の指揮下に在りて、江西省玉山、德興縣境に盤據す。

G 第十一軍　軍長 周建屏　約 三、〇〇〇

江西省黎川方面に在り。

H 第十二軍　軍長 羅炳輝　約 四、四〇〇

福建省永安寧、洋一帶に盤據す。

此外、獨立第二十二師、（兵力二、〇〇〇）、獨立團二個（兵力六、〇〇〇）、獨立第四師（兵力二、〇〇〇）、獨立第五師（兵力一、〇〇〇）及び瑞金紅軍學校生徒隊を改編せる警衞師（兵力二、〇〇〇）等あり。

I 第六軍團　軍團長兼湘鄂贛西軍區總指揮 孔荷寵（孔投降後は蕭克の節制下に在りとの說あり）

副指揮 嚴圖閣
參謀長 郭子明
政治委員 黃志强
第十六師 師長 高詠生（逮捕されたとの說あり）
第十七師 同 不明
第十八師 同 嚴圖閣
第四十五師 同 不明
計 一五、〇〇〇

主力は江西省萬載縣高村附近に在り、十六、十七師は銅鼓、奉新、修水各縣に遊擊してゐたが、目下省境山岳地帶より李天桂軍と共に湖南及び貴州方向へ移動しつゝあり。

J 第十七軍　軍長 蕭克　計 三、〇〇〇

K 湖南江西軍區總指揮　蔡會文
副指揮 李天桂
新編第八師及び獨立十二師 師長 不明
計 一、五〇〇

七月始め江西省より討伐包圍線を突破して湖南省の汝域を占領したのをきつかけに、桂陽、新田、新寧等の各縣を相次いで占據し遂に貴州に入り、主力は目下貴州の天柱、三江、玉屏の各縣に在りて賀龍軍と合流せんとしてゐる。

（湖北共產軍）

A 鄂南軍區（孔荷寵麾下）

總指揮兼政治主席　張壽波
同 副主席 葉金

獨立第三師及び江北獨立師　五、五〇〇

舊職長武線を襲ひ、その後湖北省、通山、崇陽、咸寧、陽新等各縣に遊擊し、目下通山縣內に在り。

B　鄂東軍區

第二十五軍　軍長　吳煥先

政治委員兼遊擊司令　戴季英

第五十四師　師長　徐海東

第七十五師　師長　周希達

計　八、〇〇〇

湖北省黃陂、黃安、麻城、羅山縣境より河南省南部各縣並に安徽立煌縣方面に遊擊す。

第二十八軍（不詳）第二十五軍は合體すとも傳へらる。

C　鄂西軍區

第二方面軍　總指揮　賀龍

政治部長　關印南

第七師　師長　湯某

第八師　師長　夏曦

遊擊司令　盧升

第九師　師長　張某

遊擊司令　黃心如

計　一、二〇〇

曩に利川及び黔江（四川省）縣城を占領したが、後之を放棄し、その後該兩縣及び施南、宣恩、咸豐、來鳳、鶴峯、永順縣等に遊擊し、二月初旬又々桑植縣城を占領（六回目）し、目下該縣城及び省境山間地方一帶に在り。

（四川共產軍）

第四方面

總指揮　徐向前

副指揮　王樹聲

政治部主任　陳昌浩

第四軍軍長　何畏

第十師　師長　王宏昆

第十一師　師長　倪志亮

第十二師　師長　何畏（兼任）

第九軍　軍長　余海州（?）

第廿五軍　軍長　王樹聲（兼任）